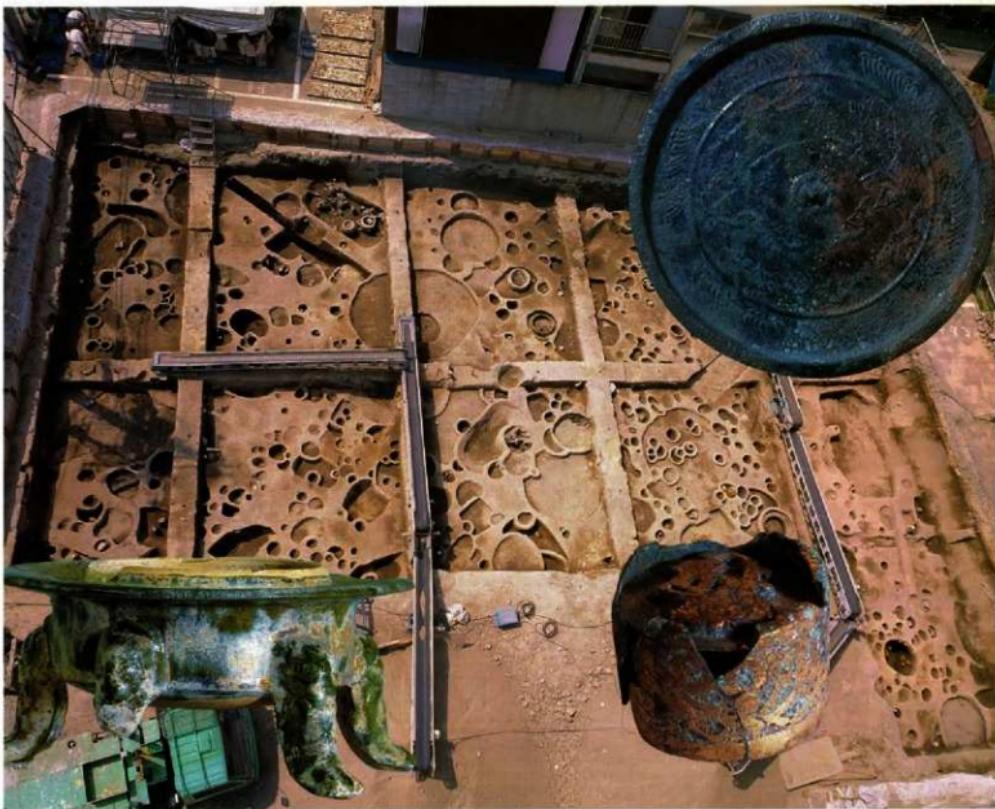


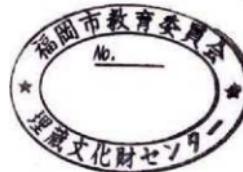
# 博 多 50

—博多遺跡群第79次調査の概要—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第447集



1996

福岡市教育委員会



福岡市埋蔵文化財調査報告書第447集『博多50』

訂 正

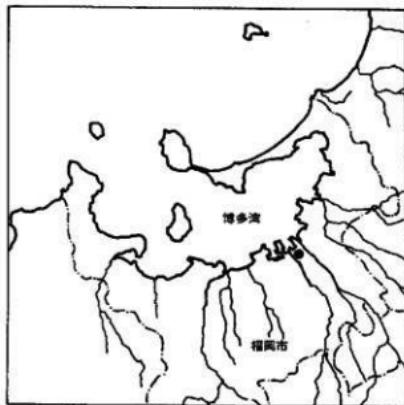
130ページ18行目の「その同位体比は中国産」の後に、次の1行を挿入して下さい。

「 の鉛の範囲に入るから、このガラスは中国で作られた可能性がある。 」

# 博 多 50

—博多遺跡群第79次調査の概要—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第447集



遺跡調査番号 9259  
遺跡略号 HKT79

1996

福岡市教育委員会



1. 3095号遺構出土「神功開寶」



4. 1827号遺構出土青白磁灯火器



5. 2568号遺構出土青白磁合子



2. 2203号遺構出土ガラス蓋



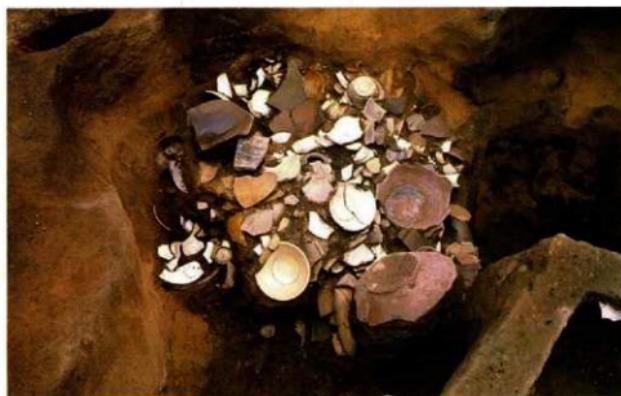
6. 2053号遺構出土青白磁合子



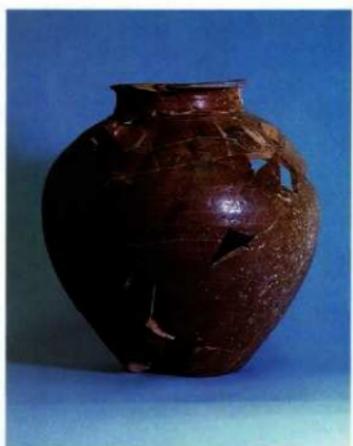
3. 2203号遺構出土ガラス小壺



7. A-2区2面下出土天目茶碗



8. 1827号遺構遺物出土状況



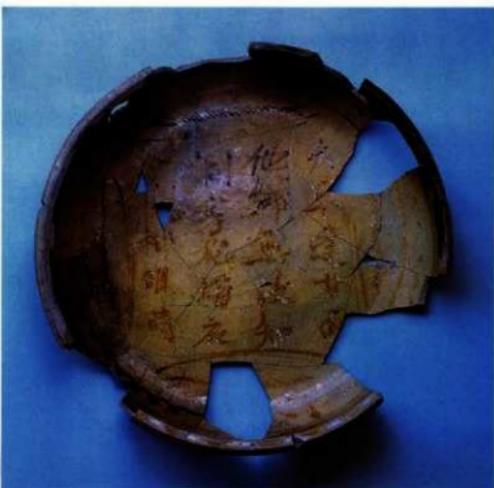
1. 2714号遺構出土褐釉四耳壺



3. 1827号遺構出土黃釉鐵繪盤



2. 2714号遺構出土褐釉水注



4. 536号遺構出土黃釉鐵繪盤

## 序

福岡市博多区の北部、JR博多駅から博多港にかけての都心部の地下には、博多遺跡群が眠っています。本遺跡群は、古代から中世を通じて、東アジア、とりわけ中国・朝鮮との貿易で繁栄した都市遺跡です。政治性の希薄な、商業的かつ国際的な都市という点では、わが国では希有な遺跡であり、アジアの交流拠点都市をめざす現在の福岡市の原点と言ふこともできるでしょう。

しかし、残念なことには、現在の都心部にあたるため、種々の開発行為による遺跡破壊は避けられません。福岡市教育委員会では、昭和57年度以降、必要に応じて発掘調査を実施して、これに対応してまいりました。本書は、その第79次調査の成果を報告するものです。

第79次調査では、奈良時代の井戸から皇朝十二銭のひとつである「神功開寶」が出土したのを始め、12世紀前半の土坑からは、火事にあって捨てられた大量の輸入陶磁器やガラス容器が出土、14世紀後半から江戸時代にかけては、耕地化していたことを確認するなど、さまざまな貴重な成果が上がりました。

本書が、市民の皆様をはじめ、学術研究の場で活用されることを念願しております。また、調査から整理、報告まで、さまざまな面でご協力をいただいた松下興産株式会社ならびに東海興業株式会社をはじめとする多くの方々に、心から感謝を表します。

平成8年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花剛

## 例言・凡例

1. 本書は、ビル建設に先立って、福岡市教育委員会が発掘調査を実施した、博多遺跡群第79次調査（福岡市博多区冷泉町46番外）の概要報告書である。
2. 本書の編集・執筆には、大庭康時があたった。
3. 本書に使用した遺構実測図は大庭康時および大庭智子・梶嶋政司・石井雅之・石橋亮・井上真由美が、遺物実測図は大庭康時・井上涼子・上塘貴代子・佐藤信・森本朝子が作成した。製図には、大庭康時・井上涼子・折茂由利・上塘貴代子・萩尾朱美・森本朝子があたった。
4. 本書の遺構実測図中に用いている方位は、すべて磁北である。また、文中で方位を述べるにあたっても、磁北を基準にしている。
5. 本書で報告する遺物については、遺構ごとに通し番号をつけて記述した。遺物写真的番号は、実測図の番号に一致させている。また、陶磁器の実測図中に矢印を書き込んだものがあるが、これは施釉の範囲を示している。
6. 本調査にかかる遺構写真および遺物写真は、大庭康時が撮影し、萩尾朱美が焼き付けした。
7. 本書にかかる遺物および記録類の整理には、牛垣綾子・今井民代・上塘貴代子・古谷宏子・森寿恵・入江規子・江上由喜子・野田真巨・長谷川浩美・森純子・矢野桂子・岡山智英子があたった。また、銅鏡の銷落とし・判読・拓本は、大庭智子による。銅製品の銷落としは、山田美樹がおこなった。
8. 本調査にかかるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

遺跡調査番号	9259		遺跡略号	HKT-79	
調査地地番	博多区冷泉町46番外		分布地図番号	天神49	
開発面積	1,096.79m <sup>2</sup>	調査対象面積	610m <sup>2</sup>	調査実施面積	610m <sup>2</sup>
調査期間	1993年2月22日～10月29日				

## 本文目次

第一章 はじめに .....	1
1. 調査にいたる経緯 .....	1
2. 発掘調査の組織と構成 .....	1
3. 遺跡の立地と歴史的環境 .....	2
第二章 発掘調査の記録 .....	5
1. 発掘調査の方法と経過 .....	5
2. 基本層序 .....	7
3. 発掘調査の概要 .....	10
第1面 .....	10
第2面 .....	21
第3面 .....	24
第4面 .....	25
第5面 .....	25
第6面 .....	26
4. 遺構と遺物 .....	37
(1) 井戸 .....	37
1805号遺構 .....	37
3095号遺構 .....	40
(2) 土坑 .....	42
174号遺構 .....	42
272号遺構 .....	45
389号遺構 .....	47
876号遺構 .....	50
1539号遺構 .....	53
1874号遺構 .....	87
2007号遺構 .....	90
2203号遺構 .....	92
2714号遺構 .....	94
(3) 炉遺構 .....	103
784号遺構 .....	103
2168号遺構 .....	105
(4) 道路状遺構 .....	106
(5) 埋葬遺構 .....	107
2164号遺構 .....	107
5. その他の遺構 .....	110
(1) 井戸 .....	110

957号遺構	110	1644号遺構	110
1690号遺構	110	2182号遺構	110
2184号遺構	110	2986号遺構	111
3175号遺構	112	3193号遺構	112
3201号遺構	112	3231号遺構	112
(2) 土坑			113
A. 方形堅穴状土坑			113
1792号遺構	113		
B. 円形堅穴状土坑			113
1350号遺構	113	1655号遺構	113
2029号遺構	113	2030号遺構	114
2177号遺構	115	3008号遺構	115
3082号遺構	115	3226号遺構	115
C. 方形板枠土坑			115
3224号遺構	115		
D. 烧土坑			115
2950号遺構	115		
E. 土師器一括廐棄土坑			116
284号遺構	116	376号遺構	116
579号遺構	116	1342号遺構	116
6. その他の出土遺物			117
7. 銅鏡			123
第三章 まとめ			126
1. 古代の遺構・遺物について			126
2. 12世紀の輸入陶器一括廐棄遺構について			126
3. 中世の遺構・遺物について			127
附編			
博多遺跡群第79次調査で出土した緑色ガラス容器の化学分析と鉛同位体比測定			
名古屋大学名誉教授	山崎一雄		
奈良国立文化財研究所	肥塚隆保		
室蘭工業大学	白幡浩志		
	129		

# 第一章 はじめに

## 1. 調査にいたる経緯

1990年3月28日、松下興産株式会社福岡営業所から福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区冷泉町46番外に関する埋蔵文化財事前調査願が提出された。申請地は、中世の国際貿易都市として知られる博多遺跡群の南部にあたり、周辺の発掘調査からも遺跡の存在が予想される地点であった。

松下興産から出された開発内容は、ビル建設で、地下掘削、基礎杭の打ち込みなど、大深度の掘削をともなう内容であった。申請地の調査前の現況は駐車場だが、松下興産による土地取得が行われる前までは、太平洋戦争前から続いた町屋の一角であった。したがって、遺構の遺存状態も良好であると予想され、あえて試掘調査を行わずに、発掘調査を前提とした協議に入った。

その後、松下興産の開発計画の延期で、発掘調査自体も延期されていたが、1992年度にはいって、発掘調査の実施が行程に上り、1993年1月11日の現地での協議において、2月22日より発掘調査に着手することが確定した。

## 2. 発掘調査の組織と構成

調査委託	エム・アイ・ディ土地建物株式会社	取締役社長	関根恒雄
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	尾花 隆
調査統括	同 埋蔵文化財課	課長	折尾 学 (前任) 荒巻 輝勝 (現任)
	同 第二係長	山崎純男 (前任) 山口譲治 (現任)	
調査庶務	同 第一係	吉田麻由美 (前任) 西田結香 (現任)	
調査担当	同 第二係	大庭康時	
調査作業	梶嶋政司 那達民 (福岡大学) 石井雅之 井上真由美 (西南学院大学) 石橋テル子 石橋亮 岩隈史郎 江越初代 大庭智子 近藤澄江 椎藤利雄 篠崎伝三郎 関加代子 関義種 濑戸啓治 芹野謙蔵 曾根崎昭子 津川真千代 寺園恵美子 村崎祐子 村田敬子 柳瀬亞紀 柳瀬伸 古川均 吉住シヅエ 萬スミヨ		

また、発掘調査・資料整理に際しては、亀井明徳氏 (専修大学)、佐伯弘次氏 (九州大学)、桜木晋一氏 (九州帝京短期大学)、山崎一雄氏 (名古屋大学名誉教授) らから御教示・御指導を賜った。

このほか、発掘作業に関わる諸条件の整備・調査中の便宜については、松下興産株式会社福岡営業所 (深尾正人氏)、東海興業株式会社九州支店 (久保敏夫氏) よりご協力をいただいた。記して、謝する次第である。

### 3. 遺跡の立地と歴史的環境

博多遺跡群は、中世都市「博多」を主として、弥生時代から近世、さらに現代まで続く複合遺跡である。地理的には、玄海灘に面する博多湾岸に形成された砂丘上に位置し、西を博多川（那珂川）、東は江戸時代に開墾された石堂川（御笠川）、南は石堂川開墾以前に那珂川に向かって西流していた旧比恵川（御笠川）によって囲まれる。

この御笠川と那珂川にはさまれた地域は、弥生時代以後の主要な遺跡がならぶ地域でもある。上流側から著名なものをあげると、奴国の中核地であり、奴國王墓も発見された須玖岡本遺跡を中心とする一帯の遺跡群、朝鮮系無文土器が多量に出土した諸岡遺跡、日本最古の水田・環濠集落として知られる板付遺跡、弥生時代の青銅器鋳造地のひとつである那珂遺跡、弥生時代後期の環濠群や網で巻いた銅劍が壺棺より出土した比恵遺跡など、ほぼ直線上にならんでいる。博多遺跡群で調査されている弥生時代中期・後期の集落・壺棺墓群は、これら諸遺跡の延長上で理解できるだろう。さらに、そのまま博多湾を渡ると、志賀島の「漢委奴国王」金印出土遺跡にある。弥生時代中期に、周辺に可耕地を持たない砂丘上に忽然と出現する博多遺跡群は、奴国の海上活動の拠点集落として位置づけられる。5世紀後半に築かれたとされる博多1号墳（前方後円墳、推定墳丘長60m）も、那珂川右岸に展開する一連の前方後円墳の首長墓の流れの中で考えられよう。6世紀後半には、那の津官家が設置される。その推定位置については、福岡市南区三宅が当たってきたが、1984年比恵遺跡で横列に囲まれた倉庫群が発見されるによんでこれを官家にあてる説が浮上してきた。同様の、横列に囲まれた倉庫群は、早良区有田・小田部遺跡群でも複数検出されており、その性格・実態についてはいまだ定まった評価をあたえられていないが、これらの地城が、有力な地位を保っていたことを示している。

律令時代にはいると、御笠川の最上流に大宰府がおかれて、九州の政治・軍事的中心地となる。博多湾岸には、博多遺跡群とは入り海ひとつを隔てた西の丘陵上に、対外交渉の拠点として鴻臚館がおかれた。博多遺跡群に官衙がおかれた記録はないが、石帶・銅製帶金具・墨書須恵器・須恵器碗・皇朝鏡・鴻臚館式瓦・老司式瓦などが出土しており、律令官人の存在が推定できる。

平安時代後半になって律令体制が弛緩すると、対外貿易も京都の中央政府の直接的掌握から、大宰府を通じての管理へと変質する。これが、大宰府官人による蓄財のための私貿易の拡大をもたらしたであろうことは、想像に難くない。こうした流れの中で、11世紀には、博多に宋商人の居留が知られるようになる。博多遺跡群が本格的に繁栄・展開するのは11世紀後半になってからで、膨大な量の輸入陶磁器が出土している。さらに、12世紀末から13世紀前半にかけて、聖福寺・承天寺の2大禅刹が博多禪首（博多在住宋商人）の後押しの元で、相次いで建立され、急速に都市化が進行したと見ることができる。

鎌倉時代、2度にわたる元寇で博多付近は戦場になるが、13世紀末には、鎮西探題が博多に設置され、博多は貿易の中心地というのみではなく、九州の政治的中心地という面も持つにいたる。遺構の上では、13世紀末から14世紀初めにかけて、あちこちに道路がつくられており、それらは戦国時代まで続いている。これらの道路は、必ずしも相互に規則性・統一性を持ってはいないが、中世後半を通じての博多の街区・景観はここにつくられたと言えよう。

南北朝時代頃から、博多の海岸部にあたる息浜の勃興・発展が著しく、博多の繁栄の中心は、内陸側の博多浜から、<sup>八代川</sup>息浜へと移る。息浜商人らは、中國大陸の元・明のみならず、高麗・朝鮮、さらには琉球・東南アジアにまで進出して、貿易を行った。博多遺跡群からは、タイやベトナムの陶磁器が出土しており、これを裏付けている。また、この時代の民間貿易は、海賊である倭寇によって担われ

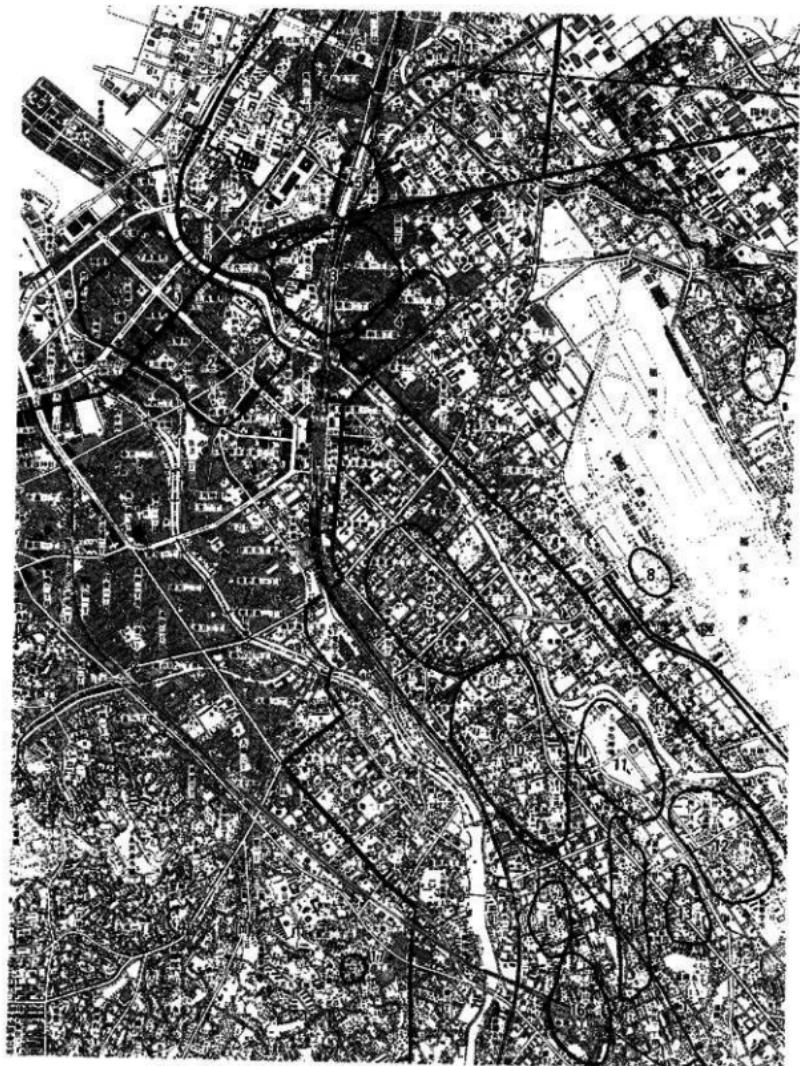


Fig. 1 周辺遺跡分布地図(1/36,000)

- 1.博多遺跡群 2.同79次調査地点 3.堅幣遺跡群 4.古塚遺跡群 5.吉原本町遺跡 6.箱崎遺跡群 7.席用青木遺跡  
8.柴居遺跡 9.比恵遺跡群 10.那珂遺跡群 11.那珂磐体遺跡 12.板村遺跡 13.諸箇B遺跡 14.誰岡A遺跡  
15.五十川高木遺跡 16.井尻遺跡群 17.三宅庵寺

た一面もあり、博多にも倭寇の存在が記されている。

一方、南北朝時代、足利尊氏によって博多に九州探題がおかれたが、九州では懷良親王をいただく南朝方や、反尊氏である足利直冬の勢力が強く、探題の政治力・軍事力は強力なものとはなりえなかつた。歌人としても知られる探題今川了後のものとでは、南朝勢力は圧倒され、了後は博多にあって朝鮮貿易などに積極的に乗り出す。しかし、了後のこのような勢威は、將軍足利義満の不興を買い、了後は探題の任を解かれ、九州を去る。その後、博多は筑前の少弐氏、豊後の太友氏、周防の大内氏らによる争奪の対象となつた。室町時代後半の博多は、堺とならんで自治都市として著名だが、たびたび兵火にかかって焼死している。

1586年には中国の毛利氏の軍と対峙した薩摩の島津氏の軍によって焼かれ、灰塵に帰す。翌年、島津氏を逐つて九州平定を遂げた豊臣秀吉は、博多の復興を指示した。これがいわゆる太閤町割であり、この時点で鎌倉時代以来続いた博多の諸道路、街区は廢される。太閤町割は、それまで町のあちこちで異なつていていた道路の方向や街区を統一し、博多全体を長方形街区と短冊型地割りで仕切るものであつた。こうして、中世都市博多は近世都市に生まれ変わつた。

太閤町割と豊臣秀吉の朝鮮出兵によって、博多は再びよみがえる。しかし、江戸時代にはいり、鎖国政策がとられるに及んで、貿易都市としての博多は幕をおろした。そして、黒田氏52万石の城下町福岡と対をなす商人町博多として福岡藩の藩都となり、そのまま明治維新を迎えたのである。

#### 参考文献

- 穠京・下山正一・大庭康時・池崎謙二・小林茂・佐伯弘次 1991 「博多遺跡群周辺における遺跡形成環境の変遷」「日本における初期弥生文化の成立」 横山浩一先生退官記念事業会
- 大庭康時 1992 「中世都市遺跡の調査=博多」「季刊考古学』第39号 雄山閣
- 1995 「大陸に開かれた都市 博多」 綱野善彦・石井進編『中世の風景を読む—七 東シナ海を囲む中世世界』 新人物往来社
- 龜井明徳 1986 「日本貿易陶磁史の研究」 同朋社
- 川添昭二 1975 「鎌倉時代の对外関係と文物の流入」『岩波講座日本歴史6 中世2』岩波書店
- 1987 「鎌倉中期の对外関係と博多—承天寺の開創と博多麻呂謝國明一」
- 1988 「鎌倉初期の对外関係と博多」箭内健次編『領国日本と国際交流』上巻
- 吉川弘文館
- 川添昭二編 1988 「よみがえる中世（一）東アジアの国际都市博多」 平凡社
- 佐伯弘次 1987 「中世都市博多の発展と怠浜」「日本中世史論叢」 川添昭二先生追憶記念会
- 1993 「中世の博多袖浜をめぐって」『法玲瓏』第2号 博多研究会
- 堺市博物館 1993 「博多と堺」展図録
- 博多研究会編 1992～ 「法玲瓏」1～3号
- 福岡市博物館 1992 「堺と博多」展図録
- 宮本雅明 1989 「空間志向の都市史」 高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門—空間』東京大学出版会
- 森克己 1975 「新訂日宋貿易の研究」 国書刊行会

## 第二章 発掘調査の記録

### 1. 発掘調査の方法と経過

本調査地点は、申請地と調査対象面積との間に十分な余裕がなく、調査によって出た残土を申請地内にためておくことはできなかった。そこで、調査範囲を1区・2区に二分し、1区については、残土を2区に仮置きしてすべて搬出、2区は1区の調査終了部分を埋め込んで残土をおくことにした。

ところで、博多遺跡群は、調査地点によって若干の差異はあるものの、おおむね古代から近世、さらには現代まで続く複合遺跡である。通例、これらの時代を異にする遺構は、厚い包含層の中に重層的に残っており、本調査地点においても、同様の状況が予想できた。さらに、本調査地点は、太平洋戦争の空襲による火災に遭っておらず、最近まで町屋の建物が残っていた地域で、大規模な搅乱の掘り込みはないものと思われた。そこで、1区については、重機によって近・現代の搅乱層・表土層を除去した後、一辺6メートルの方眼を原則としたグリッドを設定、土層観察用の畦を残して、その内側を調査、掘り下げるにした。ただし、2区では、1区の調査に多くの期間が割かれるためグリッドの畦を設けず、1区の成果にしたがって、密度の濃い遺構面に限定して調査・掘り下げを行った。

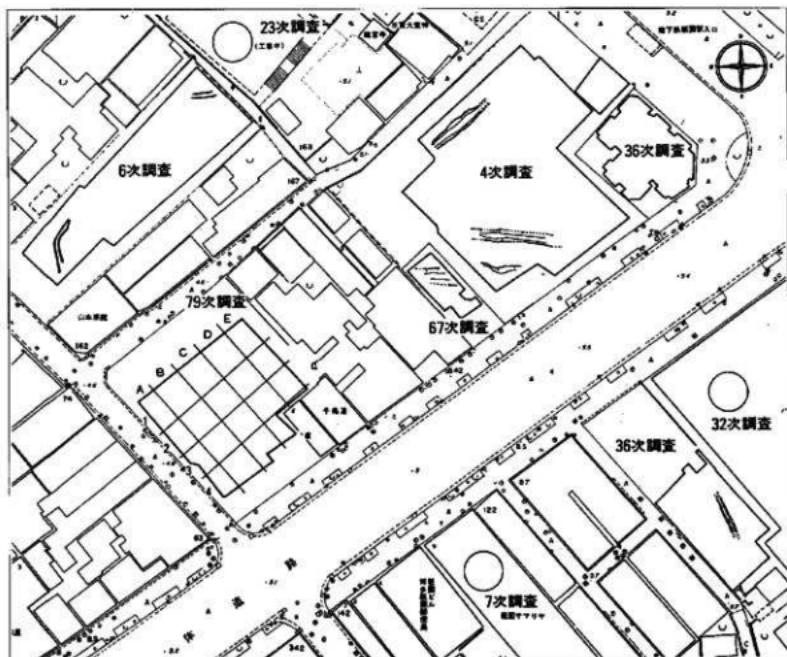


Fig.2 第79次調査地点位置図 (1/1,000)

その結果、1区で5面（一部6面）、2区で3面の調査を実施している。

遺構検出面の設定は、整地面を基準にしたが、場所によって土層の認識が困難な部分があり、また、整地面が見あたらない部分もあり、完全な同一整地面の検出に成功したとはいえない。しかし、グリッド畦の壁面で一応の土層確認はできたので、大きな間違いは犯していないと考える。

調査に際しては、重機で表土を除去した面において、まず遺構検出を試みた。この面では、遺構はほとんどなく、また、その下にも無遺物層が堆積していることがわかった。そこで、この面での遺構調査を放棄し（0面）、下位の整地面まで掘り下げることにした。こうして、無遺物層の下の整地面で設定したのが第1面で、以下順次掘り下げを繰り返して、第2面以下を調査した。各面からの包含層の掘り下げに際して出土した遺物は、掘り下げの元になった面を冠して、「第〇面下」として取り上げた。

2区の調査においては、期間的な制約から3面程度の調査が限界であると判断した。そこで、無遺物層下の整地面である1区第1面に対応する面、砂丘砂層の上面で最終遺構面である第5面に対応する面と、その間でもう1面を調査することにした。後述するが、1区第1面が2区第1面に、1区第3面が2区第2面に、1区第5面が2区第3面に相当する。

発掘調査の記録については、遺構全体図として、グリッドごとに20分の1実測図を作成した。その上で、必要に応じて、個別に10分の1の実測を行った。調査地点位置図ならびに周辺測量図については、調査地点が市街地の中で、ほとんど見通しがえられず、また交通量が多くて危険であることから、直接の平板実測はあきらめざるをえなかった。そこで、トランシットによる三角測量で、調査区の主要な点と周辺の目印になる点をはかり、福岡市土木局作成の500分の1の道路台帳地図に落として作図した。実測に際しての標高は、埋蔵文化財課が博多遺跡群内に設置した測量基準点からひいた。



Ph.1 調査地点遠景、左手奥は東長寺（西より）

## 2. 基本層序

本調査地点は、博多遺跡群が立地する博多湾岸の三列の砂丘のうち最も内陸側砂丘の南側に位置する。遺跡の基盤となっているのは、砂丘の上面である淡黄色砂である。

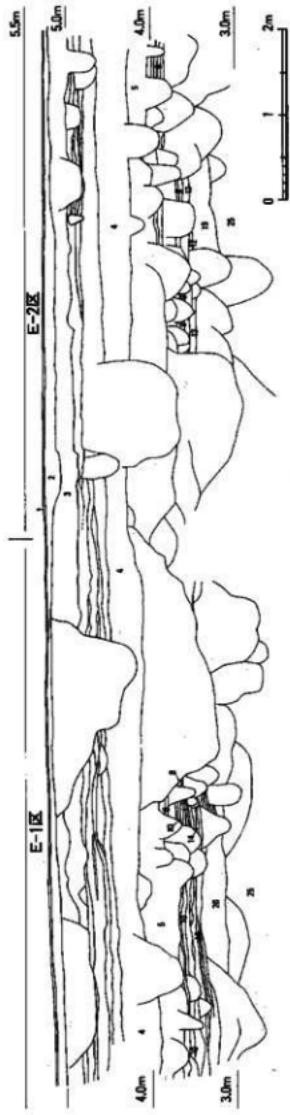
淡黄色砂の直上には、暗褐色～灰褐色の砂または砂質土が堆積する。古代以前の遺構は、この上面または層中から掘り込まれている。

中世の堆積は、基本的には暗褐色土である。締まりに欠け、柔らかい。この中に焼土層や整地層などが含まれる。整地層の遺存状態は比較的よく、整地前後の状況をよく示していた。それによると、本調査地点では、明らかに火災からの復興に伴う整地がなされていた。すなわち、生活面が火災に遭うと（焼土面）、焼け跡の整理がなされ地均しがなされる（炭粒や壁土の小粒を多く含んだいわゆる焼土層）。その上に灰色の粗砂または粗砂混じり土などを敷き、それを灰色粘土で覆って、新しい生活面を作り出す。すべての整地がこの方式でなされたものではなかろうが、E-1区などではこれが繰り返された状況が観察できている。中世の層の最上面は、黄灰色粘土による整地面であった。

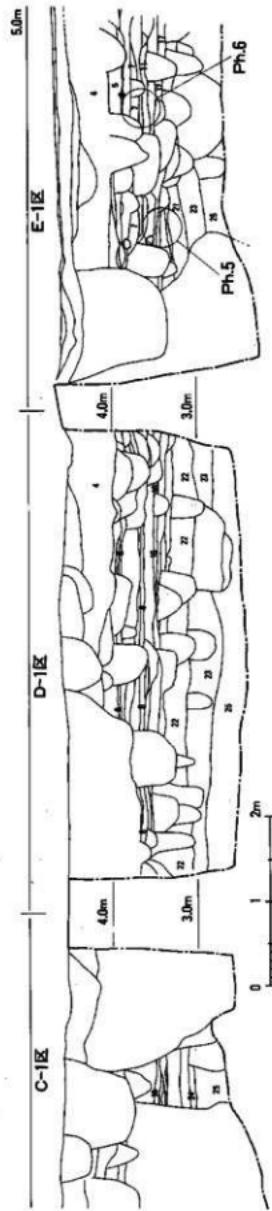
中世の面を覆って、調査区全面に茶褐色土が堆積していた。締まりがない、柔らかい土で、若干の粘り気を持っている。砂は含むが、礫や遺物は含んでいない。よく耕された畑の土壤を思わせる。花粉分析では、洗い出しのため花粉が検出されなかったが、まったく生活遺構を伴わない点からみても、耕作土の堆積を見て良かろう。層厚は、30～50センチほどもあり、畑地であった期間が長かったことを示している。その上面には、近世後半以後の生活遺構が営まれ、現代に至っている。



Ph.2 表土下無遺物層 E-2～E-3区東壁（南より）



(1) E-1 ~ E-2 北壁



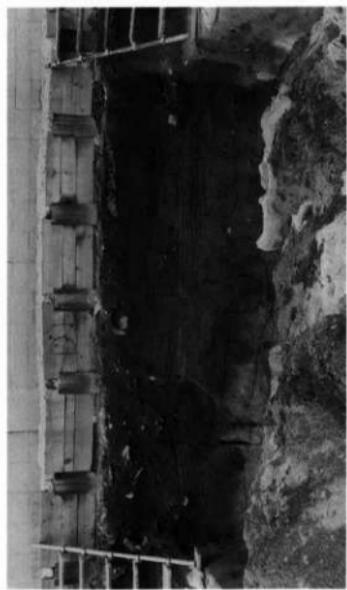
(2) C-1 ~ E-1 北壁

- |             |                  |                        |                    |                       |
|-------------|------------------|------------------------|--------------------|-----------------------|
| 1. 漏斗 アスペクト | 6. 灰色粘土 基面       | 10. 岩場(砂...上面に砂が付く) 基面 | 15. 灰色粘土           | 20. 不透水性粘土と暗灰色土との互層   |
| 2. バラク      | 7. 泥炭の蘚類上...基面   | 11. 暗灰色土、海苔土(カワラ)      | 16. 深灰色...「K」度の互層  | 21. 水色粘土と暗灰色土との互層     |
|             | 8. 蘭花土           | 12. 黄褐色土、海苔土(カワラ)      | 17. 深灰色粘土、海苔土(カワラ) | 22. 鳞片状砂質土            |
|             | 9. 泥炭の二...不透水性粘土 | 13. 暗灰色粘土、海苔土(カワラ)     | 18. 灰色粘土           | 23. 灰色粘土              |
|             | 10. 不透水性粘土       | 14. 暗黄色土               | 19. 喜山色砂質土         | 24. 黄色粘土、かづら、海苔土(カワラ) |
|             |                  |                        | 25. 深黄色土           |                       |

Fig. 3 土層実測図 (1/80)



Ph.3 D-1区北壁（南より）



Ph.4 E-1区北壁（南より）



Ph.5 E-1区北壁壁面



Ph.6 E-1区北壁壁面

### 3. 発掘調査の概要

今回の発掘調査では、前述したように1区で5面（一部6面）、2区で3面の調査を行った。その成果を述べるに当たり、まず、各造構出面の概要を、次にグリッドごとに精査した1区について、グリッド別の概要を報告する。

#### 第1面 (Fig.4, Ph.7・8)

1区第1面と2区第1面が、これにあたる。耕作土と推定される茶褐色土の下の黄灰色（粘質）土上面である。整地面と見て良かろう。標高は、3.9~4.1メートルで、ほぼ平坦な面となる。

井戸・土坑・柱穴などが検出された。近世以後と、14世紀前半代の遺構がある。井戸では、B-2区136号遺構、C-1区187号遺構、187号遺構、203号遺構、C-2区279号遺構、C-3区2519号遺構、C-D-3区2454号遺構、2455号遺構、D-1区230号遺構、D-2区361号遺構、D-3区2429号遺構など、土坑では、A-1区14号遺構、84号遺構、B-3区2663号遺構、C-1区191号遺構、192号遺構、193号遺構、C-2区277号遺構、323号遺構、C-3区2509号遺構、D-1区233号遺構、234号遺構、270号遺構、D-2区324号遺構、340号遺構、D-3区2382号遺構、2383号遺構、2398号遺構、E-1区269号遺構、E-3区385号遺構、392号遺構、413号遺構などが近世以後に属する。

近世の土坑のうち、C-1区191号遺構、192号遺構、193号遺構では、小鉄滓がたまつて廃棄されており、鍛冶に関わる遺構と思われる。D-3区2382号遺構は、長方形土坑の四壁に石を積み上げて



Ph.7 1区第1面全景（南東より）



Fig.4 第1面造構全体図(1/100)



Fig.5 第2面造構全体図 (1/100)

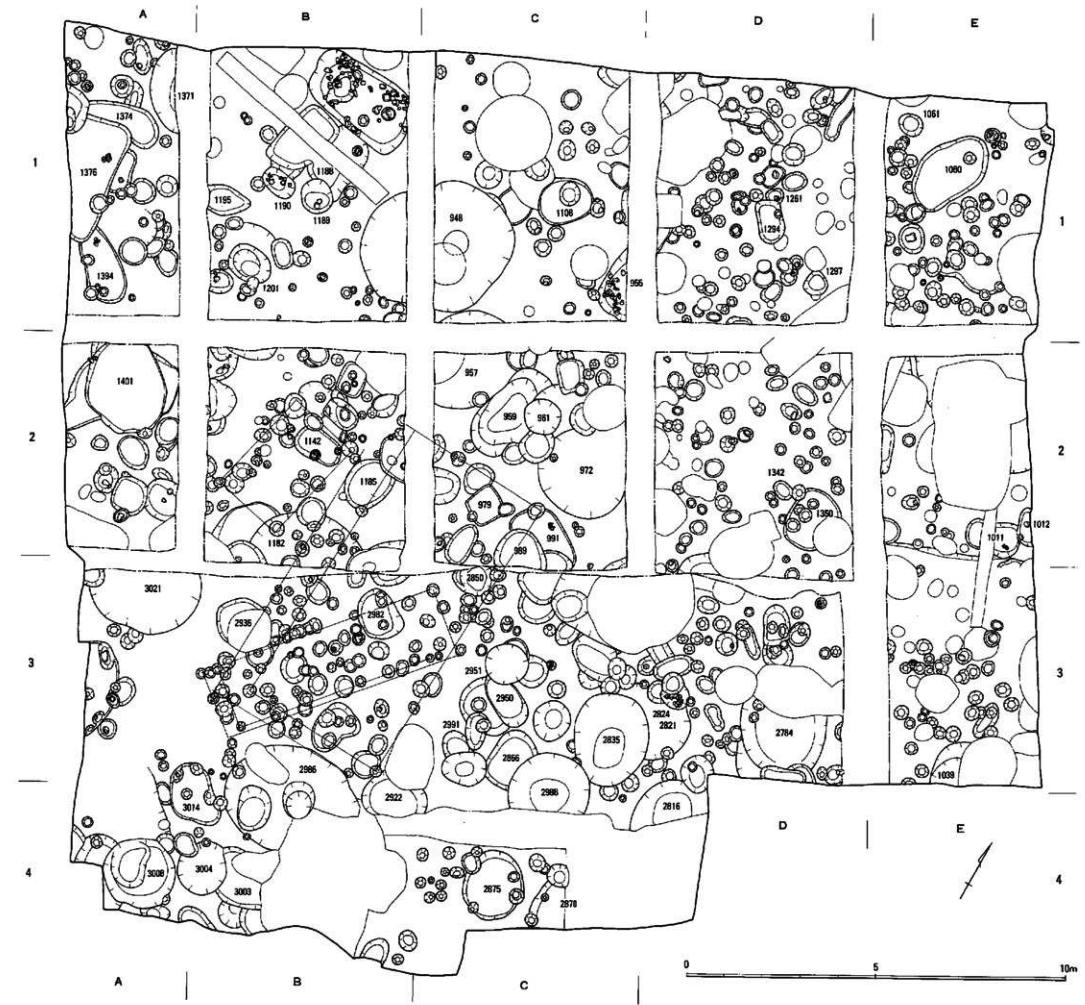


Fig.6 第3面造構全体図(1/100)

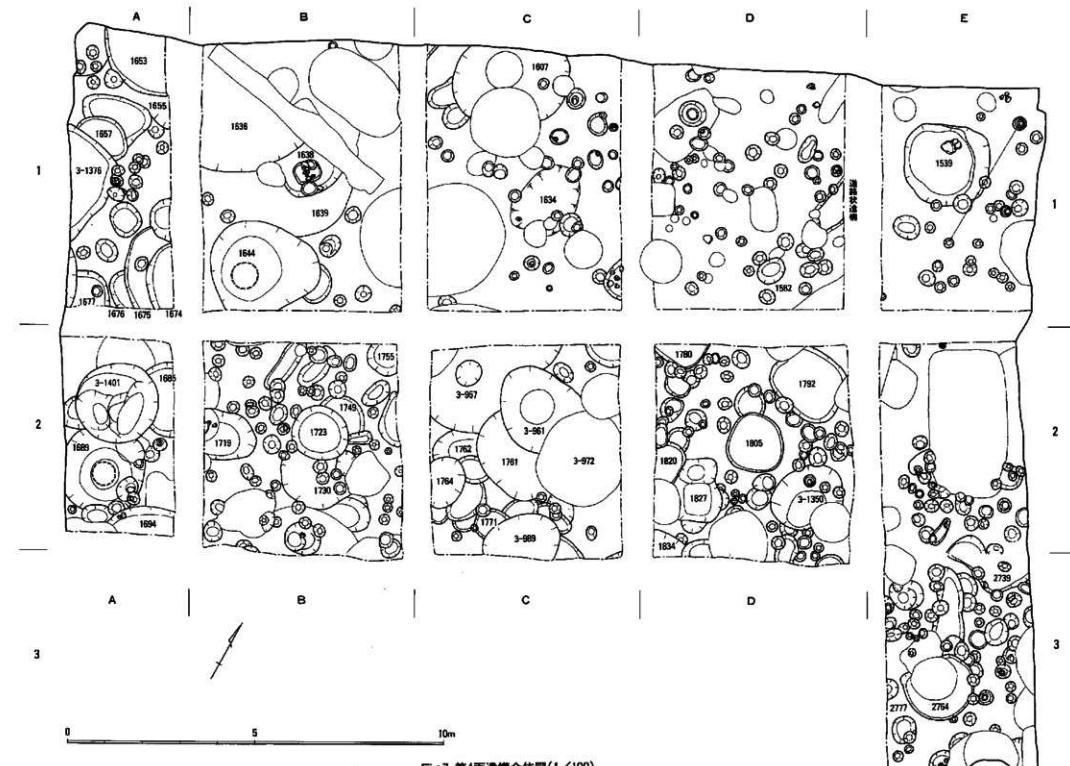


Fig.7 第4面造構全体図(1/100)

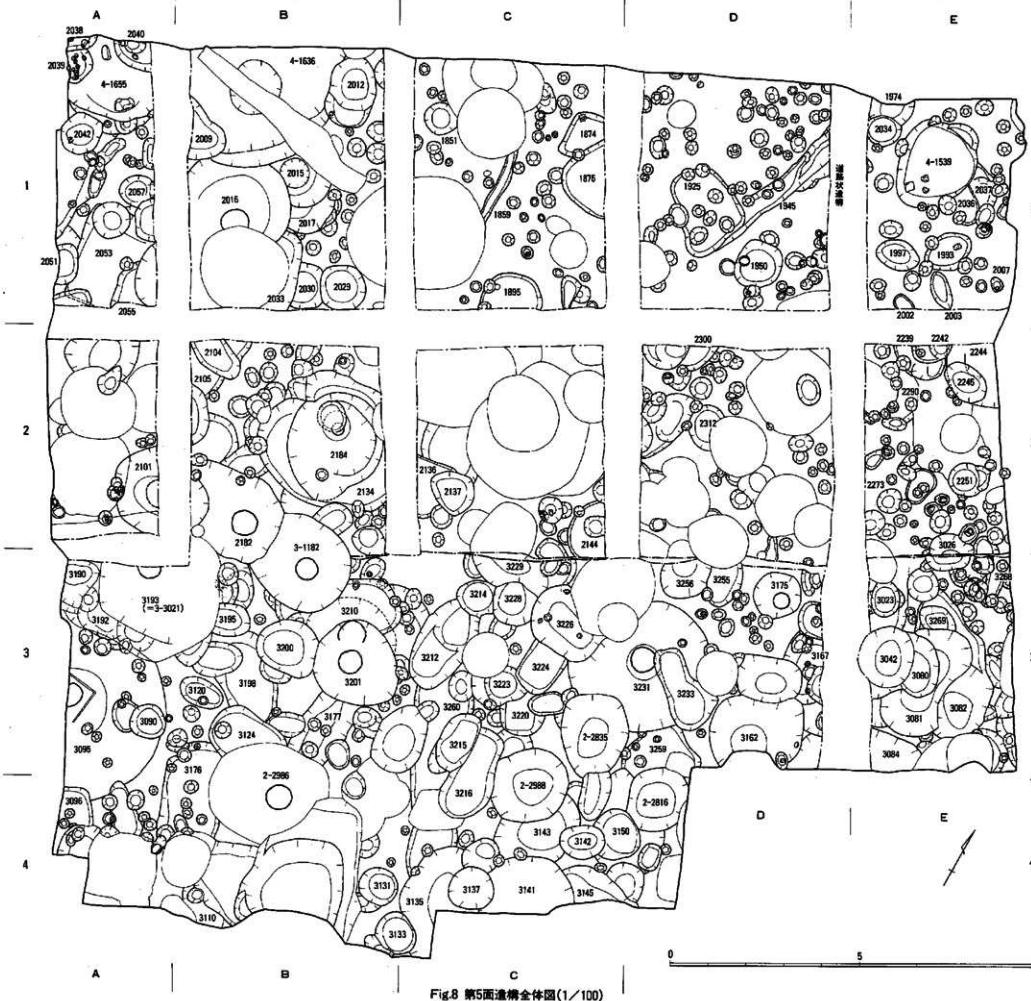


Fig.8 第5面造構全体図(1/100)

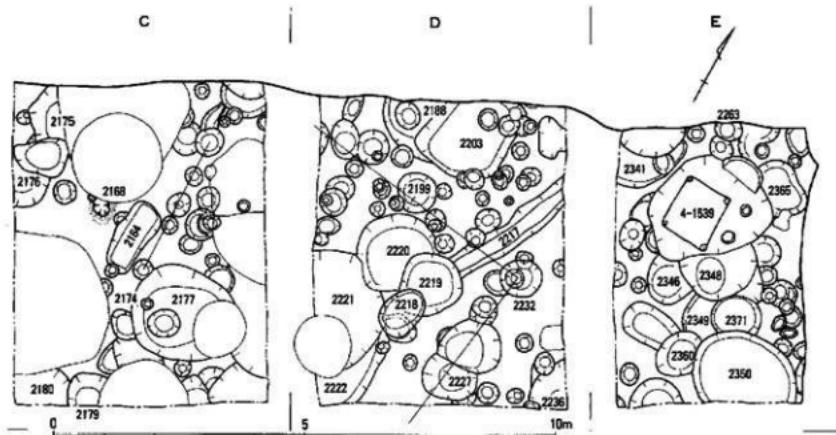


Fig.9 第6面遺構全体図 (1/100)

壁とした、方形石積土坑である。

中世の土坑では、A-2区174号遺構、E-2・3区376号遺構が、土師器の壺・皿を大量に廃棄した、いわゆるかわらけ溜まりである。D-3区2449号遺構にも多数の上師器壺・皿が捨てられていた。なお、B-3区の2714号遺構は、その上に重なった第1面の遺構を掘った隙に下の土坑(=2714号遺構)の遺物の一部を掘り上げてしまったために、その周囲だけ掘り下げてプランを確認し、調査した土坑で、本来第1面にともなう訳ではない。

柱穴の配置から、掘立柱建物跡を推定することができた。柱穴が、切り合いのために失われ確認できない部分も多いが、根縫めの跡を填める柱穴を主に2間×3間の東西棟を復元した。この他にも、柱筋が想定できる柱穴が多い。

14世紀前半の生活面と考えられる。

#### 第2面 (Fig.5, Ph.9)

灰黄色土、もしくは灰黄色粘質土で設定した、遺構検出面である。較地面と見て、大過なかろう。調査期間の関係から、2区では、設定しなかった。標高では、3.7~3.8メートルで、調査区の東側で高く、西側で低い。

井戸・土坑・柱穴などを検出した。これらの遺構は、おおむね13世紀後半~14世紀前半に属するものである。井戸は、C-1区の589号遺構である。井戸側に木桶を伏せて重ねたもので、桶の木質がわずかに確認できた。

土坑では、B-1区536号遺構が注目される。後述するが、法具の飾り金具と見られる金箔を貼った銅製品が出土地している。E-1区の813号遺構は、石組炉と思われる。B-2区579号遺構、E-3区876号遺構は、かわらけ溜まりである。

柱穴から、掘立柱建物跡かそれに類すると思われる柱筋を抽出できた。C-2区では、第1面で推定した掘立柱建物跡の北の桁とほぼ同じ位置から、柱穴を検出した。根縫めの柱穴と、礎板に石を置



Ph.8 2区第1面全景（北西より）



Ph.9 1区第2面全景（南東より）



Ph.10 1区第3面全景（南東より）



Ph.11 2区第2面（＝1区第3面）全景（北西より）

く柱穴とを併用するという、第1面の掘立柱建物跡とは異なる特徴も持つが、柱穴の位置・配置の一致から、その前身に当たる建物と見て良かろう。A-2区からB-1区にかけては、80センチほどの間隔で平行する二列の柱筋が認められる。柱穴は、厳密には対になっていないが、屋根をかけた廊を考へたい。A-1区からB-1区にかけては、この廊？に直交する建物もしくは柱列が想定できる。廊の柱穴とは、空間的に重複しないようで、同時存在したと思われる。

第2面の時期としては、13世紀後半をあてたい。

### 第3面 (Fig.6, Ph.10・11)

黄褐色粘土を基準として設定した、遺構検出面である。特にE-1区において明瞭にみられるが、第3面とした黄褐色粘土層の上面は、火熱を受け暗褐色を呈していた。その直上には、炭・灰が薄く乗り、さらにその上に焼土層が堆積していた。これは、火事からの復興・整地の過程を示すもので、第3面は火事にあって廃絶した生活面であるといえよう。標高3.6~3.8メートルをはかり、調査区の東側で高く、西に向かって、若干低くなる。12世紀後半~13世紀代の遺構が検出された。なお、2区の南東端付近では、12世紀前半に遡る遺構を検出しており、掘り下げすぎたものと思われる。生活面の傾斜は、より大きかったものと知れる。

井戸・土坑・柱穴などを検出した。井戸は、A-3区3021号遺構（13世紀）、B-2・3区1182号遺構（12世紀中頃）、B-3・4区2986号遺構（12世紀後半）、B・C-1区の948号遺構（13世紀後半）、C-2区957号遺構（13世紀後半）、961号遺構（13世紀）、972号遺構（13世紀）などである。3021号遺構は、第5面3193号遺構掘り方の一部に当たる。961号遺構は、井戸側の部分で、961号遺構周囲に密集した遺構は掘り方の一部であろう。土坑では、深い掘り方を持つ堅穴状土坑を、多数検出した。A-1区1376号遺構は、13世紀後半の方形堅穴状土坑である。石臼（曳き臼）片が出土した。A-4区3008号遺構（13世紀後半）、C-3区2835号遺構（12世紀後半）、C-3・4区2988号遺構（13世紀）、D-4区2816号



Ph.12 2区第3面 (=1区第5面) 全景 (北西より)

遺構(12世紀後半)は、円形竪穴状土坑である。

掘立柱建物跡は、B-3区からC-2区にかけて推定した。2間×4間に一部縁をつけた建物に復元したが、柱穴は揃わず、疑問も残る。

第3面は、12世紀後半から13世紀前半にかけての生活面と考えられる。

#### 第4面 (Fig.7)

灰色土を日安に設定した、遺構検出面である。2区では、設定しなかった遺構面である。E-1区では、ほぼ全面にわたって焼けている状況が確認でき、火災にあったことが推測できる。標高では、3.25メートルから3.55メートルをはかり、東から西に傾斜している。12世紀前半から13世紀前半の遺構が出土した。

井戸・土坑・柱穴・道路状遺構などを検出した。A-2区1689号遺構(12世紀前半)、B-1区1636号遺構(13世紀前半)、1644号遺構(12世紀後半)、C-1区1607号遺構(12世紀後半)、C-2区1761号遺構(13世紀前半)、D-2区1805号遺構(12世紀前半)は、井戸である。土坑では、A-1区1674号・1675号遺構(12世紀前半)から多重塔の土製品が出土しており、注目される。B-2区1755号遺構は、12世紀代の遺構であるが、古代の銅製巡方が出土した。D-2区1827号遺構は、火災にあって破砕した輸入陶磁器を大量に廃棄した土坑で、国産土器類をほとんど含まない。E-1区1539号遺構は、四隅に杭を立て板壁をはった、地下室状の土坑で、1827号遺構との接合資料が含まれ、同時期の遺構と考えられる。12世紀前半の遺構である。また、1805号遺構(井戸)からも1827号遺構との接合資料が出土しており、その他の遺物も12世紀前半を示すことから、1827号遺構と同時存在した可能性がある。D-1区では、道路状の硬化面を検出した。幅約80センチの高まりで、南北方向に延びる。D-1区の南辺まではのびないが、E-1区の西辺の断面には見えており、E-1区まで続いていたことは確実である。

第4面は、12世紀前半の生活面である。

#### 第5面 (Fig.8, Ph.12)

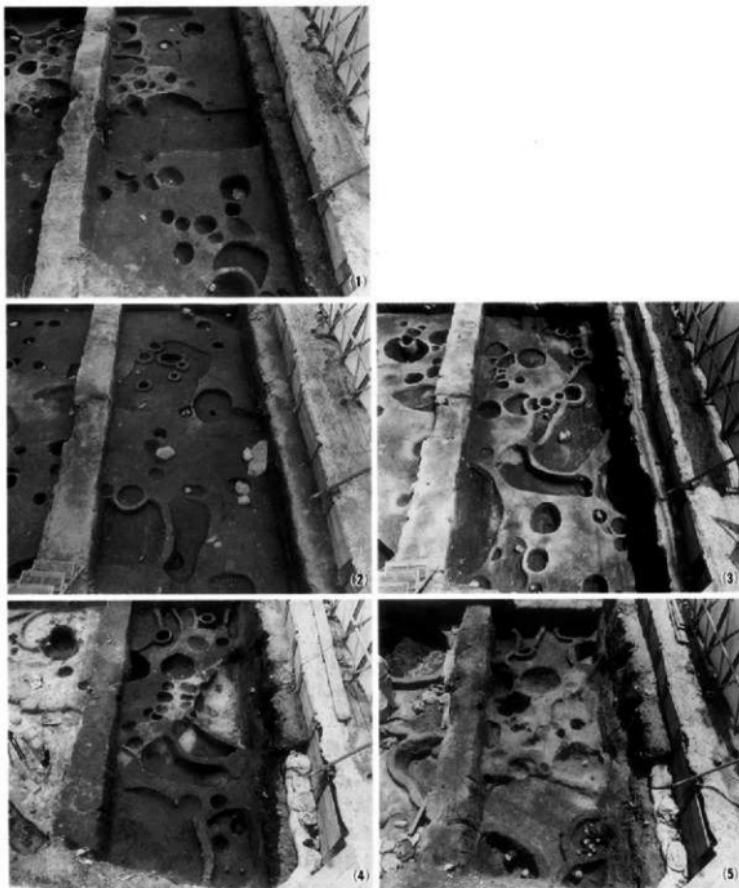
砂丘砂層の上面で設定した、遺構検出面である。北側のC~D-1面では砂丘面が深く、一気に掘り下げるとかなりの遺構を飛ばす可能性があるため、A~B-1区とレベルが揃ったところでいったん止め、遺構検出を行った。標高は、3.05~3.45メートルで、東から西に下降する。8世紀から12世紀後半までの遺構を検出した。

井戸・土坑・柱穴・溝などを調査した。井戸は、A-2区2101号遺構(12世紀前半)、A-3区3095号遺構(8世紀末)、B-1区2015号遺構(12世紀後半)、2016号遺構(12世紀後半)、B-2区2182号遺構(12世紀後半)、B-3区3201号遺構(11世紀後半)、3210号遺構(8~9世紀)、C・D-3区3231号遺構(12世紀後半)などである。土坑では、A-3区3190号遺構、3192号遺構、B-2区2104号遺構、B-3区3198号遺構、B-4区3110号遺構、D-2区2312号遺構、E-2区2245号遺構、E-3区3268号遺構、3269号遺構は、8~9世紀の遺構である。11世紀後半の土坑としては、A-1区2057号遺構、B-1区2029号遺構(円形竪穴状土坑)、B-3区3124号遺構、3200号遺構(円形竪穴状土坑)、D-4区3131号遺構、3132号遺構、3133号遺構、C-1区1851号遺構、1896号遺構、C-2区2144号遺構、C-3区3214号遺構、3215号遺構、3216号遺構、D-1区1950号遺構、D-2区2300号遺構、D-3区3167号遺構、E-1区1993号遺構、1997号遺構、2002号遺構、2036号遺構などで、その他の土坑はおおかた12世紀前半に属する。溝では、C-3・4区3260号遺構は、8~9世紀に属する。

第6面 (Fig.9)

C～E-1区で設定した面で、砂丘砂層上面にあたる。標高2.9～3.0メートルをはかる。8世紀から12世紀前半の遺構を調査した。

土坑・木棺墓・柱穴・溝を検出した。C-1区2176号遺構、E-1区2365号遺構は、8～9世紀の土坑である。C-1区2164号遺構は、9～10世紀の木棺墓である。D-1区2203号遺構、2219号遺構、E-1区2350号遺構は、12世紀前半の土坑であり、その他の土坑は11世紀後半に属する。



Ph.13 A-1区遺構検出状況

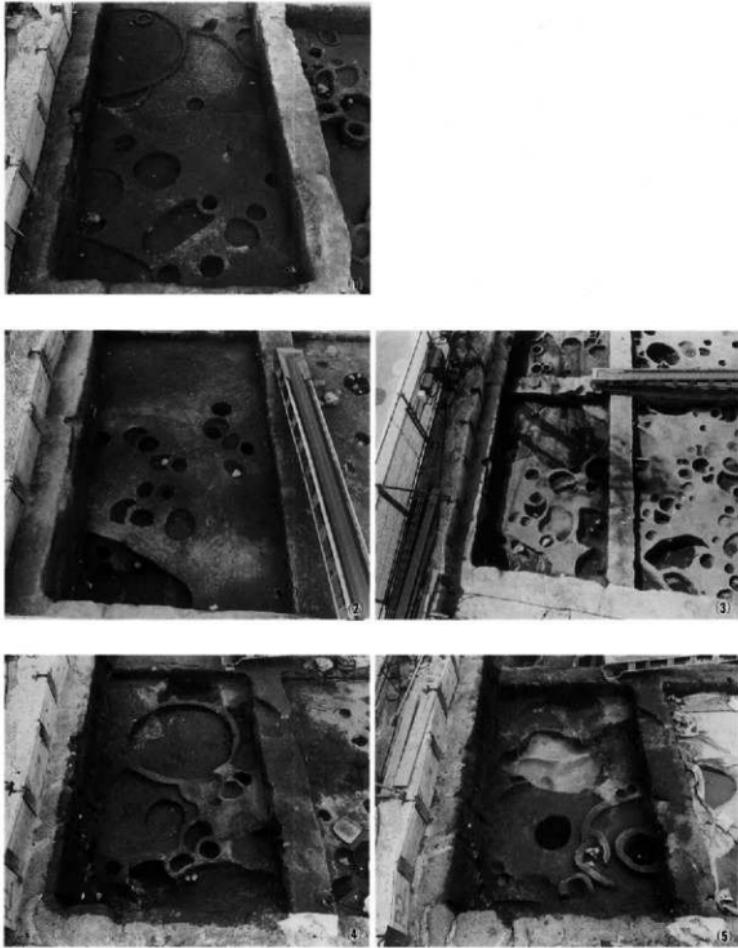
(1) 第1面 (北西より)

(4) 第4面 (北西より)

(2) 第2面 (北西より)

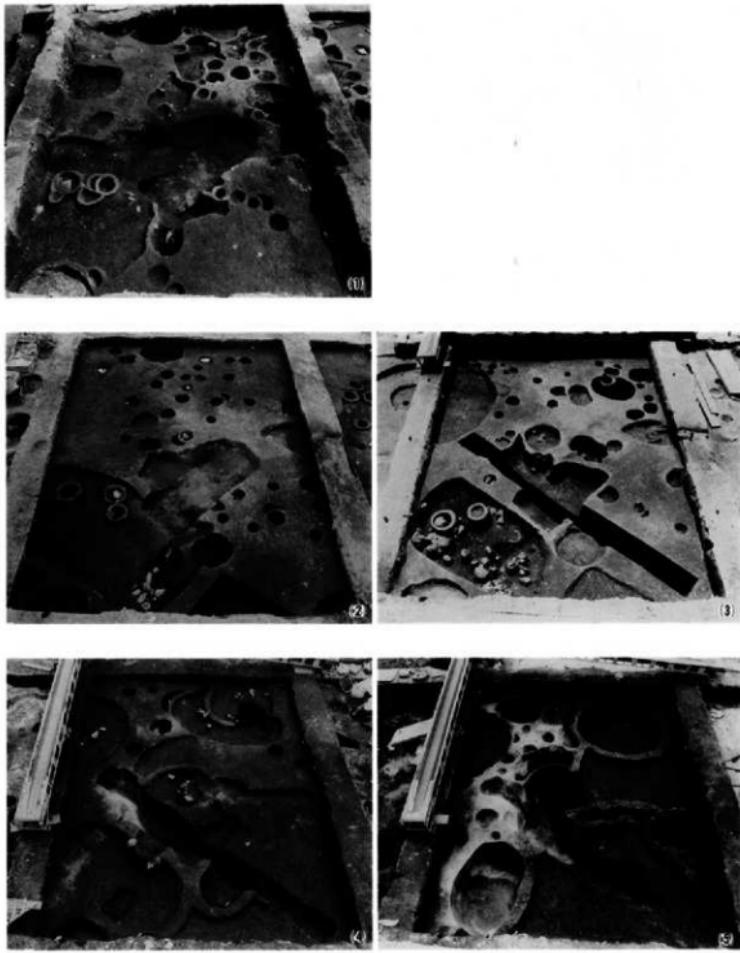
(5) 第5面 (北西より)

(3) 第3面 (北西より)



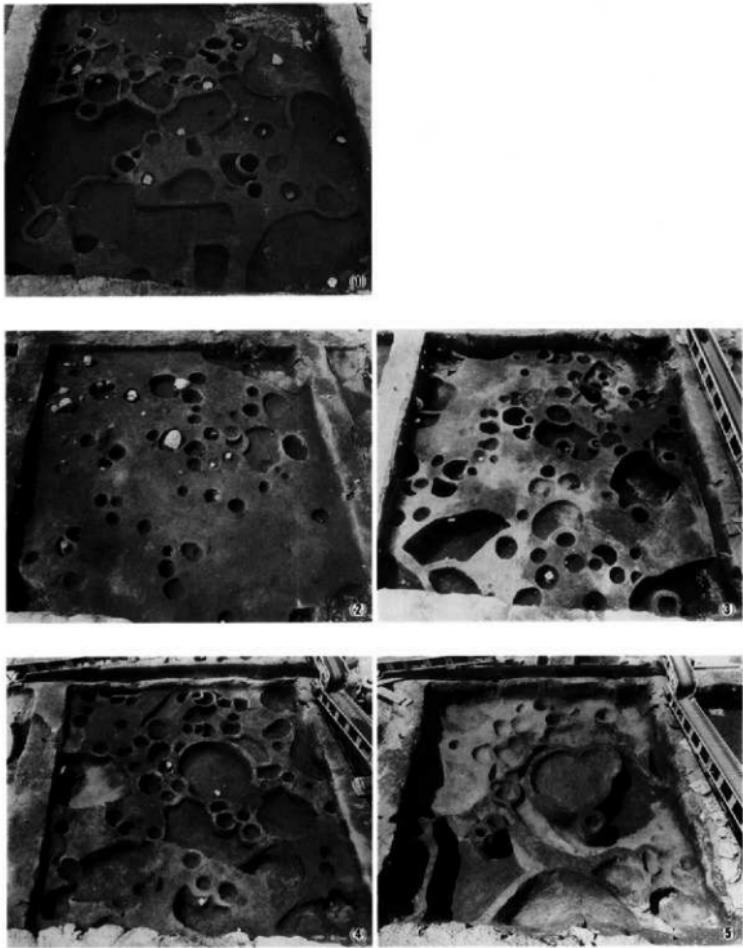
Ph.14 A-2区遺構検出状況

- (1) 第1面（南東より）  
(2) 第2面（南東より）  
(3) 第3面（南東より）  
(4) 第4面（南東より）  
(5) 第5面（南東より）



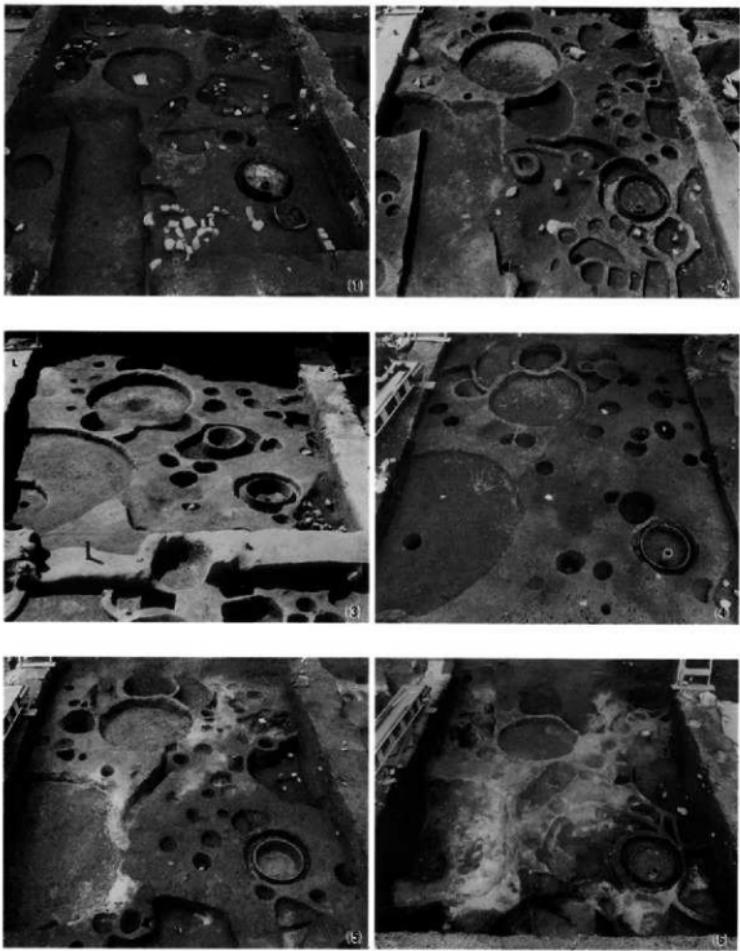
Ph.15 B-1区遺構検出状況

- |                |                |                |
|----------------|----------------|----------------|
| (1) 第1面 (北西より) | (2) 第2面 (北西より) | (3) 第3面 (北西より) |
| (4) 第4面 (北西より) | (5) 第5面 (北西より) |                |



Ph.16 B-2区遺構検出状況

- (1) 第1面（南東より）
- (2) 第2面（南東より）
- (3) 第3面（南東より）
- (4) 第4面（南東より）
- (5) 第5面（南東より）



Ph.17 C-1区遺構検出状況

- |               |               |               |
|---------------|---------------|---------------|
| (1) 第1面（南東より） | (2) 第2面（南東より） | (3) 第3面（南東より） |
| (4) 第4面（南東より） | (5) 第5面（南東より） | (6) 第6面（南東より） |



Ph.18 C-2区遺横検出状況

- (1) 第1面（南東より）  
(4) 第4面（南東より）

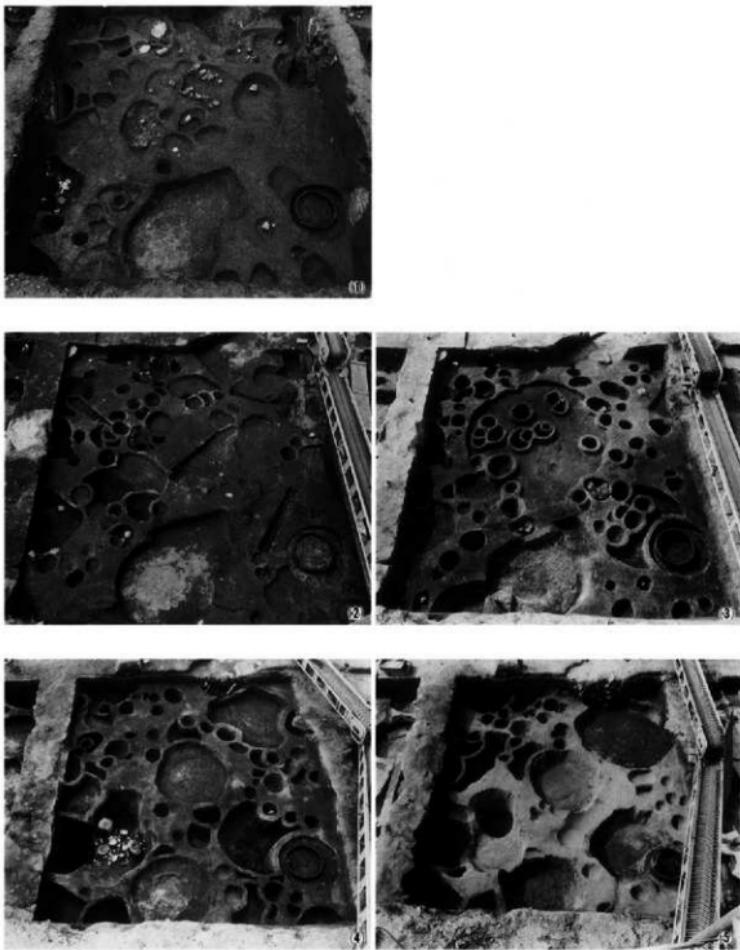
- (2) 第2面（南東より）  
(5) 第5面（南東より）

- (3) 第3面（南東より）



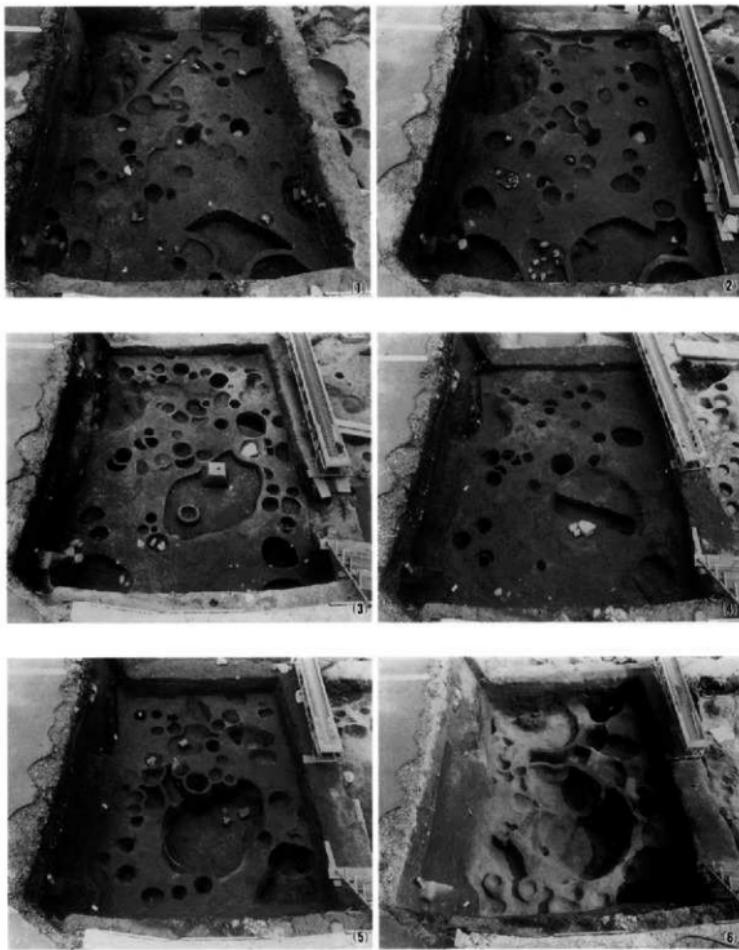
Ph.19 D-1区遺構検出状況

- |               |               |               |
|---------------|---------------|---------------|
| (1) 第1面（南東より） | (2) 第2面（南東より） | (3) 第3面（南東より） |
| (4) 第4面（南東より） | (5) 第5面（南東より） | (6) 第6面（南東より） |



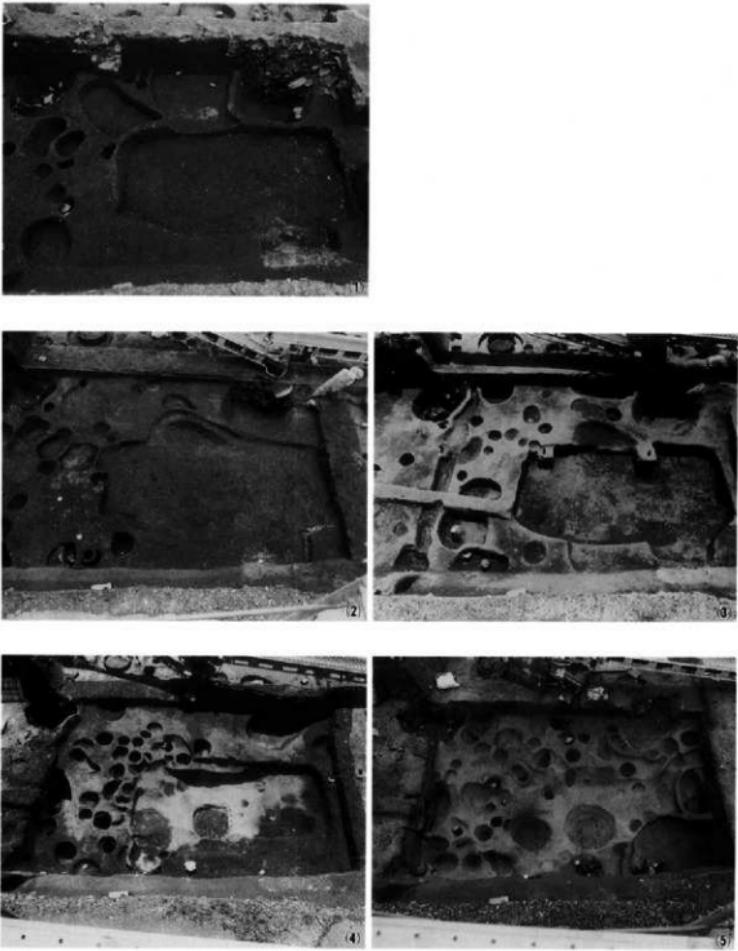
Ph.20 D-2区構造検出状況

- (1) 第1面（南東より） (2) 第2面（南東より） (3) 第3面（南東より）  
(4) 第4面（南東より） (5) 第5面（南東より）



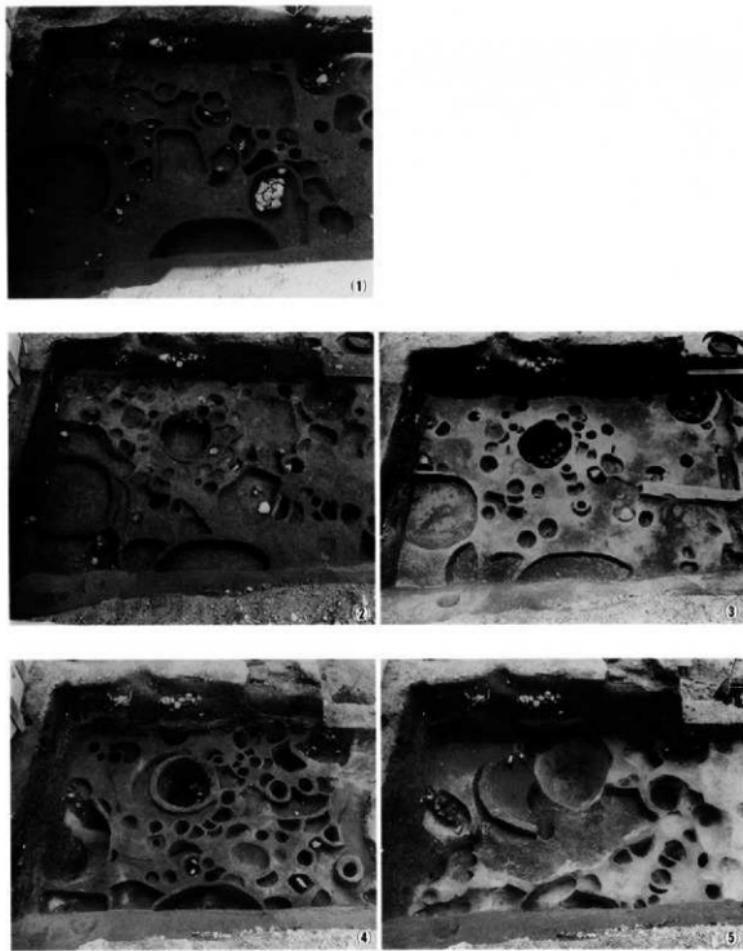
Ph.21 E-1区遺構検出状況

- |                |               |               |
|----------------|---------------|---------------|
| (1) 第1B面（北西より） | (2) 第2面（北西より） | (3) 第3面（北西より） |
| (4) 第4面（北西より）  | (5) 第5面（北西より） | (6) 第6面（北西より） |



Ph.22 E-2区遺構検出状況

- (1) 第1面 (北東より)  
(2) 第2面 (北東より)  
(3) 第3面 (北東より)  
(4) 第4面 (北東より)  
(5) 第5面 (北東より)



Ph.23 E-3区遺構検出状況

- (1) 第1面（北東より）  
(2) 第2面（北東より）  
(3) 第3面（北東より）  
(4) 第4面（北東より）  
(5) 第5面（北東より）

## 4. 遺構と遺物

博多遺跡群第79次調査では、全部で、3271基の遺構を調査した。この報告書で、そのすべての遺構を紹介することは、紙面の関係でとうてい無理であり、それ以前に限られた整理期間の中では、主要な遺物を実測することも十分にはできなかった。そこで、注目される遺構、看過できない遺物が出土した遺構に限って、報告することにした。以下、遺構の種類別に、井戸、土坑、炉、道路状遺構、埋葬遺構の順に記述する。各遺構は、その時代に関わらず、遺構番号順に述べる。

なお、これから漏れた主要な遺構については、次節で紹介する。

### (1) 井戸

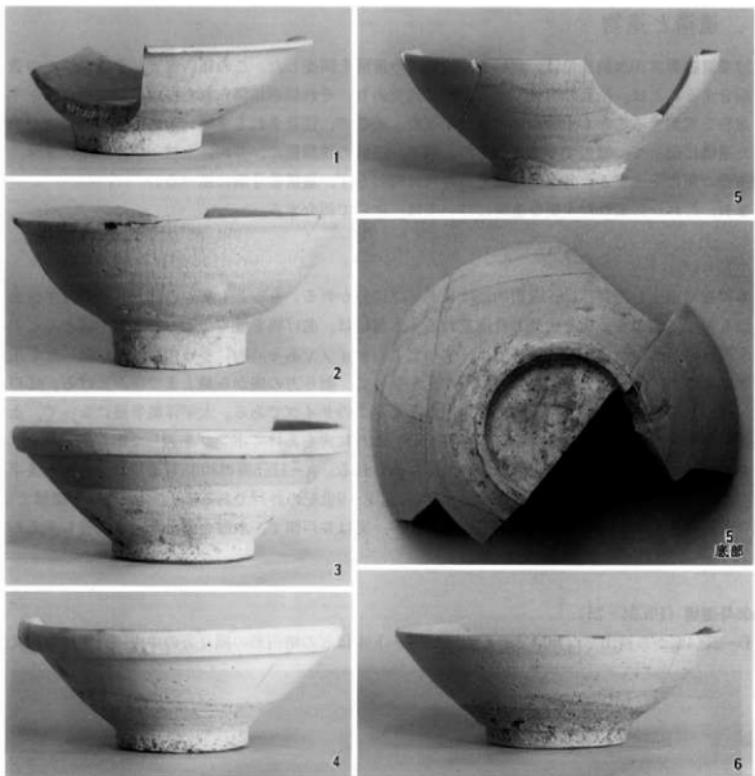
本調査で出土した井戸は、構造的には3タイプに分かれる。もっとも多いのは、井戸側に木桶を用いたもので、底のない桶を伏せて数段重ねる。水溜には、曲げ物を置くこともあるが、ほとんどの場合水溜は設けていない。中世の井戸は、すべてこのタイプである。次に多いのは、井戸側に瓦を用いた物である。円筒を数分割した井戸側用の瓦を巻いて、掘り方の底から地上まで積み上げる。江戸時代以後つくられた物で、近世以降の井戸はほとんどこのタイプである。太平洋戦争後になって、上から数段分の瓦をはずしてコンクリートで蓋をし、これに穴をあけてポンプを通して水を抜くものも見られる。古代の井戸では、水溜部分に曲げ物を置いた物がみられる。A-1区5面の3095号遺構は、8世紀後半の井戸だが、井戸側として木材を方形に組んでいた。8~9世紀の井戸であるB-3区5面3210号遺構では、井戸側は確認できなかった。水溜とした曲げ物が、実は井戸側で、水溜をもたない可能性も考えられる。

#### 1805号遺構 (Ph.24・25)

D-2区4面から検出した井戸である。径1.6メートルほどの略円形の掘り方の中央に、木桶を据えて



Ph.24 1805号遺構（西より）



Ph.25 1805号遺構出土遺物（縮尺不同）

井戸側とする。水溜は、設けられていない。

土師器皿・壺（底部ヘラ切り、回転糸切り）、瓦器、白磁、天目、輸入陶器、瓦、瓦磚、鐵滓などが出土地した。白磁碗で遺存部位の大きかったものをPh.25に示す。5の外底部の高台内側には、墨書きが見られる。「僧」+花押と読める。

出土遺物からみて、12世紀前半の井戸と思われる。出土遺物に、後述する1827号遺構の白磁碗と接合できる破片が含まれていた。同時存在した可能性がある。

#### 2015号遺構 (Fig.10, Ph.26)

B-1区5面から検出した井戸である。1636号遺構 (=2010号遺構、井戸、13世紀前半)、2016号遺構(井戸、12世紀後半)に切られる。掘り方の一部と、井戸側を検出した。井戸側は、木桶を伏せて置いた物である。木質の遺存状態は悪かったが、直径は75センチと確認できた。

出土遺物の一部を、Fig.10に示す。1は、白磁の碗である。施釉した後に、見込みに、沈線で「吳口」と刻む。読める。高台内側には、墨書があるが、判読できない。2は、灰綠釉陶器の瓶である。内外面に、薄く施釉する。胎土は鼠色で、きめが細かい。3は、滑石製の石鍋である。外面の鋸部から下には、煤が付着している。これらは、井戸側の下部から出土した。このほか、土師器（底部糸切り）、瓦器（楠葉型、筑前型）、青磁（同安窯系）、天目、瓦などが出土している。

12世紀後半の井戸である。

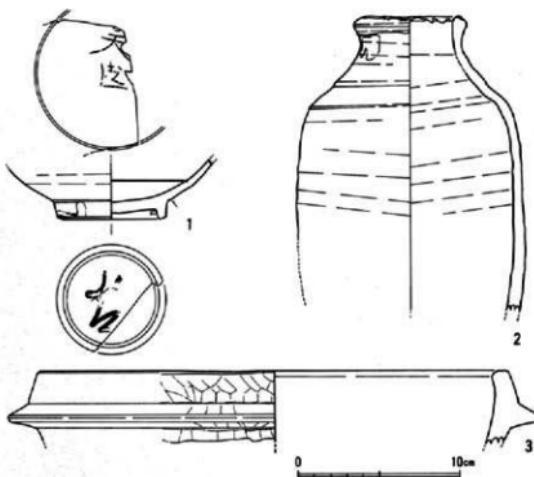


Fig.10 2015号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph.26 2015号遺構 (西より)

3095号遺構 (Ph.27・28, Fig.11)

A-3区5面から検出した井戸である。半分ほどが調査区外で、調査できなかった。掘り方は、直径5.5メートル（推定）の摺鉢形を呈する。掘り方の下部から、方形に組んだやや厚みのある棒状の板材と、その内側で曲物を検出した。板材は、一辺約1メートルの方形に組まれるが、遺存状態が悪く、組み方の細部は観察できなかった。釘などは出土していない。曲物は水溜、板組は井戸側と見られる。井戸断面の土層観察によると、井戸側の立ち上がりは遺構検出面付近まで認められ、上部まで組み上げていたものと推測される。

Fig.11に出土遺物を示す。1~15は、須恵器である。16~28は、土師器である。16・18・19は、横ナア調整で仕上げるなど、須恵器と同じ調整手法によっている。これに対し、17・20・21は、形状こそ須恵器と共通するものの、内外面に横位のヘラ磨きを加える。27~31は、土師器の焼塙壺である。外面は指押さえ、内面には布目がみられるが、29の内面には、目の細かい網目が残されている。32は、平瓦片である。33・34は、土師質の土鍾である。35は、砥石である。目が細かく、仕上げ砥であろう。36は、刀子である。井戸側と水溜の間から出土した。37は、井戸側内から出土した「神功開寶」である。

3095号遺構は、8世紀末に位置づけられよう。



Ph.27 3095号遺構水溜曲物（南東より）



Ph.28 3095号遺構（北東より）

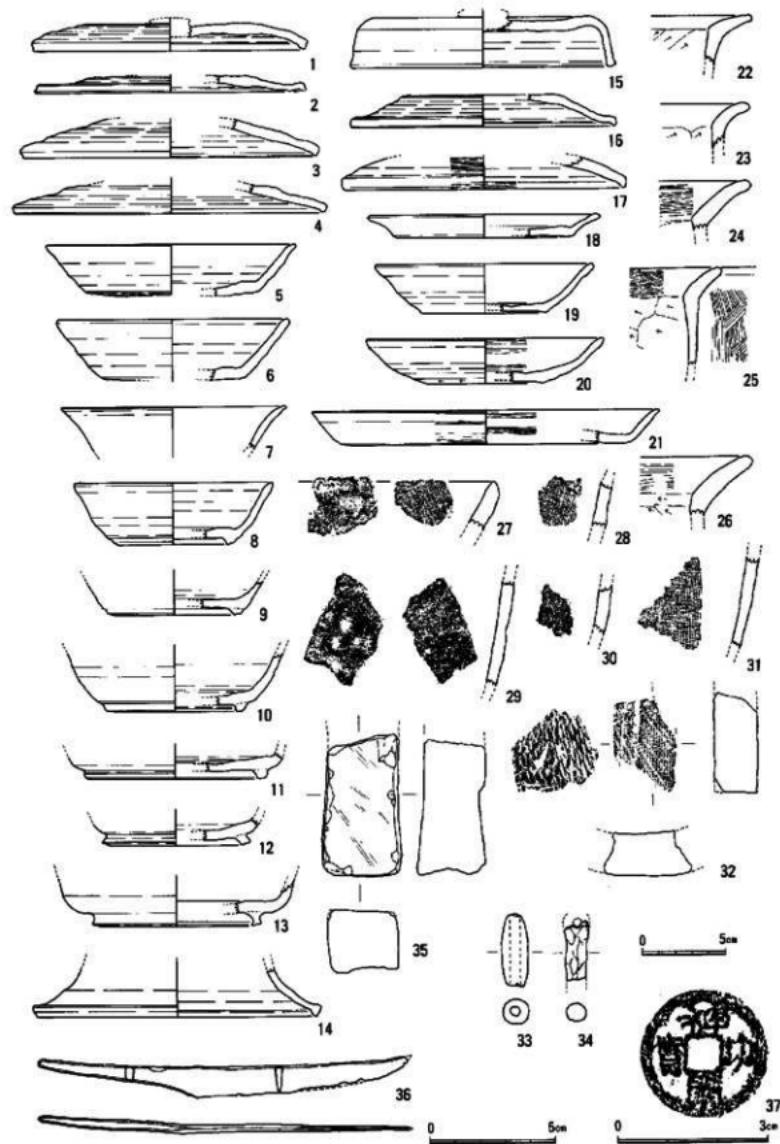


Fig.11 3095号遺構出土遺物実測図 (1~35-1/3, 36-1/2, 37-1/1)

## (2) 土坑

本調査では、井戸・溝・柱穴・埋葬壙などを除いた、掘り込みをともなう遺構をすべて土坑とした。したがって、形態・用途は様々である。本来は、遺構の性格付け、分類をへた後に報告するべきなのだろうが、時間の関係から、十分な吟味はできていない。そのため、以下の記述では、土坑の形態・性格に関わらず、単に遺構番号順に述べることを、注しておく。

### 174号遺構 (Fig.12, Ph.29)

A-2区1面から検出した、土師器の一括廃棄土坑である。遺構の過半は、調査区外に出るため調査できていない。土師器の皿・壺は、ほとんどが完形品で廃棄されたものと考えられる。

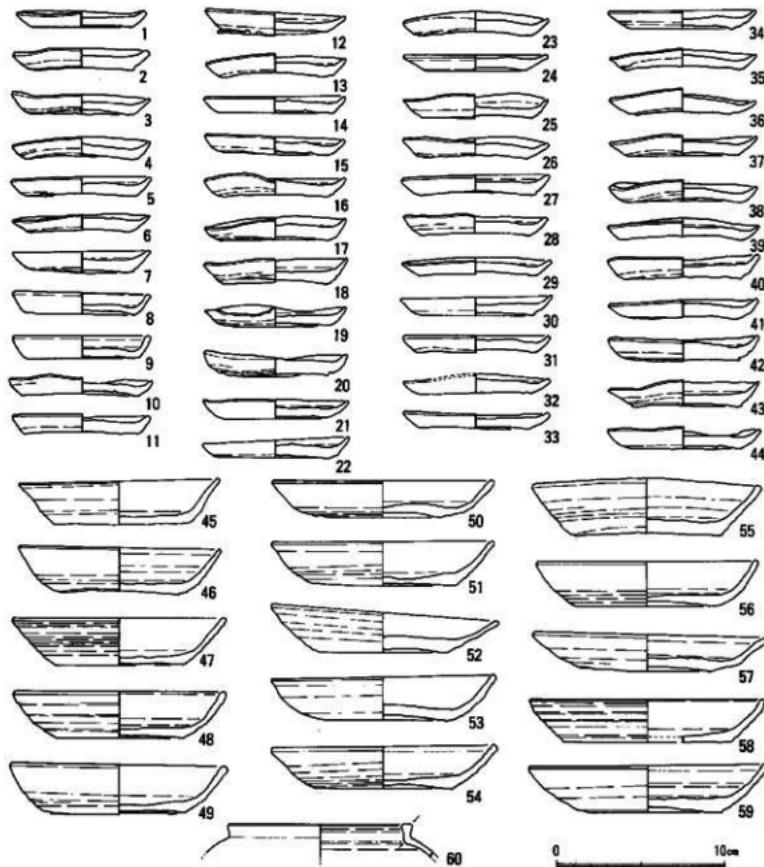


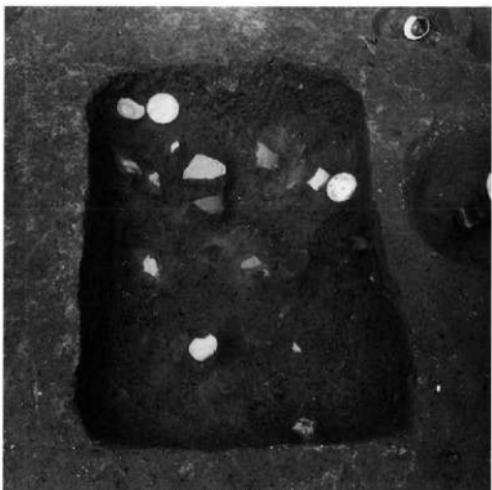
Fig.12 174号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph.29 174号遺構 (1)南東より、(2)北東より

Fig.12に出土遺物の一部を示す。1~59は、土師器である。すべて、底部は回転糸切りされる。また、10・22・52・55を除いて、内底部にナデ調整が加えられる。1~44は、皿である。体部の立ち上がりの小さい偏平なタイプがほとんどであるが、8・9の様に深く急に立ち上がるタイプも含まれている。法量は、口径7.7~9.0センチ、器高0.8~1.7センチをはかる。45~59は、壊である。口径に対して底径が小さく、比較的器高が低い50・57と、そうでないものとの2タイプがあるが、前者は比率的には少ない。口径12.0~14.3センチ、器高は、前者で2.2~2.4センチ、後者で2.6~3.1センチである。60は、施釉陶器の短頸壺である。明灰色のきめ細かい胎土に、明灰オリーブ色の釉をかける。口唇部から頸部内面は露胎である。このほか、青磁、白磁（口禿）片が出土している。

14世紀前半の、いわゆる土器窯遺構である。



Ph.30 270号遺構（南東より）

#### 270号遺構 (Fig.13・14, Ph.30・31)

D-1区1面より検出した土坑である。長辺約1.4メートル、短辺約0.9メートルの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは、32センチをはかる。

埋土の下部から、土器・陶器器が出土した。土坑床面付近からは何も出土していないこと、土坑床面の平面形がかなり整った長方形

を呈することから、箱型の木製品が置かれていた可能性が考えられる。ただし、釘は一点も出土していない。

Fig.14に出土遺物を示す。1~5は、土器の皿である。底部は回転糸切りで、内外面は強い回転ナデによって調整される。口径8.0~8.4センチ、器高1.4~1.7センチをはかる。6~8は、肥前焼器の染付けである。6は、湯呑み茶碗で、全面に施釉し墨書きを露胎にする。7・8は、皿である。7の見込み中央には、コンニャク判の五弁花文が描かれる。8の見込みは、輪状に釉を搔きとる。この露胎部分には、重ね焼きによる付着物がみられる。9は、中国製の、黒褐色の釉をかけた陶器の蓋である。鋸状部分から下面は、露胎となる。10は、龍泉窯系の青磁皿である。

18世紀後半の土坑であるが、南宋代の青磁皿を、肥前染付けと並べて置いている点に注目したい。

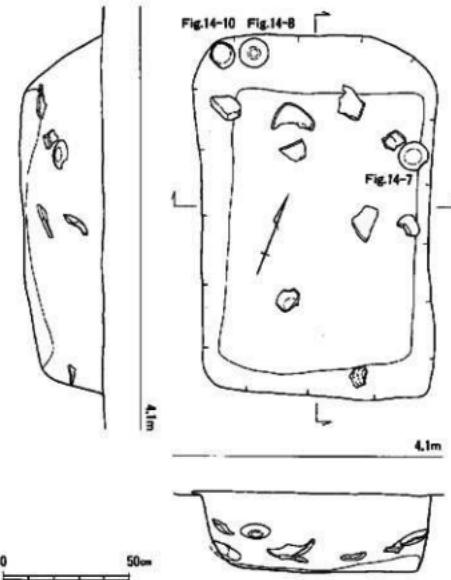


Fig.13 270号遺構実測図 (1/20)

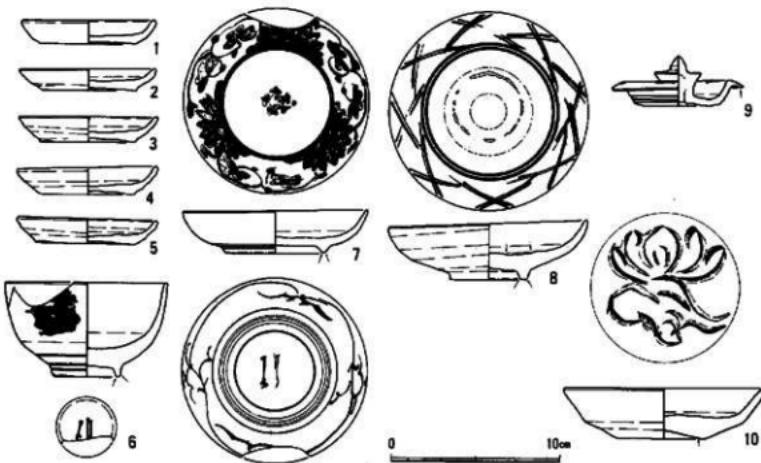
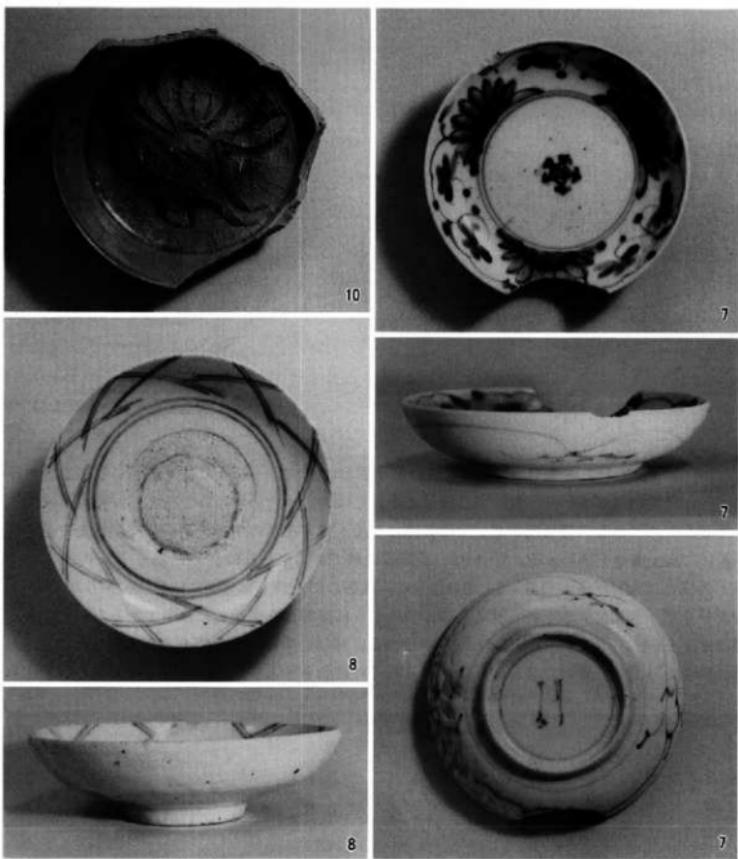


Fig.14 270号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph.31 270号遺構出土遺物（縮尺不同）

272号遺構 (Fig.15, Ph.32)

E-1区1面から検出した小土坑である。青磁碗が出土したが、出土状況からみて、完形の碗を伏せて置いていたものと思われる。

Fig.15に出土遺物を示す。1~4は、土器である。底部は回転糸切りで、内底にはナデ調整、外底には板目圧痕が残る。1は皿で、口径8.6~9.2センチ、器高1.3センチをはかる。2~4は、壊である。口径13.8・14.0センチ、器高2.6・2.85センチである。5は、龍泉窯系の青磁碗である。体部外面に鋪蓮弁文を刻む。このほか、白磁片も出土している。

14世紀前半の遺構と考えられる。性格は、不明である。



Ph.32 272号遺構（北東より）

### 365号遺構 (Fig.16, Ph.33)

D-2区1面で検出した廃棄土坑である。浅い長椭円形の土坑に、若干の遺物が捨てられていた。土器器の皿には完成品が多いが、量的には決して多いとはいえない、いわゆる土器溜とは異なる。したがって、要宴などの特殊な消費行為を想定する必要はなく、日常生活の中での消費・廃棄行為であろう。

Fig.16に出土遺物を図示する。1~13は、土器器の皿である。底部は回転糸切りで、内底にはナデ調整。外底には板目圧痕が残る。5・10のように、底部の切り離し部分が、円盤状に張り出すものと、この部分を横ナデして丸みを持たせるもの、13のように底部から直線的に立ち上がるものとがある。口径は8.2~9.6センチ、器高0.7~1.5センチをはかる。14は、青磁の小鉢である。白色で緻密な胎土に、緑色の釉をたっぷりとかけ、疊付のみ釉を削り取って露胎とする。15は、青磁の碗である。見込みに

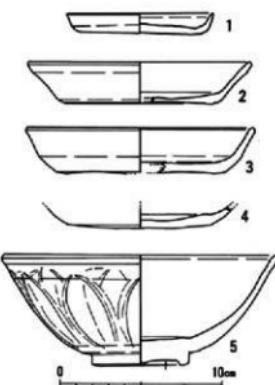


Fig.15 272号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph.33 365号遺構（北より）

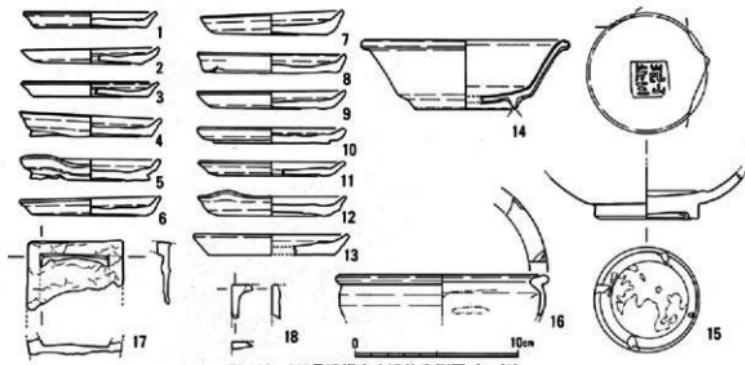


Fig. 16 365号遺構出土遺物実測図 (1/3)

は「嵐山片玉」のスタンプを押す。疊付から内側は露胎で、疊付には目痕が残る。16は、陶器A群の鉢である。白化粧の上に、灰オリーブの透明釉をかける。内面に施釉し、口縁部は釉を拭き取る。17・18は、石硯である。17は、粘板岩製で、灰茶色を呈する。三方の小口と海の一部が本来の面をとどめているだけで、ほぼ全面にわたって、剥離している。18は、滑石製である。このほか、土鍋の破片が出土した。

14世紀前半の遺構と考えられる。

#### 389号遺構 (Fig. 17, Ph. 34)

B-3区3面から検出した小土坑である。埋土の上部から、石硯などの遺物が出土した。

出土遺物を、Fig. 17に示す。1・2は、土師器である。底部は、回転糸切りする。1は皿で、口径6.6~6.8センチ、器高1.3センチである。口縁に煤が付着し、灯明皿として用いられたことがわかる。2は壺で、口径12.0センチ、器高2.2センチをはかる。内底部にナデ調整が残る。3は、石臼である。4は、凝灰岩製の硯である。海側の額を欠く。硯面には、全面に炭がしみている。

14世紀前半に比定したい。



Ph. 34 389号遺構 (北西より)

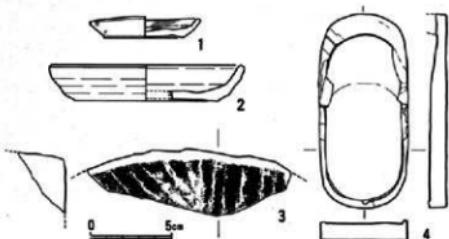


Fig. 17 389号遺構出土遺物実測図 (1/3)

536号遺構 (Fig.18・19, Ph.35~37)

B-1区2面より検出した土坑である。2面から4面にわたって調査した。プランが明瞭に検出できた3面において、長辺3.0メートル、短辺1.7メートルの長方形を呈する。2面から床面までの深さは、1.06メートルをはかる。本来、地下室状に掘られた方形堅穴状土坑であろう。なお床面の一部に55×45センチ、深さ23センチの箱型の掘り込みがあり、炭が詰まっていた。

土器・陶磁器に混じって、金箔を貼った飾り金具など、特徴的な遺物が出土している。

Fig.18の1~8は、土師器である。すべて底部は、回転糸切りされる。1~3には、内底にナデ調整、外底に板目圧痕が見られる。1~3は、皿である。口径8.4~8.5センチ、器高1.3~1.8センチをはかる。4~7は、壺である。口径12.3~13.4センチ、器高2.8~3.0センチである。8は、壺である。手捏ね成形で、体部外面は指押さえ、内面は平滑ナデ、口縁部は横ナデ調整する。黄灰色のきめ細かい胎土で、搬入土師器と見られる。9・10は、青磁である。9は、築運弁文の碗である。疊付から内側は、露胎となる。10は、鉢の高台であろう。全面施釉した後、疊付の釉を削り取って、露胎とする。11・12は、白磁である。算盤玉形の胴部に、低平な口縁が開く。胴部上半の中程に注口の痕跡が残る。注口の反対側には、亀を模した取っ手を釉で接着する。外面の体部下位から底部は露胎、内面の体部下半は、露胎である。12は、口禿の皿であ



Ph.35 536号遺構検出状況（西より）



Ph.36 536号遺構（西より）

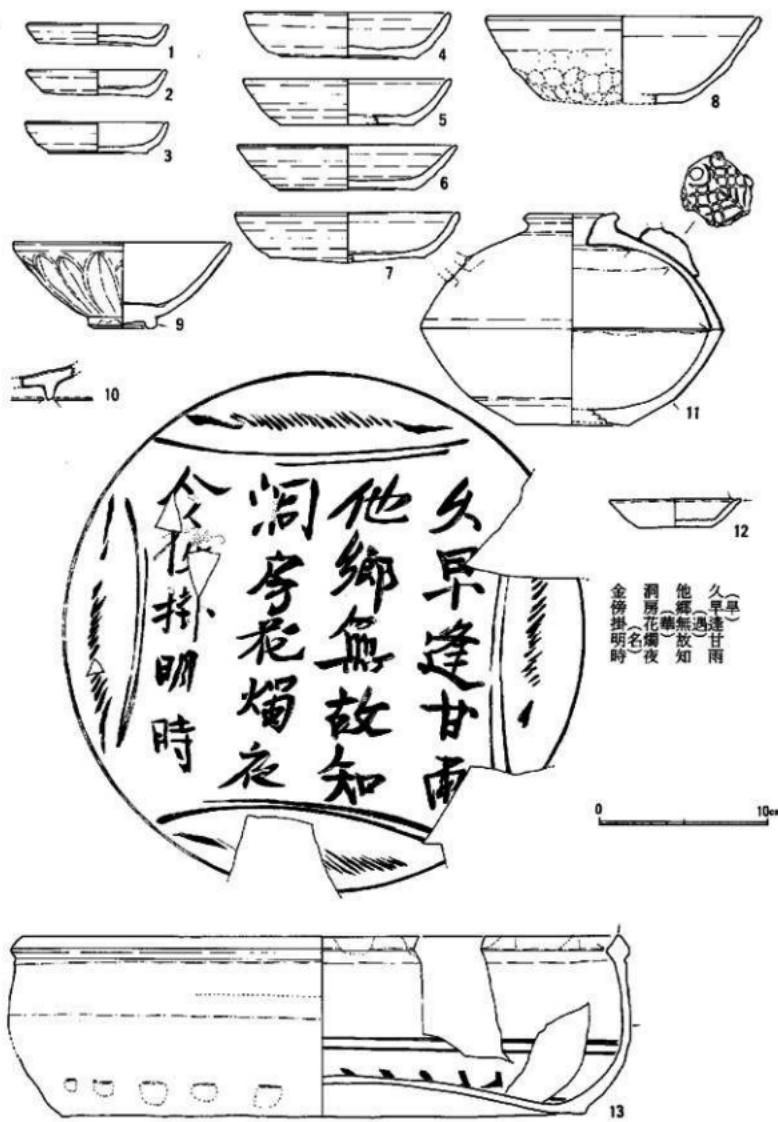


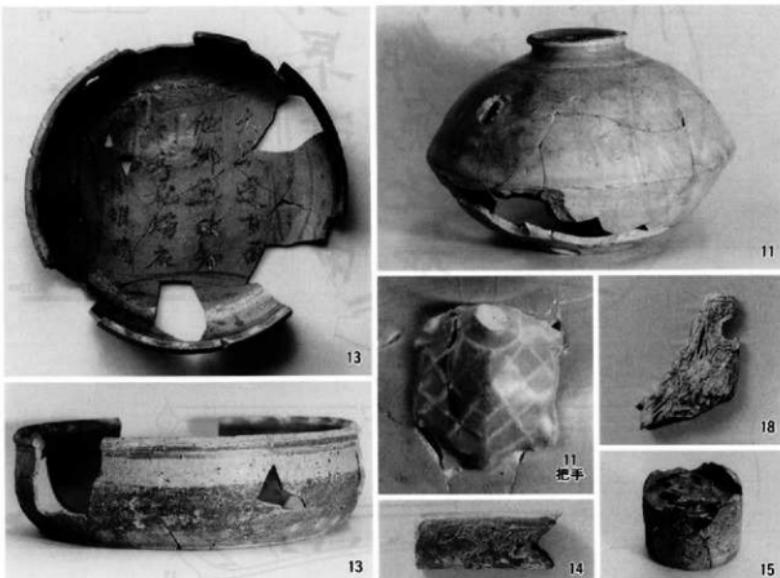
Fig.18 536号遺構出土遺物実測図1 (1/3)

る。13は、黄釉鉄絵陶器の盤である。見込みに、五言絶句を書く。詩文は、実測図横に示す。作者は、南宋の洪邁（1123～1202）であるが、洪邁の詩とは、細部で字句が異なる。すなわち、1行2字目の「早」は「早」、2行3字目の「無」は「遇」、3行3字目の「花」は「華」、4行4字目の「明」は「名」の誤りである。洪邁は、南宋に仕えた名臣である。

14・15は、金箔を貼った銅製品である。14は、衝立などの横木の端にかぶせた金具であろう。下面には、スリットがあり、内側に木質が残っていた。小口と前面に、蓮華文を線彫りする。前面の蓮華文の隙間は、魚子にする。15は、棒の端部にかぶせた金具である。一端を内側に曲げた円筒に、円盤をはめ込む。円盤には、蓮華に乗った阿弥陀仏の種子をはりつける。円筒の外面には、蓮華文をあしらい、すきまは、魚子でうめている。筒部の内側に、木質が残っていた。14・15は、意匠、細工の共通性からみて、一連の金具で、おそらく



Fig.19 536号遺構出土遺物実測図2 (1/2)



Ph.37 536号遺構出土遺物 (縮尺不同)

法具に用いられたものであろう。16・17も木製品の端部をおおう飾り金具である。ただし、文様はなく、金箔も貼られていない。16は、中央を銅釘で釘止めする。17は、左右から銅釘を打つ。17の端部は、花弁形を呈している。18は、骨製品である。毛彫りと刻みによって、銀杏の葉のような文様を描く。穿孔の下の毛彫りによる枠取りの中は、骨の粗面を利用している。用途は、不明である。

このほか、土鍋、瓦質土器鉢・火鉢、瀬戸灰釉梅瓶、青白磁梅瓶、天目、鉄滓などが出土した。  
13世紀後半の遺構と考えられる。

#### 876号遺構 (Fig.20, Ph.20)

E-3区2面より検出した、土師器の一括廃棄土坑である。長径114センチ、短径103センチ、検出面からの深さ134センチをはかり、円形堅穴状を呈する。埋土中に雑然と土師器が廃棄されていた。

出土遺物の一部を、Fig.20に示す。1~42は、土師器である。1は、いわゆる「へそ皿」で、京都からの搬入品である。2~17は皿、18~42は壺である。すべて底部は、回転糸切りである。5・8・9・12・17・20・22・25~27・29~32・34・35・38には、内底ナデ調整と、外底の板目圧痕がみられる。皿は、口径7.6~9.6センチ、器高1.2~1.7センチをはかる。壺は、口径11.9~13.0センチ、器高2.6~3.1センチである。43は、瓦質土器の片口こね鉢である。44は、青白磁の印花皿である。45は、同安窯系の青磁碗である。46は、龍泉窯系青磁の鉢で、錦運弁文がみられる。47・48は、白磁である。

このほか、滑石製石鍋の破片を転用した、硯の未製品などが出土した。

13世紀後半のいわゆる土器溜遺構である。



Ph.38 876号遺構（南東より）

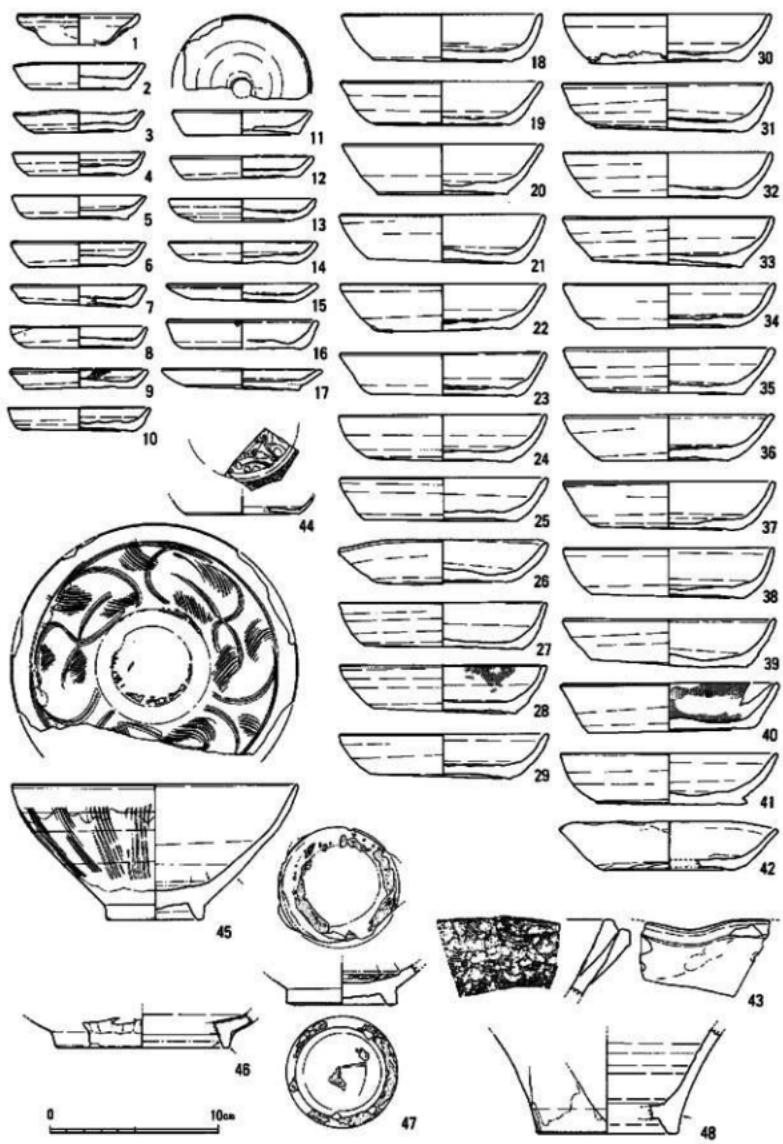


Fig.20 876号遺構出土物実測図 (1/3)

### 1261号遺構 (Ph.39・40)

D-1区3面より検出した小土坑である。長径50センチ、短径43センチの卵型を呈し、深さは15センチをはかる。底面に、陶器の植木鉢が横転していた。植木鉢周囲の埋土には、焼土が混じる。

Ph.40に植木鉢を示す。灰褐色できめ細かく良く詰んだ胎土に、褐色の釉を薄くかけた陶器である。底部には、穿孔がみられる。

このほか、墓石状のガラス玉（黄色）が出土した。



Ph.39 1261号遺構（北西より）



Ph.40 1261号遺構出土遺物（縮尺不同）

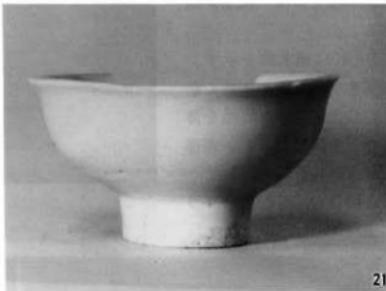
### 1539号遺構 (Fig.21・22, Ph.41・42)

E-1区4面より検出した、地下室状土坑である。長径2.7メートル、短径2.3メートルの楕円形を呈し検出面からの深さは1.56メートルをはかる。底面には、四隅に杭（柱？）を打ち、杭の背面に板を渡して壁をつくる。壁の長さは、北壁94センチ、南壁102センチ、東壁114センチ、西壁110センチで、南北に若干長い長方形となる。壁の立ち上がりは、9センチ前後残っていただけで、どの程度上まで壁が張られていたのか、確認できなかった。また、木質の遺存状態が悪く、痕跡が追えただけなので、木目などが見えたわけではないが、痕跡が紙状につながっていたことから、それぞれの壁は板材を横に寝かせて立てていたものと推定できる。杭（柱？）もわずかな木質と、圧痕のみで、長さなど不明だが、土坑床面への打ち込みは浅く、ほとんど立てていた状態に近い。

用途は特定できないが、この構造だけで地上の小屋組を支えるのは不可能であろうから、屋内に設けられた地下貯蔵施設とみるのが妥当と考える。

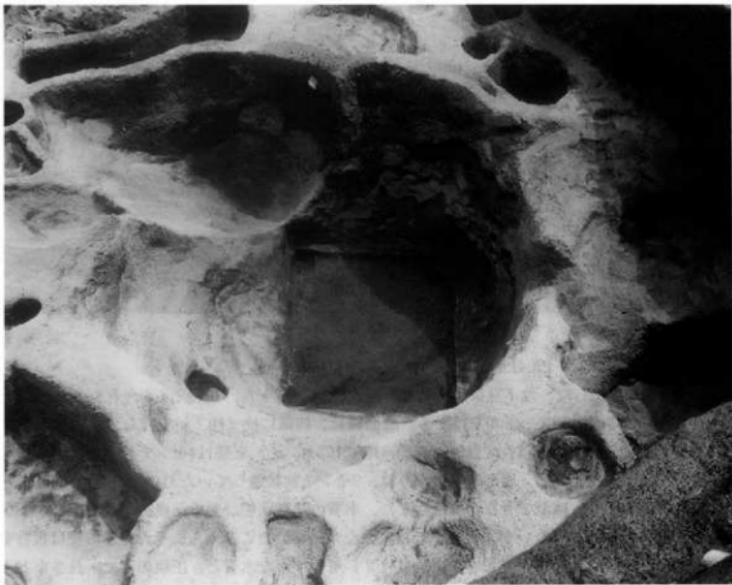
多くの遺物が出土したが、次に述べるD-2区4面の1827号遺構と接合できる遺物があり、遺物全体の示す年代観も近いことから、同時に営まれた（放棄された）遺構と考えられる。

Fig.21・22に出土遺物の一部を示す。1～8は、土師器である。1～3は皿で、底部は回転ヘラ切りする。内底部にはナデ調整が、外底部には板目圧痕が認められる。口径8.7～9.5センチ、器高1.35～1.45センチをはかる。4～8は、壺である。7・8は底部回転糸切り、他は回転ヘラ切りする。7のみが平底で、内面のナデ調整と外面の板目圧痕をとどめる。4～6・8は、内面にコテをあて、平滑に整える。口径13.3～16.3センチ、器高3.0～3.6センチをはかる。9～12は、瓦器である。9は、椿葉型瓦器塊で、内外面ともに細かい単位のヘラ磨きを、密に施す。10～12は、筑前型瓦器塊である。内外面に幅広のヘラ磨きを行うが、痕跡が不明瞭で見にくい。13・14は、高麗青磁である。見込みと疊付には、耐火土の目痕が残る。15～28は、白磁である。15・16は、小壺である。16の口唇部は、露胎とな



Ph.41 1539号遺構出土遺物

21



Ph.42 1539号遺構（北より）

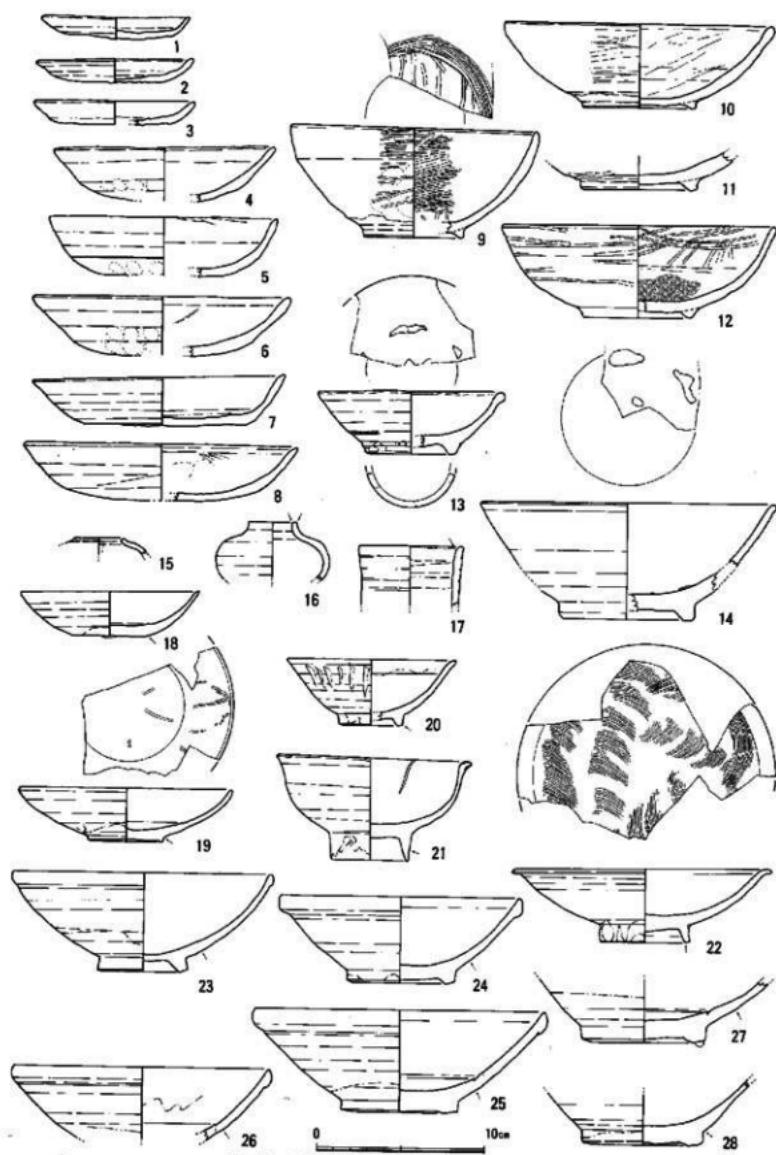


Fig.21 1539号遺構出土遺物実測図1 (1/3)

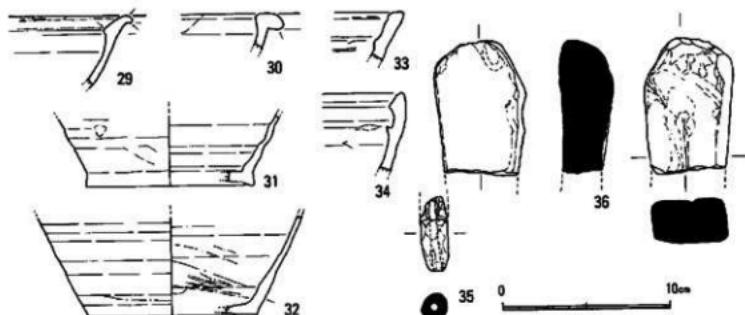


Fig.22 1539号遺構出土遺物実測図 2 (1/3)

る。17は、水注の頸部であろう。18・19は、皿である。外底部は、露胎となる。20・21は、小碗である。21は、口縁に刻み、内面に白堆線をいれ、輪花につくる。22は、浅碗もしくは皿と呼ぶべきか。内面全体に拂拭文様が施される。23~28は、碗である。いずれも、口縁を玉縁につくる。23は玉縁の小さいⅡ類で、体部下位は露胎となる。釉下には、白化粧がかけられているようである。24~28は、玉縁の大きいⅣ類にある。見込みには、圓線が巡るが、24~28には圓線が刻まれていない。体部下位は、露胎である。29は、黄釉陶器の盤である。口縁の内端から内面および外端に釉がかかる。30は、黄釉陶器の鉢である。内面から口縁外端にかけて施釉、体部外面には化粧土が残る。31・32は、褐釉陶器の壺である。33・34は、無釉陶器のこね鉢である。胎土は、砂礫を多く含み粗い。35は、土師質の管状土錘である。36は、砥石である。半ばを欠く。凝灰岩製である。このほか、天目茶碗、石鍋、白磁器書（「陳口」）などが出土している。

12世紀前半の遺構である。

#### 1827号遺構 (Fig.23~44, Ph.43~58)

D-2区4面より検出した、陶磁器の一括廃棄土坑である。径1.5メートル、深さ77センチほどの略円形もしくは隅丸方形を呈する。埋土の中程から床面まで、土坑一面に、土器・輸入陶磁器などが捨てられていた。出土した遺物は、すべて火熱を受けて焼けている。

陶磁器が廃棄されていた部分は、ほとんど土気がないが、ちょうど中程から上下2層に分層できる。上下とも炭粒混じりの黒褐色壤土であるが、下層には大量の麦・米が混じっていた。割合的には、麦が圧倒的に多く、少量ではあるが胡麻も含まれていた。これらは、黒く炭化していた。

一方、土坑の壁面自体には、火熱を受けた形跡はない。したがって、これらの遺物が被災した後、それを捨てるために掘られた廃棄土坑と思われる。

出土遺物は、大半が輸入陶磁器で、これに若干の土師器・瓦器・石鍋が加わる。廃棄の主体が、輸入陶磁器であることは明かである。さらに、詳細な内容は後述するが、輸入陶磁器の内訳に、片寄りがみられる。すなわち、この時期には、当然出土するはずのタイプで、まったく含まれていないものがある。それらの点から、商品として保管されていた数タイプの陶磁器が被災し、売り物にならなくなつたために穴を掘って捨てた、といったところであろう。これについては、第三章で改めてふれたい。

出土遺物を、Fig.24~44に示す。1~6は、土師器である。1・2は皿で、1は底部をヘラ切り、2は糸切りする。内底にはナデ調整、外底には板目圧痕が残る。法量は、それぞれ口径8.9、9.5センチ、器高1.2、1.1センチをはかる。3は、壺である。底部は、ヘラ切りする。内面は、横ナデ後にコテをあてて、平滑に整える。口径15.5センチ、器高3.2センチをはかる。4は、壺であろう。底部には、円盤を貼りつけ、平高台にする。外底部は、回転糸切りである。内面は、平滑にナデ調整（コテ？）する。在地産の土師器には、見られない形態である。5・6は、壺である。5の内面は、四分割でヘラ磨きする。高台は、剥離している。6は、底部の破片である。内面は一方向にヘラ磨き、外面は、横位のヘラ磨きである。7~9は、瓦器である。筑前型瓦器で、幅広のヘラ磨きが浅く施されており、単位は非常に見にくく。7は小塊、8は浅塊、9は深塊である。

10は、越州窯系青磁の碗である。内面には、沈線で花文を描き、見込みには目痕がのこる。体部下位は、露胎となる。

11は、初期龍泉窯系青磁の碗である。体部外面に、片切り彫りと櫛搔き文で花弁を描く。12・13は、青白磁である。12は碗、13は灯火器である。亞部と脚部は、釉でつなぐ。14~22は、天目茶碗である。らっぽ形に大きく開いた体部を持ち、小さく屈曲して口縁となる。火熱による釉の荒れが著しく、融けてできたりわや、発泡などが見られる。

Fig.25・26に示したのは、磁州窯系の陶磁器である。23は、綠釉陶器である。器形が判断しがたいが、内側まで施釉されているので、壺の頸部と考えた。火熱のために釉が荒れて発泡し、変色して部分的に銀化したり、赤褐色を呈したりしてい

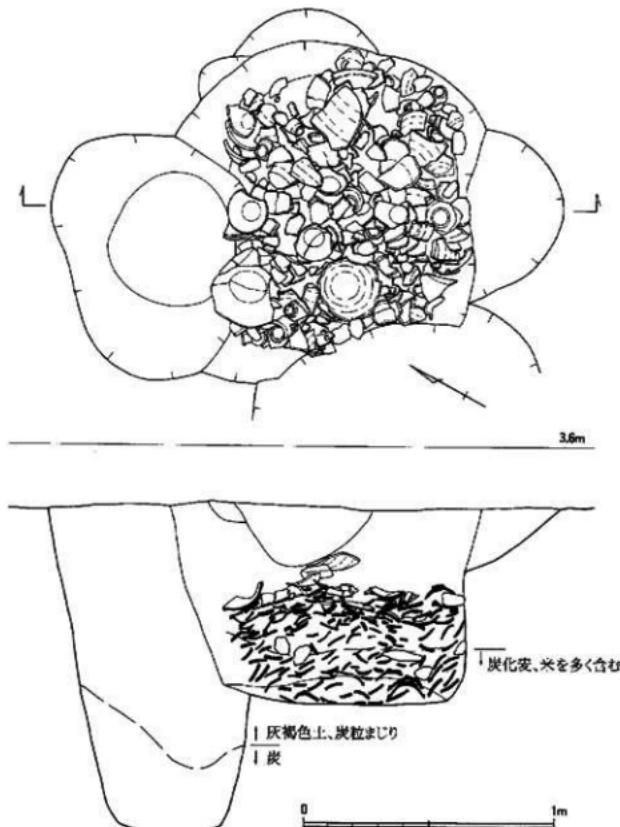


Fig.23 1827号遺構実測図 (1/20)



Ph.43 1827号遺構（北より）



Ph.44 1827号遺構（東より）



Ph.45 1827号遺構（南西より）



Ph.46 1827号遺構断面（西より）

る。胎土は、淡灰褐色できめが細かく、良質である。24~29は、白磁鉄絵である。白色で緻密な胎土に鉄絵を描き、透明釉を施す。24~26は盃、27~29は盃托である。30は、27~29を合成した復元図である。口唇から鉗端部にかけて施釉する。31~44は、白釉陶器（白磁）である。灰色できめの粗い胎土に、白化粧を施し、透明釉をかける。白化粧は体部外面の下位までしかなされないが、釉は全面にかけられている。見込みには、ハマの爪痕が4カ所見られる。31~39は、皿である。口縁に刻み、体部内面に白堆線を入れて、輪花につくる。39の外底部には、へら記号状の沈線が見られる。40~44は、碗である。42~44は、口縁に刻み、体部外面にも刻線を入れ、輪花につくる。口径20.5~21.0センチと、かなり大振りで、むしろ鉢と見るべきかもしれない。

Fig.27~28は、廣東系の白磁である。45は、小壺の蓋である。上面にのみ、施釉する。46は、小壺である。体部下位は、露胎である。47~48は、大型の合子である。48は、4面下からの出土であるが、

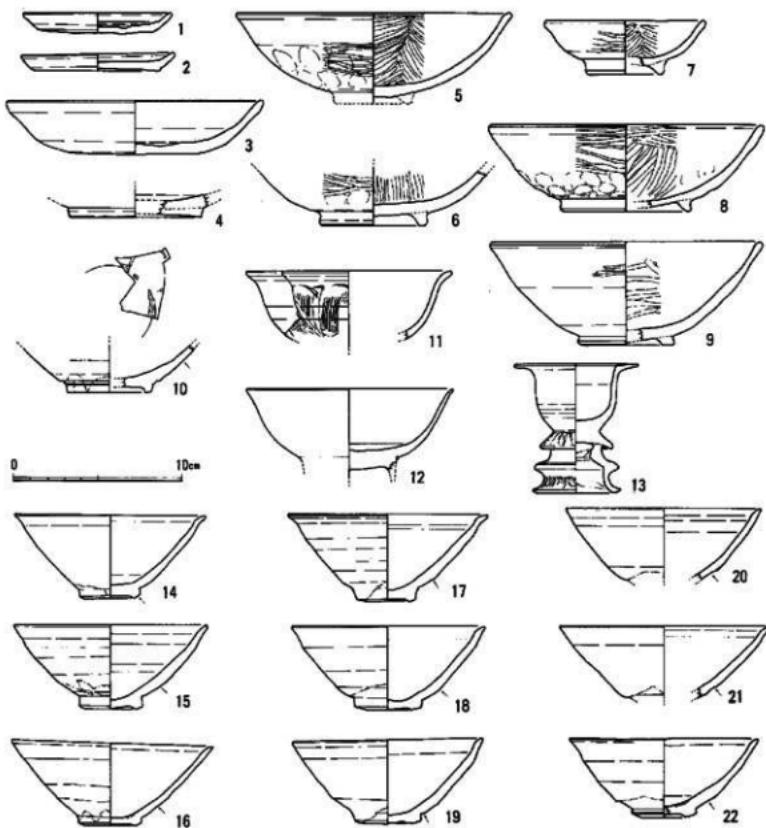
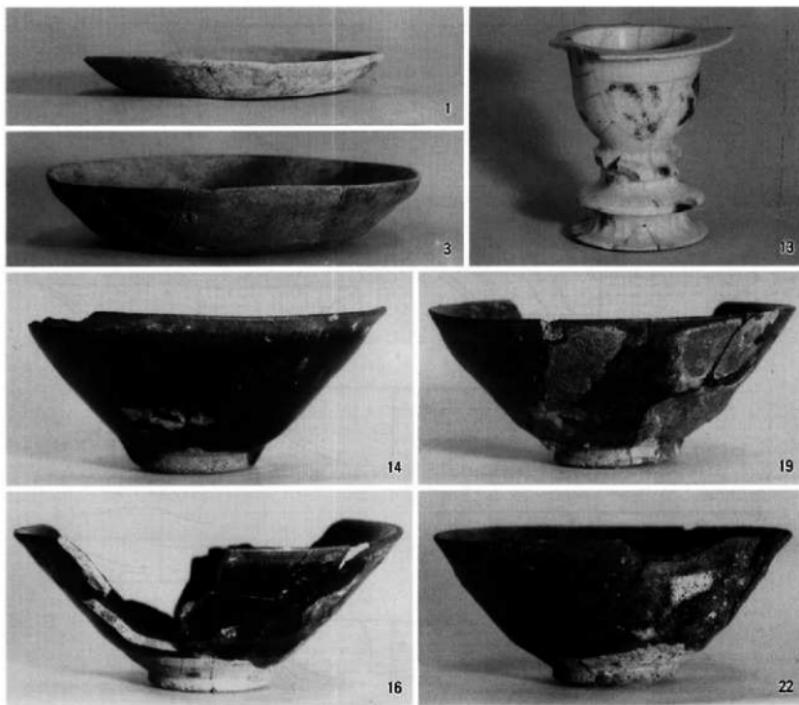


Fig.24 1827号遺構出土遺物実測図 1 (1/3)

法量・釉調などから対になるものと判断した。身の内側には、本例では欠失しているが、3カ所に蓋を付け、蓋の間と中央とを貼花で結ぶ。49~75は、皿である。75の内面に櫛描文がある以外は、すべて無文である。形態的にも同タイプで、内湾する体部と上げ底気味の平底をもつ。体部下位は、露胎である。76~78は、碗である。76・77は、口縁を小さな玉縁につくる、II類の碗である。78は、博多遺跡群の陶磁器分類では、0類で、外面に弧線を垂下させる。79~84は、鉢である。体部下位は、露胎となる。80は、体部内面に櫛描文を、81は、沈線で花文を描く。85~87は、長頸壺である。おそらく、同一個体で、体部は外から強く刻線を入れ、瓜形に歪ませる。88も、瓜形の壺または瓶であろう。89は、大壺の体部である。体部下半に沈線で波状文をあしらう。

Fig.29には、上記以外の白磁の皿を集めた。90~93は、小皿である。90は、口縁を玉縁につくる。底部を欠くが、高台を持つタイプである。91も高台を欠くが、端部の破面付近の様子から、高台があつたものと知れる。92・93は、平底である。92は、口縁を欠くが、体部が直線的に開き、小さく外側に折り返して口縁となるタイプであろう。93は、一見前述した広東系の平底皿に似るが、胎土が純白色の磁質で、これに透明感・ガラス光沢の強い釉をやや厚めにかけており、区別するのは容易である。94~100は、やや大きめの皿である。直線的に立ち上がる高台と、内湾しながら大きく開き、小さく外



Ph.47 1827号遺構出土遺物1 (縮尺不同)

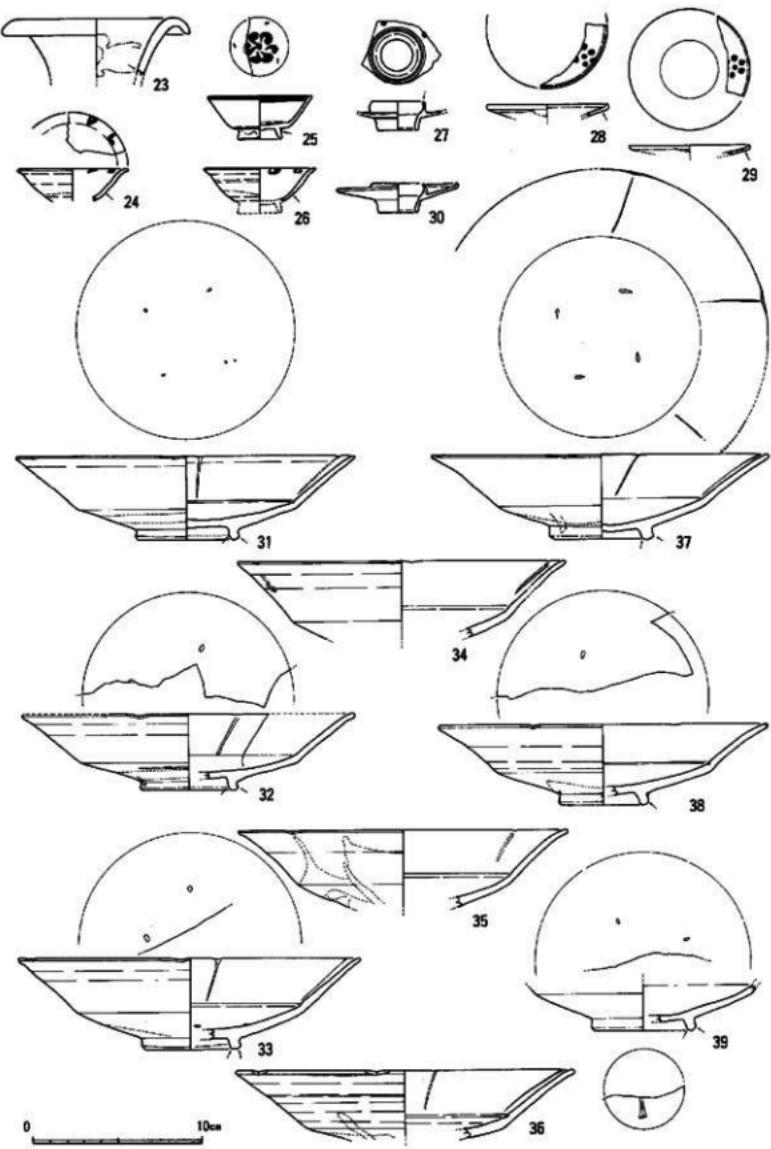
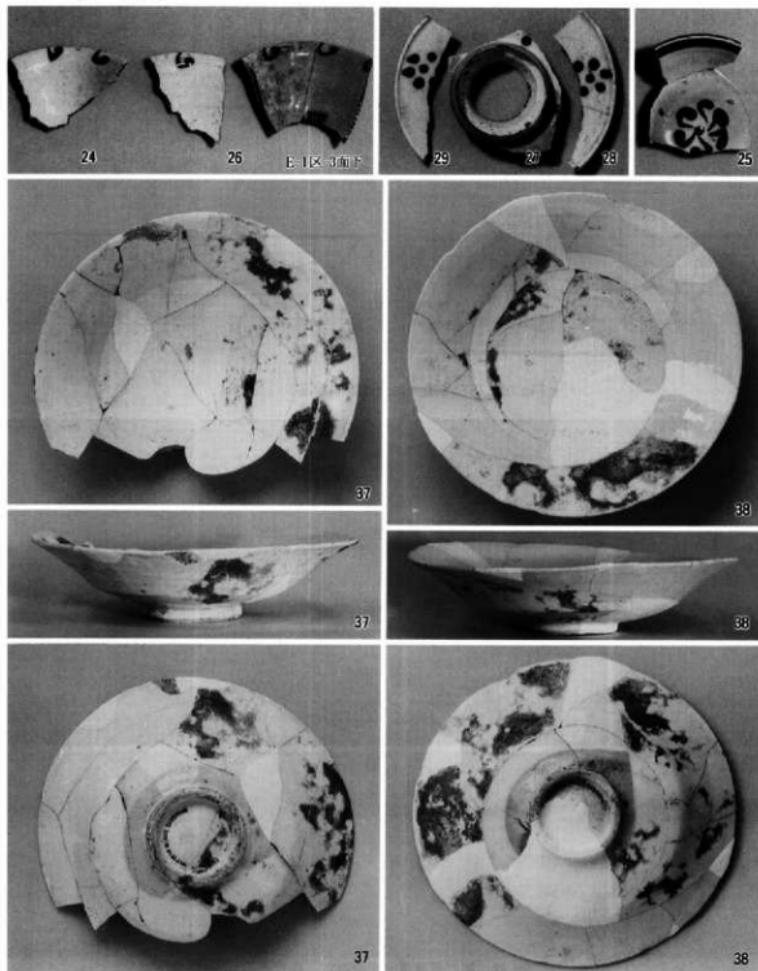


Fig.25 1827号遺構出土遺物実測図2 (1/3)

反して口縁をつくるものである。高台の際付近から外底部は、露胎となる。94は、他と比べて肉厚で、口縁の返りも強い。高台にも厚みがあり、断面は台形を呈する。体部内面と見込みには、左回りに中心に向かって吹き込むような求心的な描文が見られる。95・98・99も、厚みのある高台につくる。99には、見込みに描文が施される。96・97・100の高台は、細く立ち上がる。いずれも、見込みに横描文をあしらう。



Ph.48 1827号遺構出土遺物2 (縮尺不同)

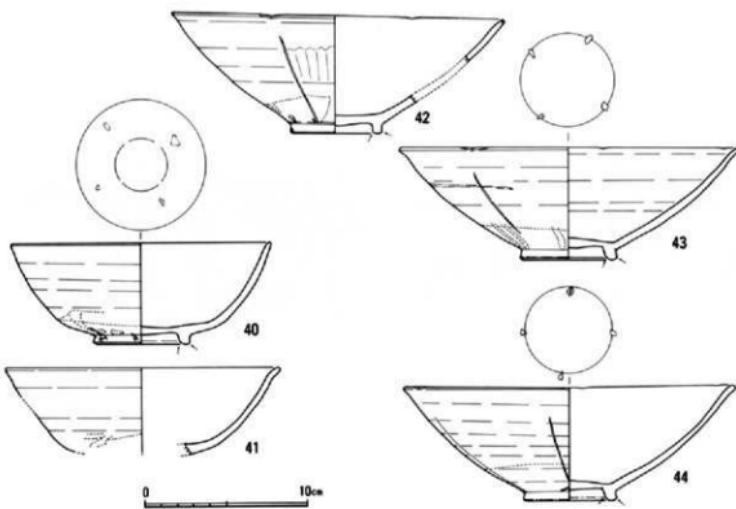
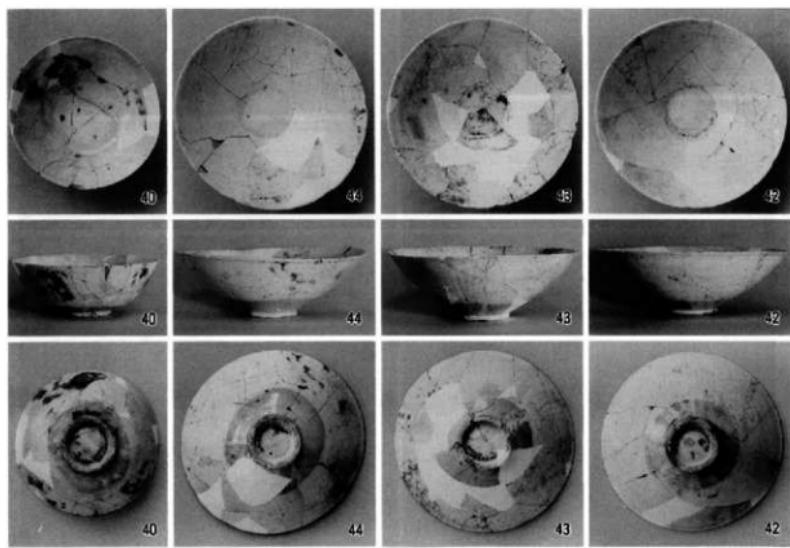


Fig.26 1827号遺構出土遺物実測図3 (1/3)



Ph.49 1827号遺構出土遺物3 (縮尺不同)

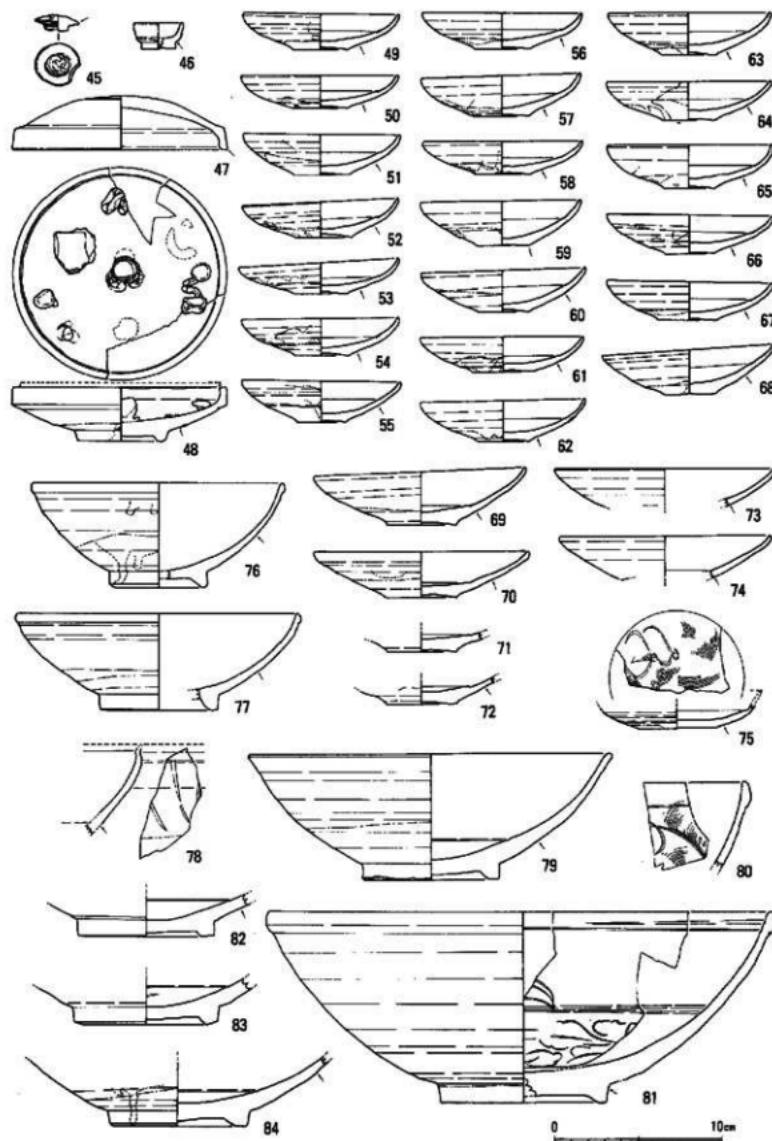
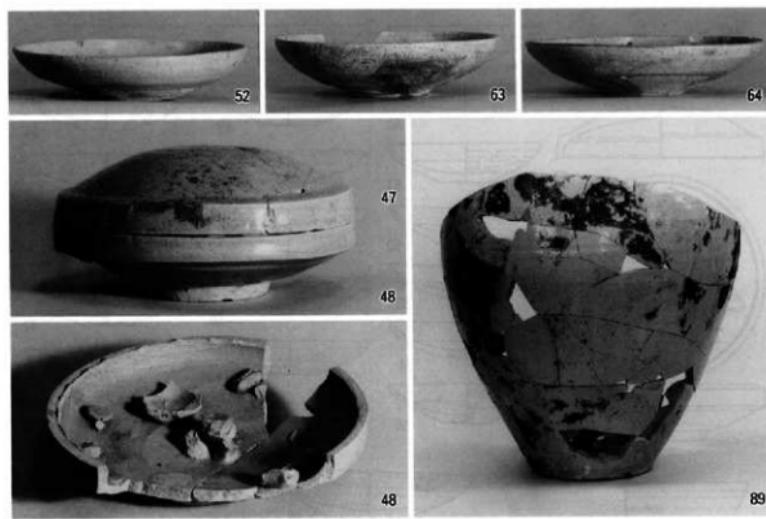


Fig.27 1827号遺構出土遺物実測図4 (1/3)



Ph.50 1827号遺構出土遺物4 (縮尺不同)

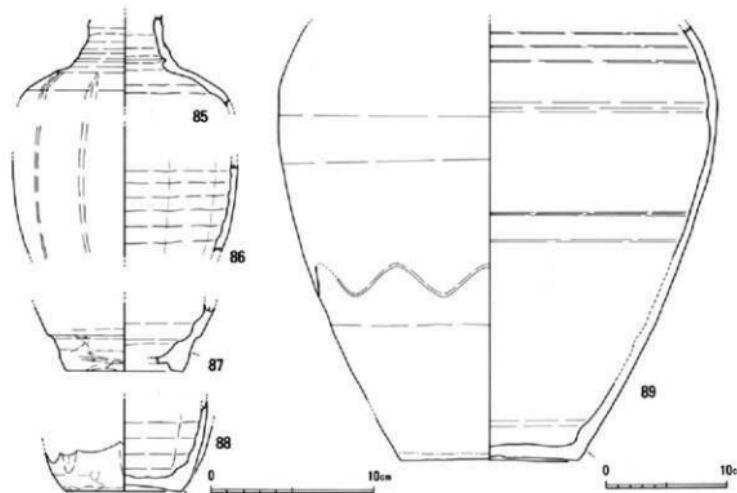


Fig.28 1827号遺構出土遺物実測図5 (1/3)

101～113は、分厚くて外側に踏張った高台から、緩く内湾する体部を立ち上げる白磁碗で、口縁は直口する。口縁下の内面には、1条の沈線を巡らす。高台の際付近から外底部は、露胎である。101・102の見込みには、小さな段を削りだす。103～113のこの部分は、輪状に釉を掻きとつて、露胎にしている。この露胎部分や高台疊付には、耐火土や細砂が、付着しており、重ね焼きがなされたことを示している。102～104・113には、外底部に墨書が書かれている。102～104は、花押である。102と104は、同一花押である。113は、下半分に汚れが付着しており、この部分での墨書の有無は判断できない。上の文字は、明らかに「戴」と読める。

114～117は、上とほぼ同じ特徴を持つ白磁碗で、体部内面に櫛模で花文を描いている。114は小振りの碗で、見込みには圓線を巡らせる。外底部には墨書があり、「戴」+花押と読める。花押は、103のそれと同一である。115～117は、見込みを輪状に露胎とする。

118～120は、台形に削り出された高台から、緩く丸みを持った体部が続き、わずかに外反気味に口縁を收める白磁碗である。見込みには、圓線が巡る。釉は、灰青色を帯びる。体部下位から外底部は、露胎である。

121～130は、口縁を玉縁につくる白磁碗である。高台の削り出しは、厚くて深い。高台の断面は、

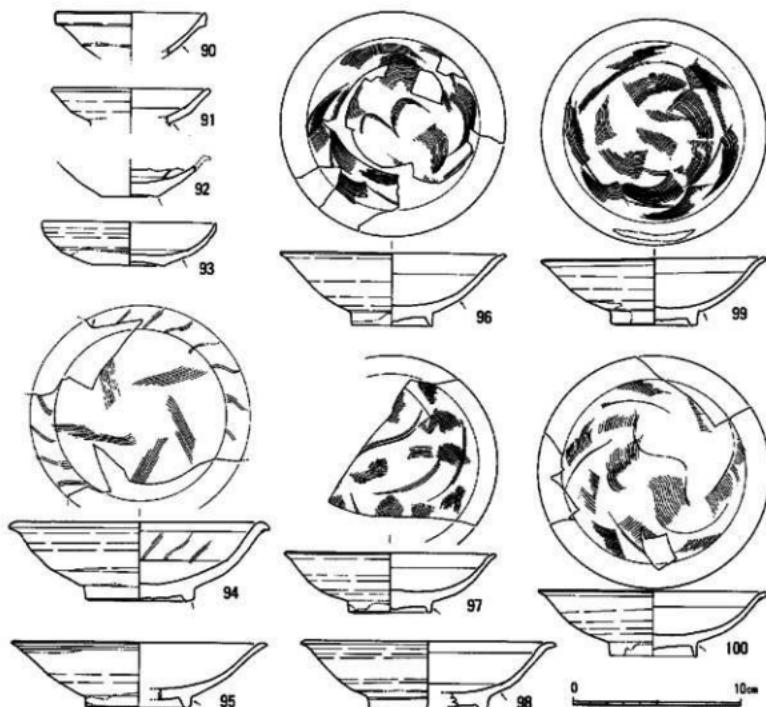


Fig.29 1827号遣構出土遺物実測図6 (1/3)

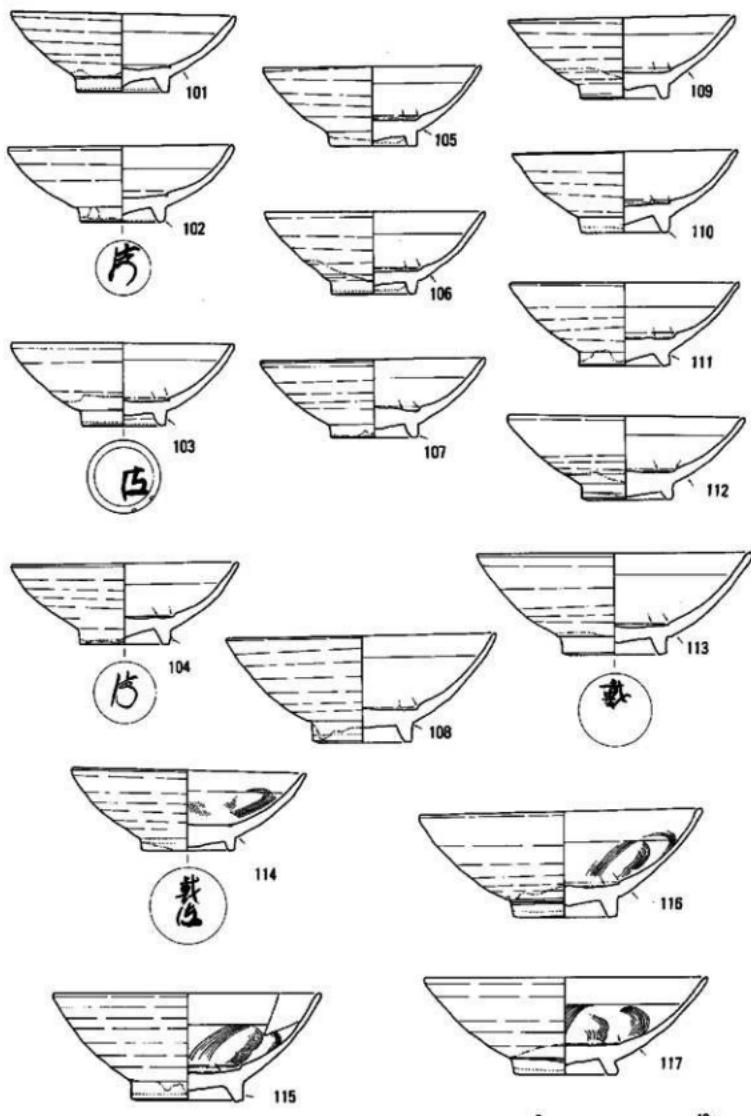
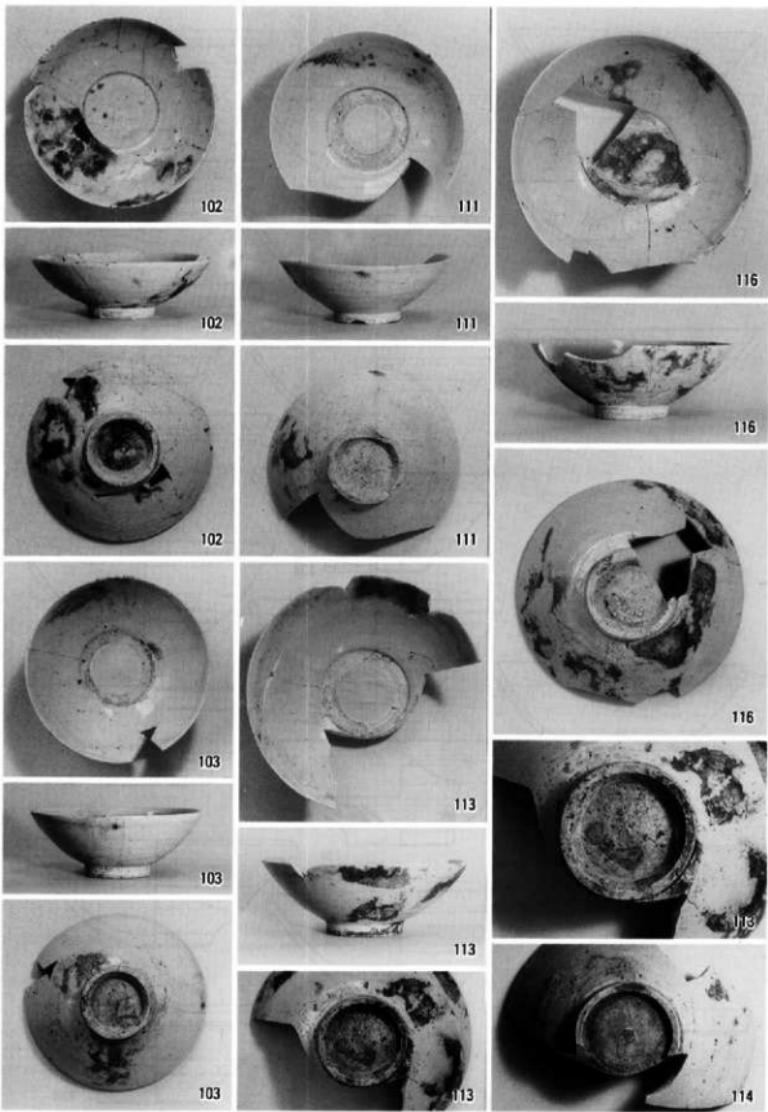


Fig.30 1827号遺構出土遺物実測図7 (1/3)



Ph.51 1827号遺構出土遺物5 (縮尺不同)

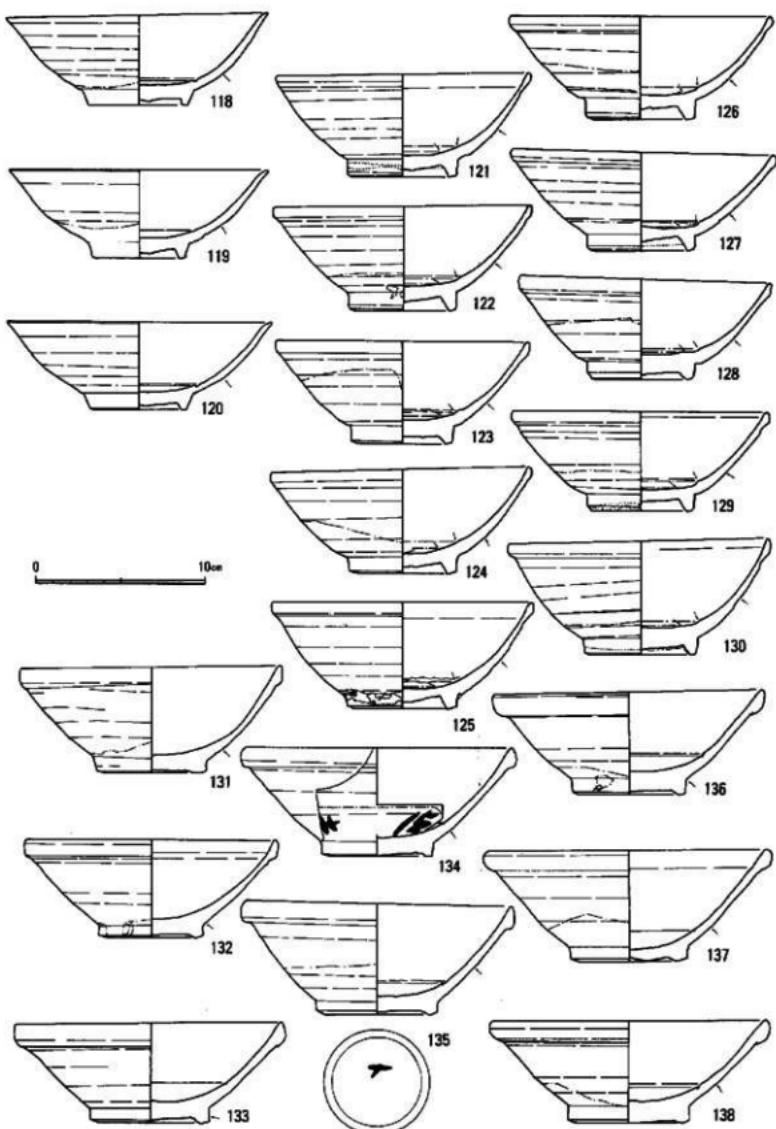
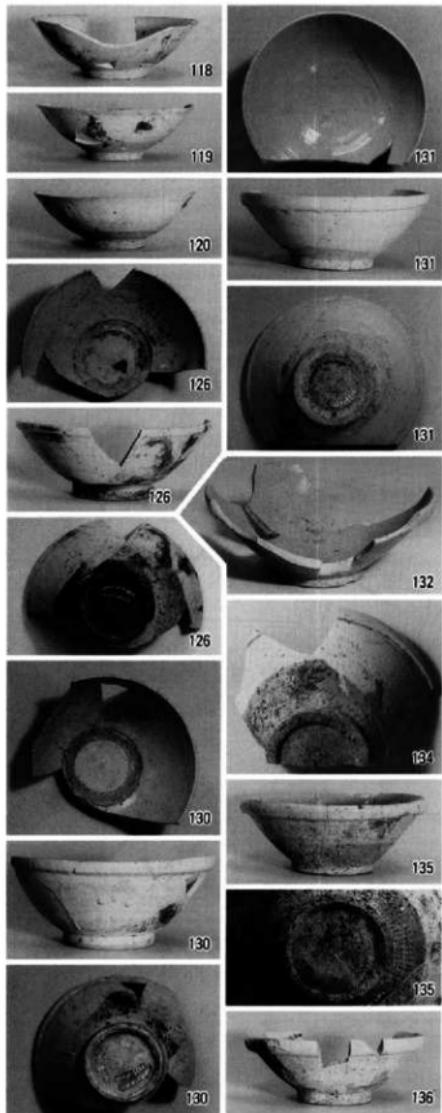


Fig.31 1827号造構出土遺物実測図B (1/3)



Ph.52 1827号遺構出土遺物6（縮尺不同）

角張った台形を呈するが、128～130のように角がとれて若干円みを帯びたものもある。体部は、高台からいったん横に開いた後立ち上がっており、丸みを感じさせる。施釉は、内面から体部上半にかけて行われており、体部の下半分から外底は、露胎である。また、見込みの釉は、輪状に搔き取られている。

131～146も玉縁の白磁碗である。玉縁は幅広で、高台の削り出しは浅い。体部は、高台際から直線的に開く。体部下位から外底部は、露胎である。太宰府分類・博多分類の白磁碗IV類である。131・132には、見込みに圓線が見られない。134の体部下位、135の外底部には、墨書が残る。134の墨書は文字または花押、135は不明である。

147～150は、直線的に高く立つ高台を持つ白磁碗である。口縁は、緩く外反する。147は、見込みの釉を輪状に搔き取る。体部下位は、露胎である。博多分類では、白磁碗V類にあたる。

151～156は、直立する高台と、水平に小さく張り出す口縁を持つ白磁碗である。内面には、櫛描文が配される。155・156は、体部外面に弧線を垂下せる。体部下位は、露胎である。博多分類の白磁碗VI類に当たる。

Fig.33～36は、博多分類による陶器A群である。主として、磁灶窯系の製品と考えられる。157は、蓋である。鶴部先端から上面に、黒褐釉を施す。158は、褐釉の蓋である。外面の破片上端から消失している頂部にかけて、施釉する。159・160は、黒褐釉の急須である。頸部内面から、外面の体部下位まで、刷毛塗りで施釉する。口縁の上面は露胎となり、目痕が見られる。161・163は褐釉、162・164・165は黒褐釉の小甌である。内面では、口縁部のやや下から内底部全体、外

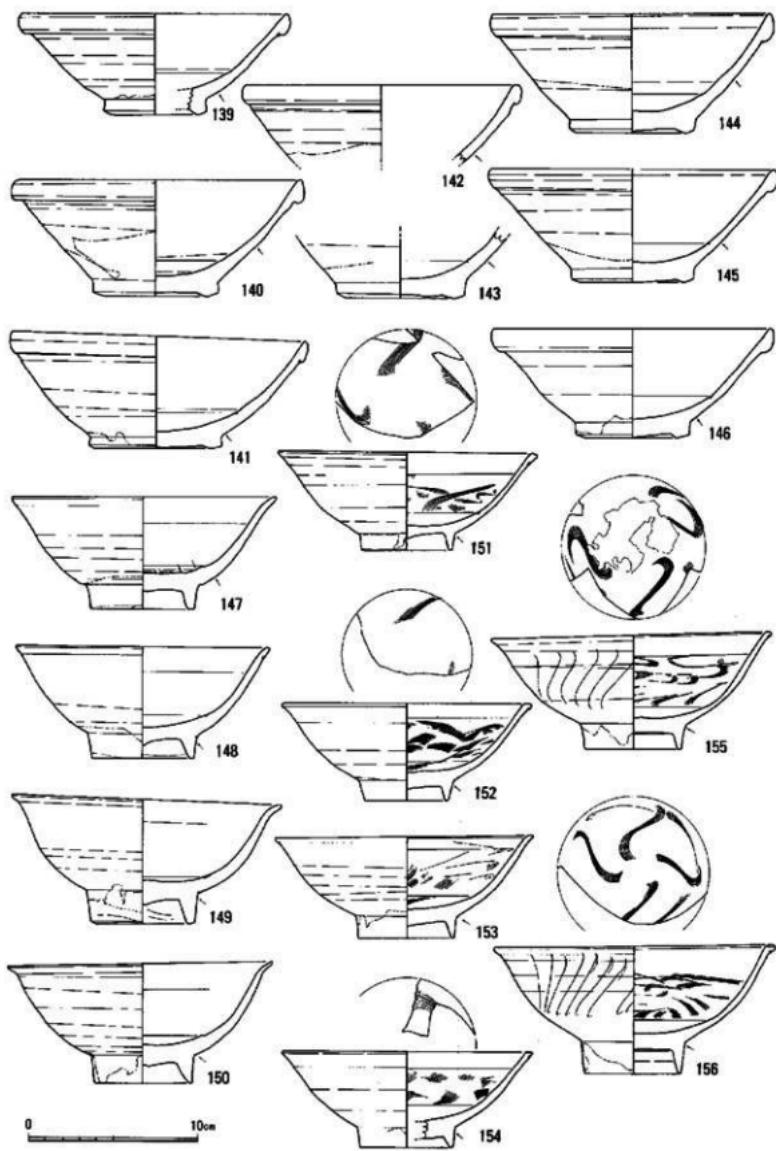
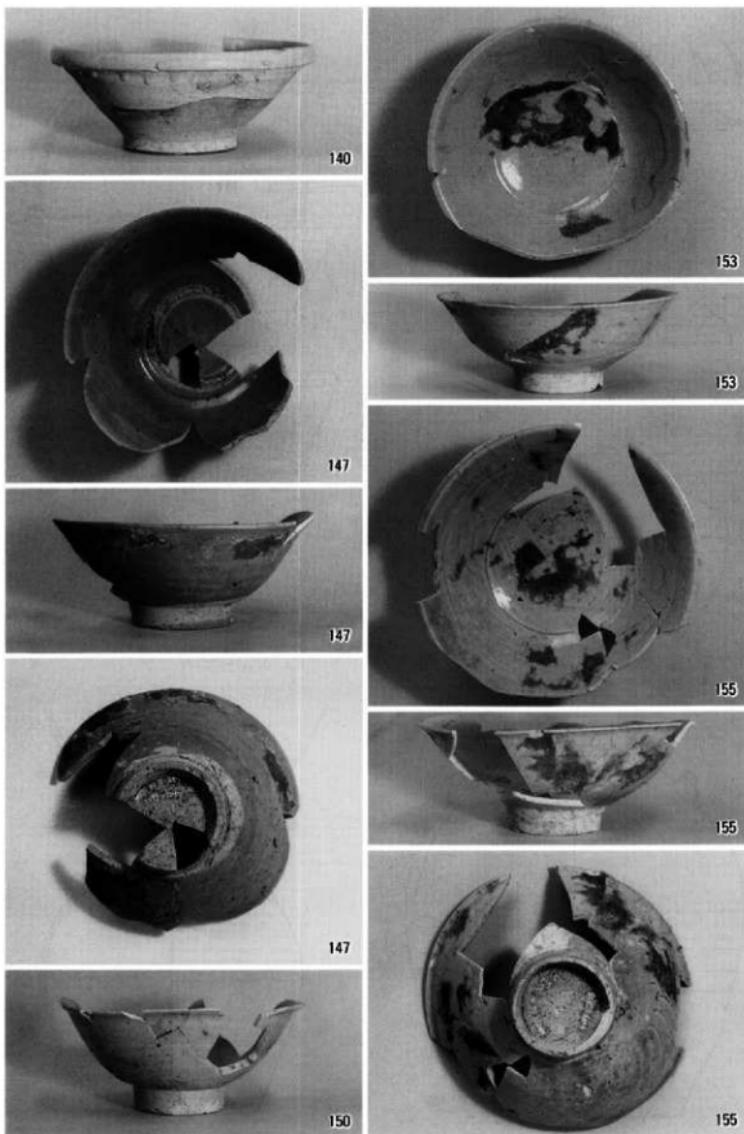


Fig.32 1827号遣構出土遺物実測図9 (1/3)



Ph.53 1827号遺構出土遺物7 (縮尺不同)

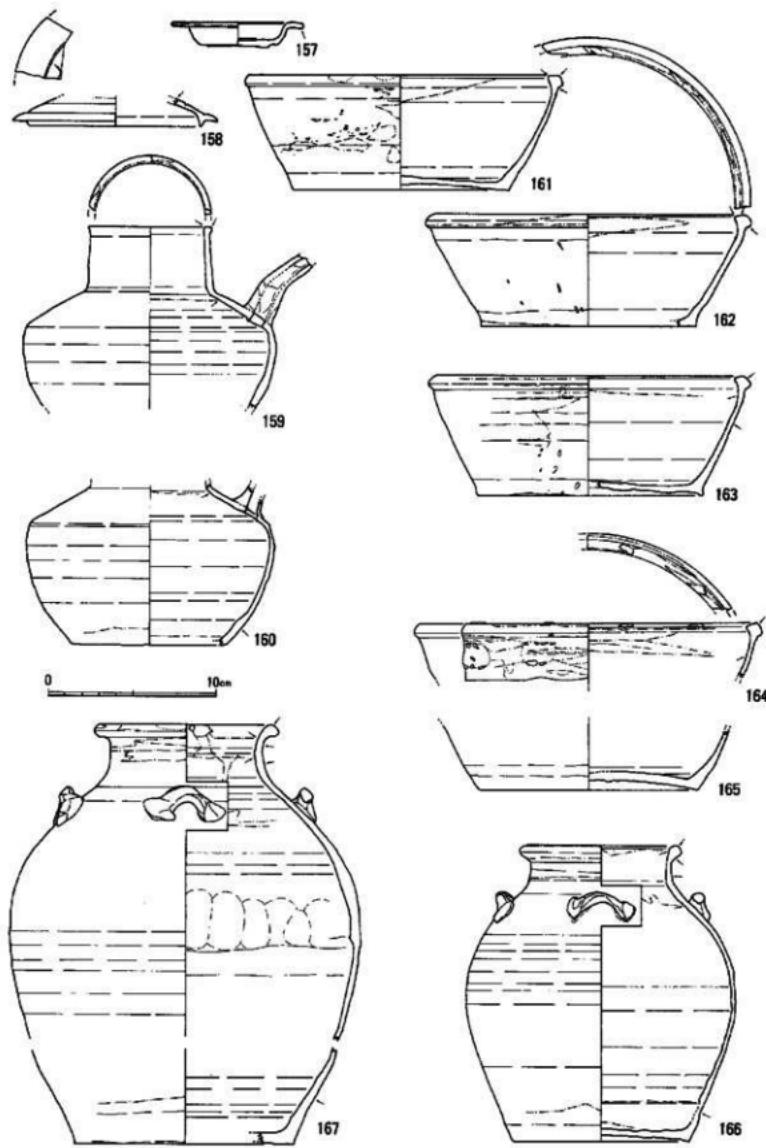


Fig.33 1827号遺構出土遺物実測図10 (1/3)

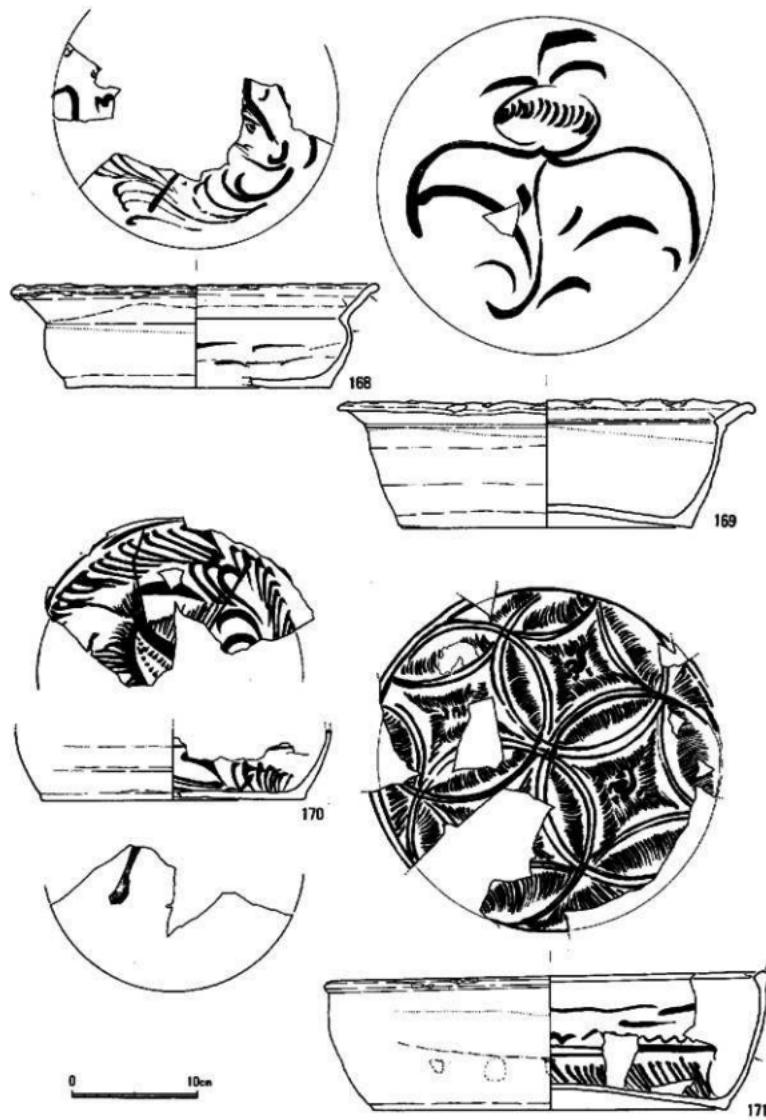


Fig.34 1827号遺構出土遺物実測図11 (1/4)



Ph.54 1827号遺構出土遺物 8 (縮尺不同)

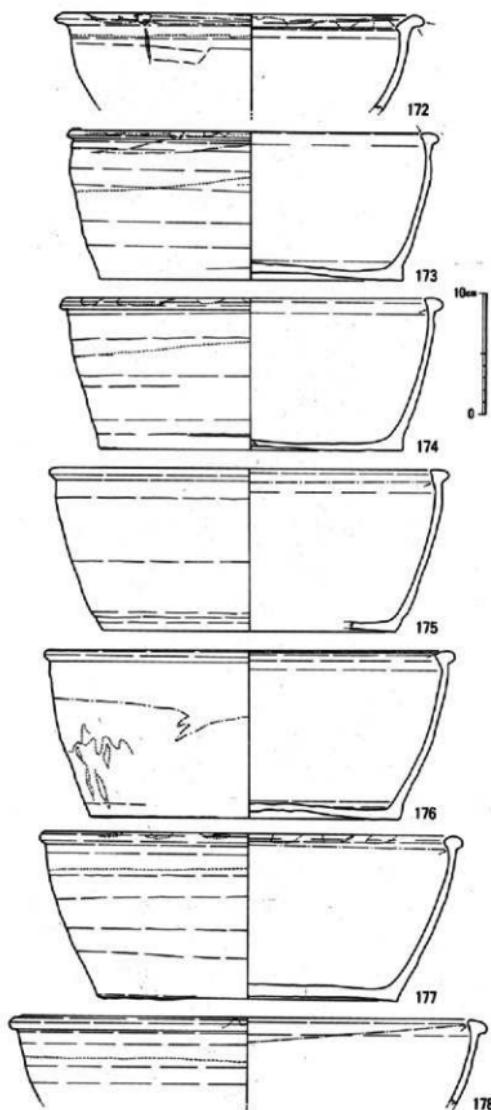


Fig.35 1827号遺構出土遺物実測図12 (1/4)

面では、口縁の外端部付近から体部の上位にかけて施釉する。166は、褐釉四耳壺である。頸部内面と、外面の頸部から体部下位にかけて、施釉する。頸部外面の釉は、軽く拭ったのか、かすれている。167は、黄釉四耳壺である。頸部内面、口縁部外面、頸部下半から体部下位の外面に施釉する。口唇部には目痕が見られる。体部上半と底部付近の二部位にわかれ、接合できないが、同一個体である。

168～171は、黄釉鉄絵の盤である。168・169は、外方に長く伸びた口縁を持つもので、口縁の外面および口縁内面の屈曲部以下に施釉する。168では口縁の外面に、169では口縁上面に、目土が付着する。170は、底部に墨書きがみられるが、部分的に残っているのみで、判読できない。171は、断面が変形を呈する玉縁につくるもので、内面と、外面の体部上半に施釉する。口縁の上面と体部外面の中程からやや下に、目土が付着している。

172は、黄釉陶器の盤である。鉄絵はみられない。体部内面と、口縁の外面に施釉する。173～178は、



Ph.55 1827号遺構出土遺物9(縮尺不同)

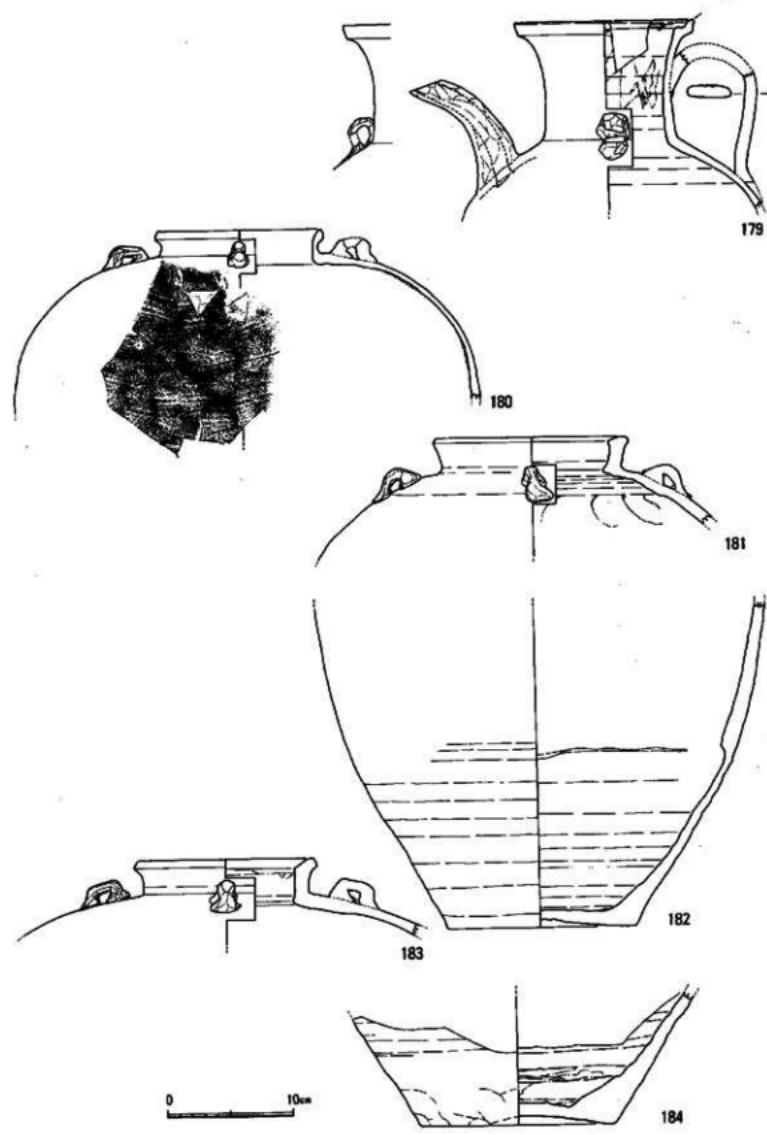


Fig.36 1827号遺構出土遺物実測図13 (1/4)

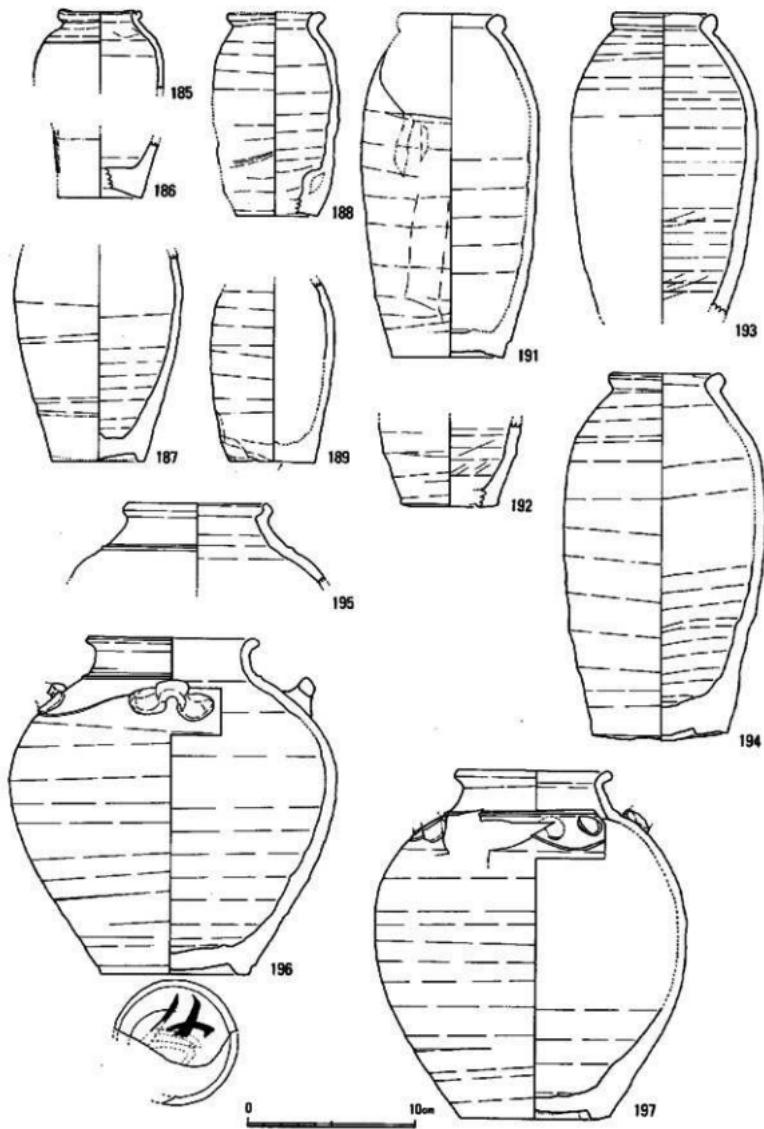
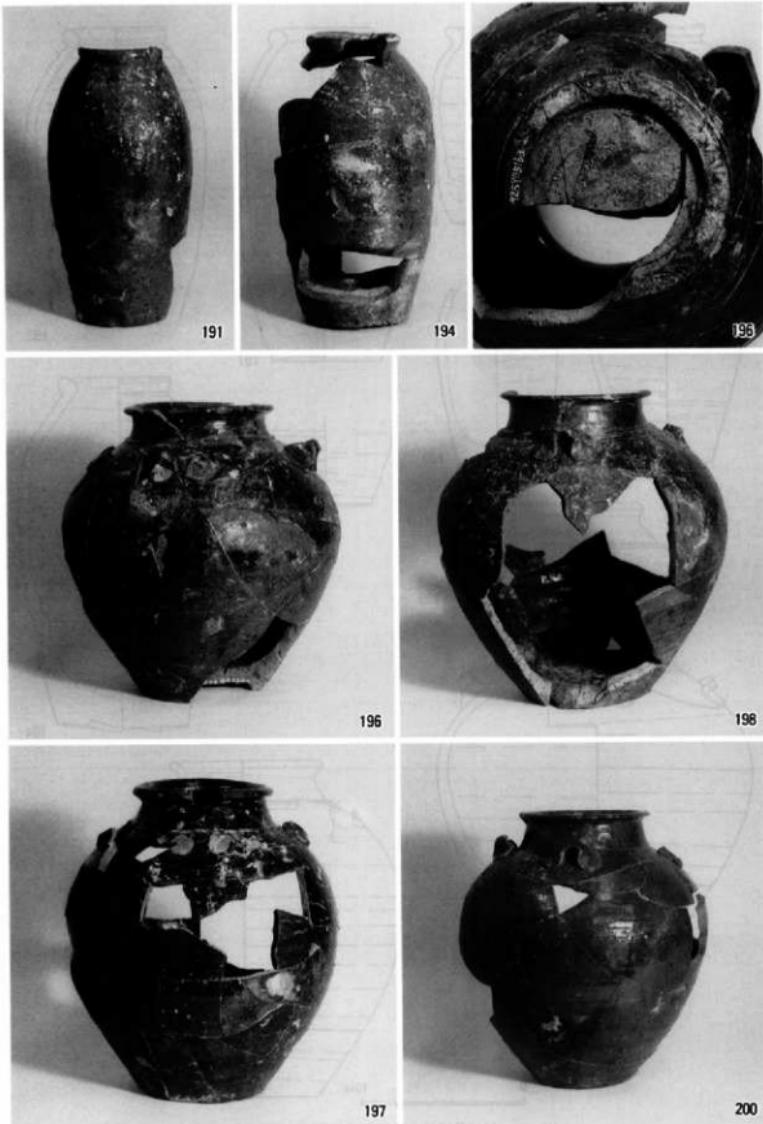


Fig.37 1827号遺構出土物実測図14 (1/3)



Ph.56 1827号遺構出土遺物10（縮尺不同）

黄釉陶器の鉢である。口縁部内縁から内面に、施釉する。また、釉下には化粧がなされるが、これは体部上位付近から見られる。口縁部上面には日痕が並ぶ。179は、黄釉陶器の水注である。

180～182は、無釉陶器の長胴四耳壺である。181と182は、同一個体と思われる。183と184は、褐釉陶器の長胴四耳壺である。183は、181の口縁と形態的によく似る。薄く施釉されている。

Fig.37～39は、博多分類の陶器B群である。185～187は、越州窯系の瓶である。灰オリーブ色の釉がかかる。185の口縁は、二重口縁となる。186は平底（上げ底）、187の底部は高台を削り出す。188・189は、褐釉の小瓶である。底部は、半底に作る。191～194は、瓶である。灰褐色～灰オリーブ色の透明釉を施す。191・194は、幅の広い高台を削り出す。193は、平底である。

195～205は、褐釉四耳壺である。196～201は、肩部の丸みが強く、小振りなタイプである。これに対し、202～203は、肩部の下半分が長く伸びてラッキヨウ形を呈しており、大振りな壺となっている。196の底部には、墨書が残る。花押を描いたもので、白磁碗Fig.30～102・104の墨書と同じ花押であろう。これらの四耳壺の肩部には、一条の波状沈線がめぐる。

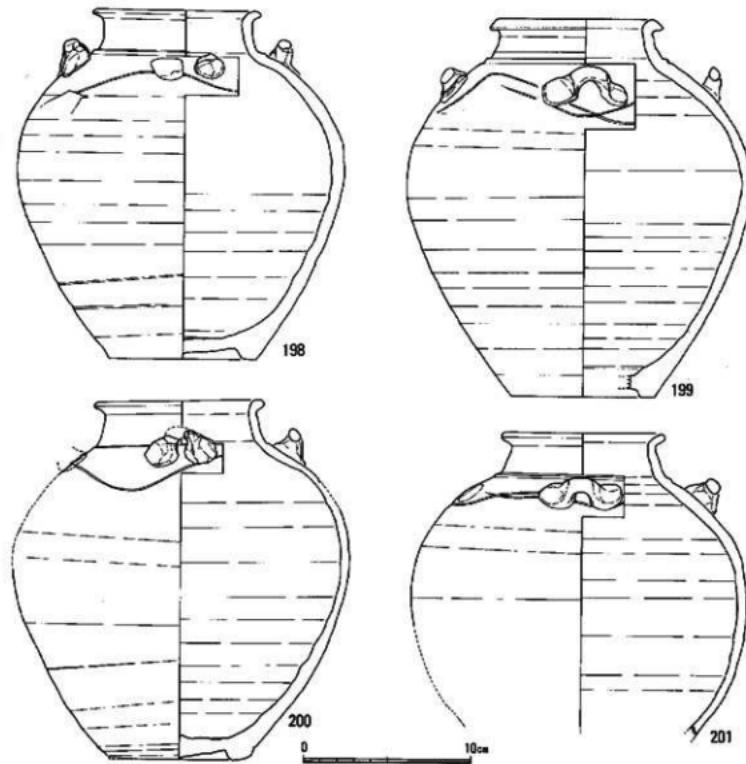


Fig.38 1827号遺構出土遺物実測図15 (1/3)

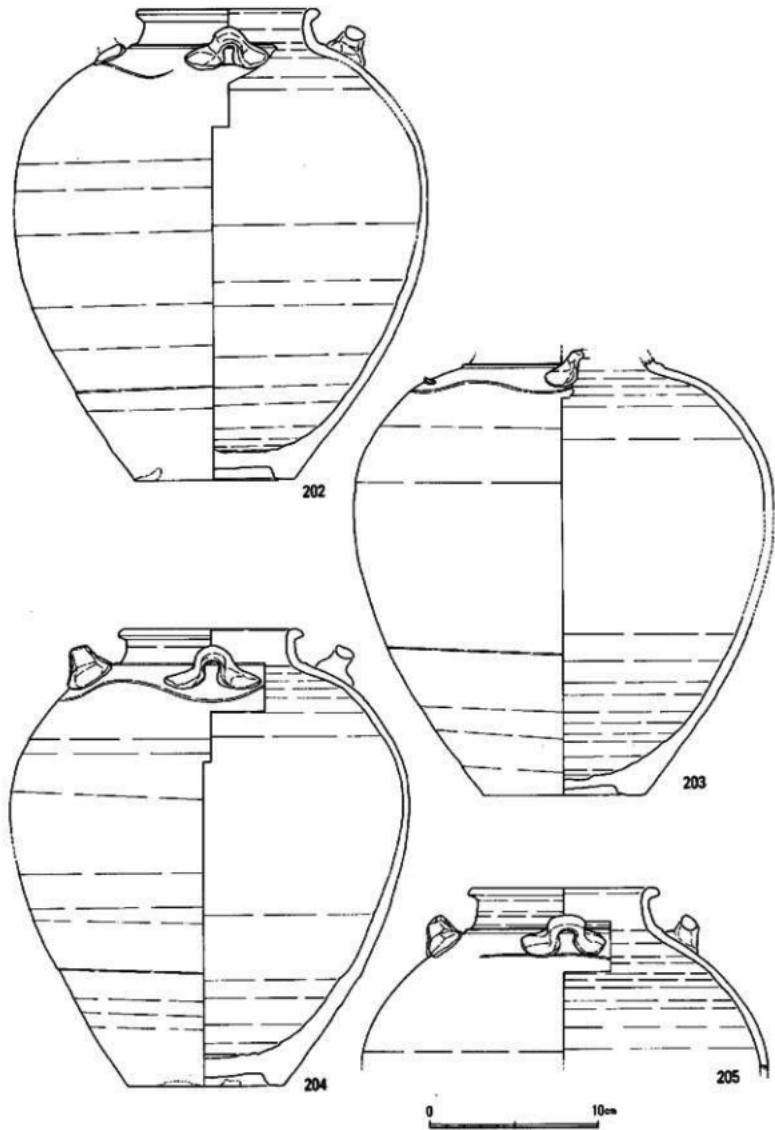


Fig.39 1827号遺構出土遺物実測図16 (1/3)

206～211・213は、無釉陶器のこね鉢である。内面は、使用のため平滑に擦れている。206・213には、内面に叩きのあて具痕跡がみられる。外面は、目の細かい平行叩きである。213の外面中程と底部や上および外底部には、目土が付着し、体部中程では浅いへこみを伴っている。口縁の形態では、内面の二重の張り出しが明瞭なもの（206～209）と、特に上の段が不明瞭なもの（210・213）とがある。底部は平底であるが、213では、若干張り出して上げ底気味になっている。

212は、黒褐釉の行平の底部である。内面に、釉がかかる。214は、褐釉の壺である。釉は、横方向に刷毛塗りするが、その上に縱に流れている。内面には、青海波の叩き痕が残る。

215・216は、博多分類で、「その他群を構成するに至らない大形容器」とされた陶器の四耳壺である。褐色を帯びたオリーブ色の釉を、215では口縁の接合部から下に、216では縦耳の付け根から下に施釉する。体部内面には、丸い叩き痕が、外面には平行叩き痕が認められる。口縁部の内面は、回転ナデ調整する。216の口縁には、一本の沈線が引かれている。窯印であろう。

217・218は、これまで分類されていないタイプの褐釉陶器四耳壺である。直接接合できる部分はないが、同一個体と見られる。口縁端部の内面から外面に施釉し、頸部内面は釉を削り取る。内面の調痕を上からみると、胴部上半は叩きの円形あて具痕、中位では円形あて具痕をろくろナデでナデ消

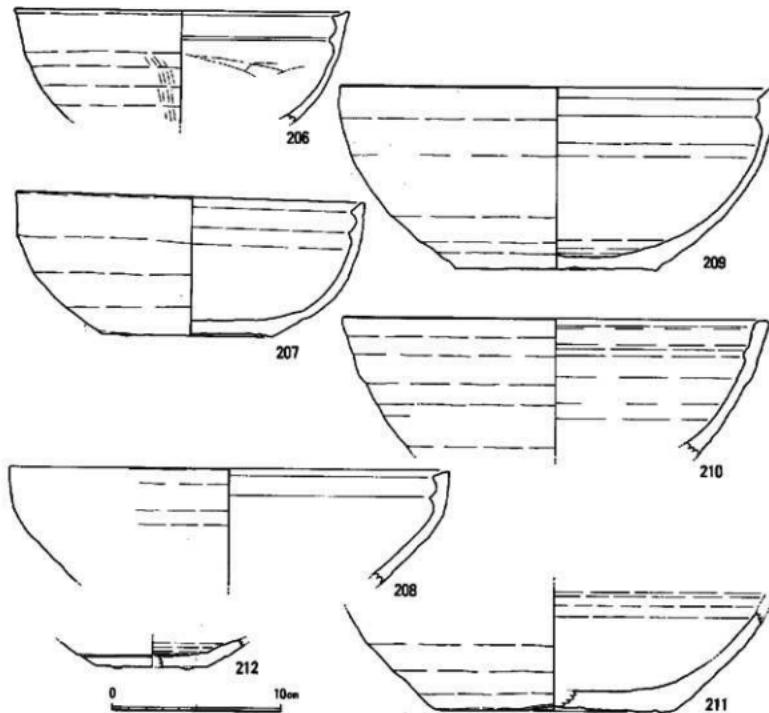
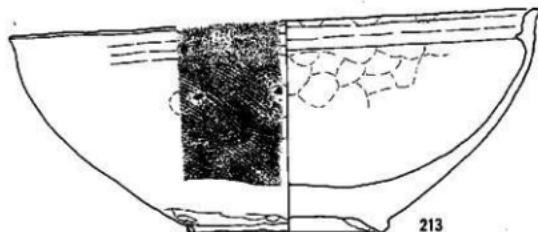


Fig.40 1827号遺構出土遺物実測図17 (1/3)

し、下半部はろくろナデを行う。

219～223は、石製品である。219は、砂岩製の、丸い体部片で、径はやや不確実である。器形を知りえないが、鉢形の搾臼であろうか。外面に縦方向のノミ痕跡が認められる。220・221は、滑石製の石鍋である。220は、全形を知り得る資料で、全面に、明瞭に削り痕跡が残っている。鋤部分の下面以下には、煤がこびり着いている。221は、大型の石鍋の底部である。外面には、煤がこびり付く。破面の数カ所に、削りをいたれた痕跡が残っており、破損した石鍋を何かに転用しかけたものと見られる。222は、滑石製の樅である。削りで全面を整えるが、手擦れしているのか、全面に角がとれて丸



213

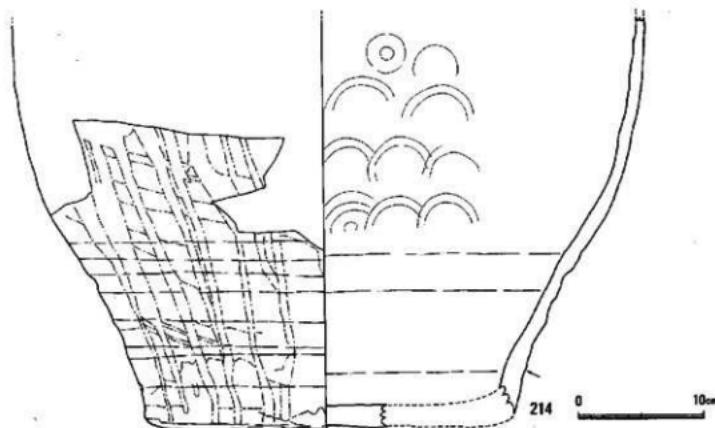


Fig.41 1827号遺構出土遺物実測図18 (1/4)

みがある。つまみ部分には、横方向に穿孔がなされる。ほぼ全面に煤が付着しているが、火災にあつたためであろう。223は、砾石である。上下を欠く。赤茶色の砂岩製であるが、二側面は焼けて、赤変している。四面とも、砾石として使用した痕跡がある。

以上に図示した以外にも、大量の陶磁器が出土しており、その内訳については第三章で述べる。

これらの出土遺物から、1827号遺構は、12世紀前半の被災遺物廃棄土坑と考えられる。



Ph.57 1827号遺構出土遺物11（縮尺不同）

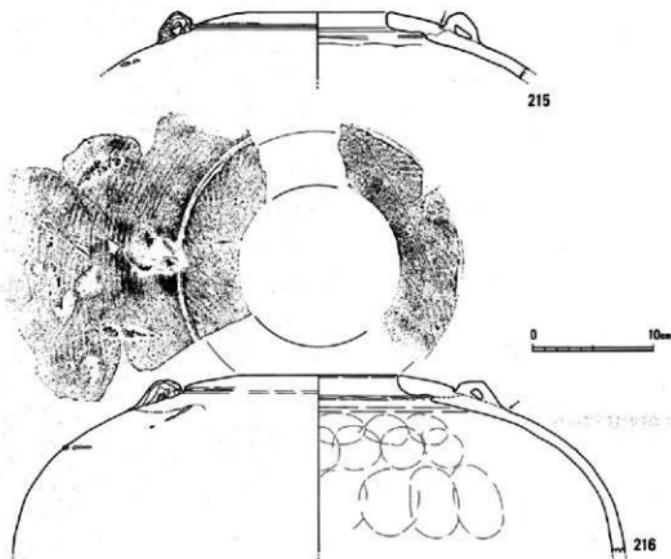


Fig.42 1827号遺構出土遺物実測図19 (1/4)

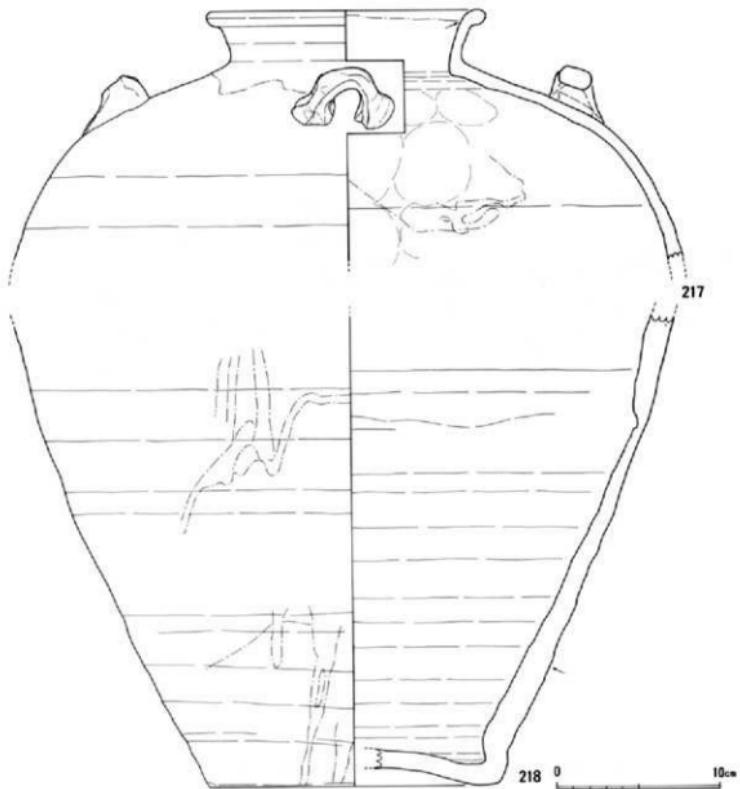


Fig.43 1827号遺構出土遺物実測図20 (1/3)



Ph.58 1827号遺構出土遺物12 (縮尺不同)

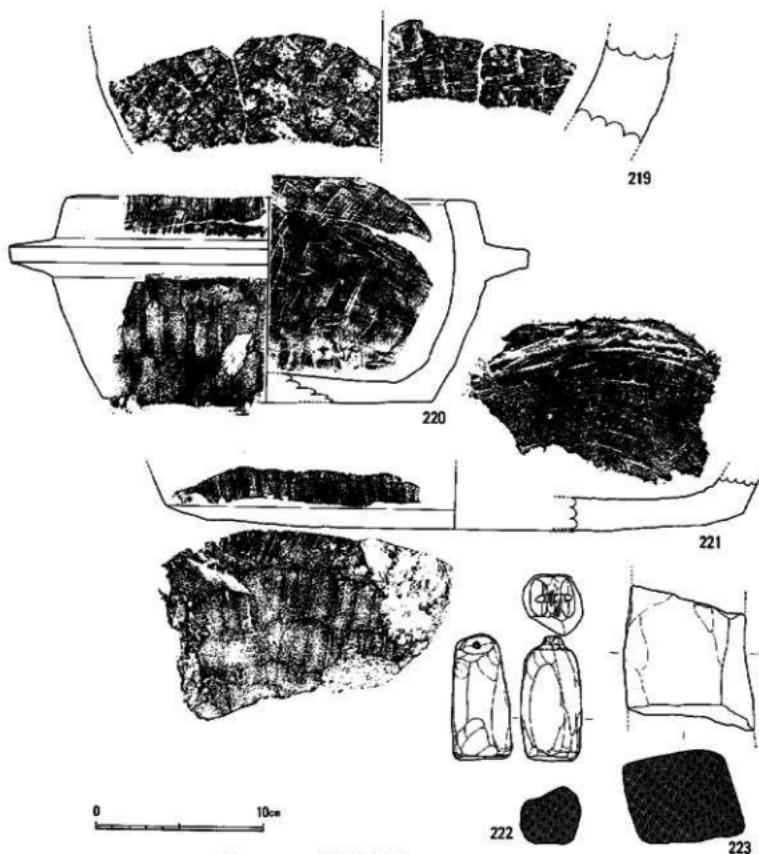


Fig.44 1827号遺構出土遺物実測図21 (1/3)

#### 1874号遺構 (Fig.45, Ph.59)

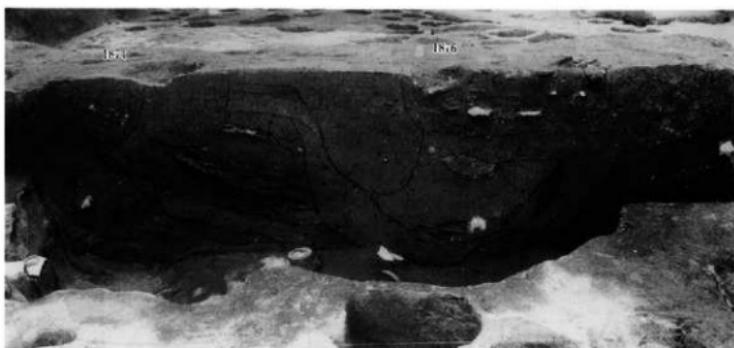
C-1区5面で検出した土坑である。次に述べる1876号遺構と切り合い関係にあり、1874号遺構の方が、先行する。一辺1.3メートルの方形堅穴状土坑のような形状を示すが、1876号遺構に切られ、また、一端がC区とD区との間のベルトにはいるため、断言はできない。

出土遺物の一部を、Fig.45に示す。1は、土器の壊である。底部は、回転糸切りである。切り放し後、内側から押し出して丸底とする。内面は、押し出し後にコテを当てて、平滑に整える。底部ヘラ切りの丸底壊の成形技法に、切り放し方法にだけ回転糸切りを取り入れたものといえる。2~4は、白磁である。2は、平底の皿で体部下位は露胎となる。3・4は、碗である。5は、陶器の壺である。灰オリーブ色の釉をかける。頸部の下半は、露胎である。口縁部の上面に、砂目が残る。

12世紀前半の土坑である。

1876号遺構 (Fig.46, Ph.59~61)

C-1区5面で検出した土坑である。前述した1874号遺構を切る。一辺1.5~1.8メートルほどの大型の土坑と考えるが、半分弱がC区とD区の間のベルトにはいり、確認していない。なお、このベルト



Ph.59 1874号・1876号遺構土層断面（南西より）



Ph.60 1876号遺構中央部土層断面（西より）

に現れた土層断面を見る  
と、1876号遺構の真ん中  
にさらに土坑が切り込ん  
でいる。すべて掘り下げ  
たところ、この土坑は円  
形竪穴状土坑になったが  
(Ph.60)、当初の掘り下  
げ時には、両者を区別す  
ることはできなかった。

Fig.46に、出土遺物の  
一部を示す。1・2は、土

師器である。底部は回転糸切りで、内底部にナデ調整を加える。3は、越州窯系青磁碗である。口縁は、折り返して小さく丸く收める。内面には、片切り彫りと櫛描文で花文を描く。4~6は、白磁である。  
7~9は、陶器である。7は、綠釉陶器の香炉である。五本の獣脚を貼り付ける。釉は、口縁から  
体部・脚部の表面に施され、内面と外底面および脚の裏面は露胎である。胎土は薄茶色で、きめが細  
かく、良質である。外底部にスタンプで押した  
ような墨痕があるが、判読できない。8は、蓋  
である。天井部に、暗黄色釉をかける。9は、  
壺である。口縁部の内面から体部外面に、薄い  
モスグリーン色の釉をかける。横耳の一部が残っ  
ている。

このほか、瓦器・青白磁などが出土した。  
12世紀前半から中頃の遺構である。

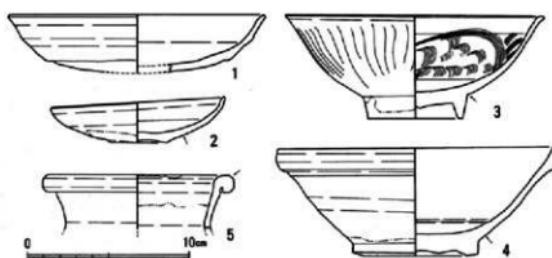
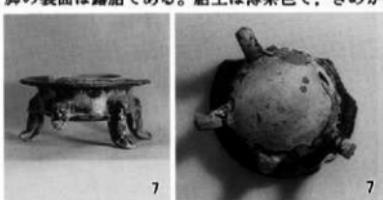


Fig.45 1874号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph.61 1876号遺構出土遺物 (縮尺不同)

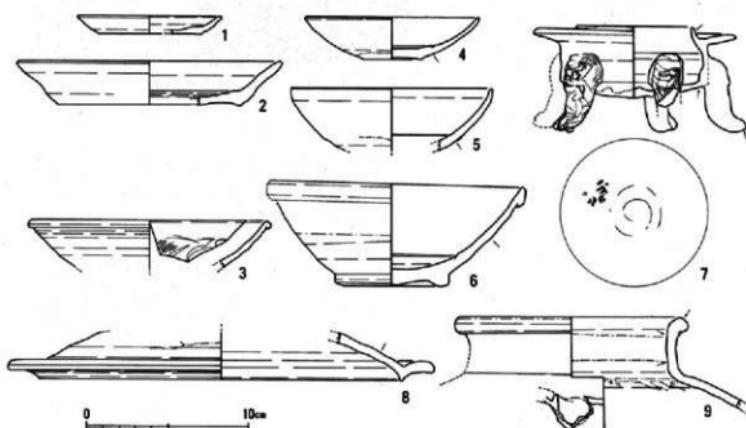


Fig.46 1876号遺構出土遺物実測図 (1/3)

### 2007号遺構 (Fig.47, Ph.62)

E-1区5面より検出した小土坑である。長径40センチ、短径35センチほどの梢円形の土坑で、その南よりから陶器の壺が出土した。壺は、破損部分を上に向けて、横向きで埋土中程におかれていた。壺の北側が大きくあいている様子からみて、ここに柱を立てたものとすれば、2007号遺構を柱穴と見ることもできよう。

Fig.47は、出土した灰縁釉陶器の小口瓶である。頸部の内面から、体部外面の上半部にかけて薄く施釉する。胎土は、灰褐色で微砂混じりだが、全体的には細かい。肩部には、目土が付着している。

他に出土遺物がなく、時代を決めがたいが、12世紀頃であろう。



Fig.47 2007号遺構出土遺物 (1/3)



Ph.62 2007号遺構 (北東より)

### 2017号遺構 (Fig.48, Ph.63・64)

B-1区5面より検出した土坑である。2015号遺構（井戸）に切られるため、全形を知りえないが、円形もしくは方形の堅穴状土坑である。かなり深い遺構だが、床面の高さが、井戸遺構のように湧水レベル以下まで下がっておらず、床面も平坦であるため、土坑と判断した。

出土遺物の一部をFig.48に図示する。1～6は、土師器である。底部はすべて回転糸切りで、内底部にはナデ調整、外底部に板目圧痕が残る。1～5は皿で、口径8.8～9.8センチ、器高1.1～1.3センチをはかる。6は、壺である。若干歪みがあり、口径14.9～15.2センチ、器高2.6センチである。7～9は、白磁の碗である。7は、高台が高く直立するもので、見込みの釉を輪状に掻き取っている。体部下位から外底部は、露胎となる。8は、内面に櫛描文をあしらう。口縁には刻みをいれて、輪花にする。高台際から外底部まで、露胎とする。9は、口縁を幅広く肥厚させる、いわゆる玉縁碗である。見込みには、圈線がめぐる。内面および玉縁のやや下まで施釉し、体部の中位以下は、露胎となる。この他、底部をヘラ切りする土師器の皿・壺、瓦器、陶器、須恵器、焼き塩壺などの破片が出土した。

これらの遺物からみて、2017号遺構の年代は、12世紀前半に属すると考えられる。



Ph.63 2017号遺構（西より）

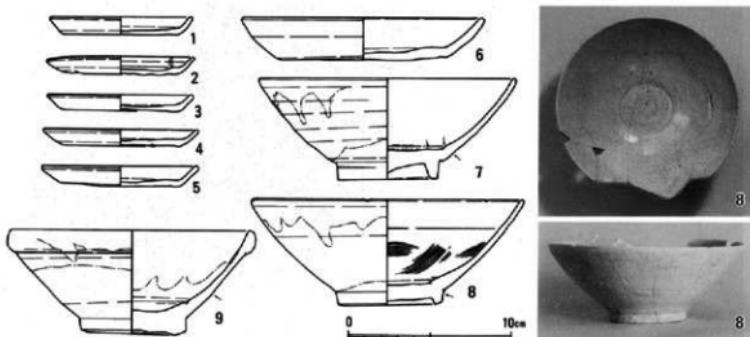


Fig.48 2017号遺構出土遺物実測図 (1/3)

Ph.64 2017号遺構出土遺物

2203号遺構 (Fig.49, Ph.65~67)

D-1区6面で検出した、方形堅穴状土坑である。北西の端が、調査区外にでるが、一辺1.7メートル前後の隅丸方形を呈するともみられる。検出面からの深さは、53センチで、床面は平坦である。柱穴は、伴っていない。埋土の中程から、掘り下げ中にガラス小壺と蓋が出土した。ともに、本来は完形で埋まっていたと見られる。なお、小壺は、口を下に向か倒立した形で西壁近くから、蓋は、つまみを上に向か正立して、同レベルのやや中央よりから出土した。

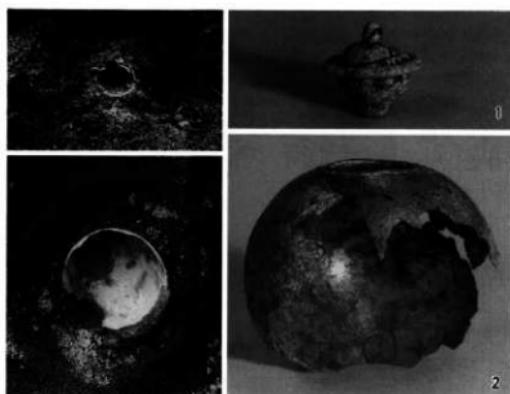
Fig.49にガラス製品の実測図を示す。1は、蓋である。青緑色で透明である。丸く立ち上ったつまみと、鉢巻き状の鋸部を持つ。2は、小壺である。緑色を呈し、透明である。口縁部で若干厚さにむ



Ph.65 2203号遺構（北より）



Ph.66 2203号遺構ガラス製品出土状況（東より）



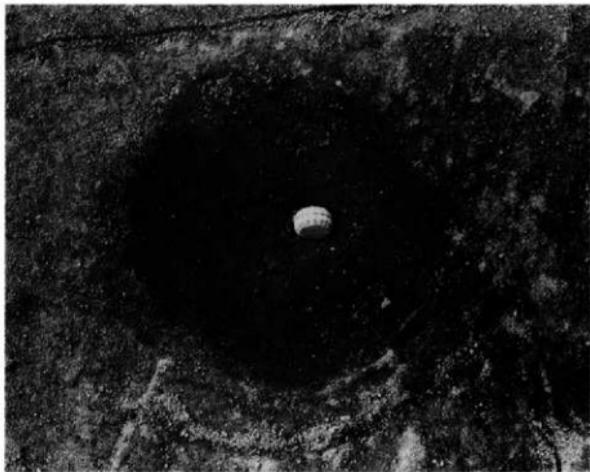
Ph.67 2203号遺構出土ガラス製品・出土状況

らがある。球形で、口縁部は肥厚する。1・2ともに、表面は風化している。この二点は、山崎一雄氏らによって化学分析が行われており、本書の巻末にその成果を御報告いただいている。参照されたい。このほか、土師器（ヘラ切り、糸切り）、白磁、陶器片などが出土した。

おおむね、12世紀前半代の土坑と考えられよう。

#### 2568号遺構 (Ph.68)

B-3区1面から検出した小土坑である。床面より、青白磁の合子が出土した。蓋と身とが軸着しているもので、あけられた形跡はない。中國で窯出しされた形のまま、輸入されたものと見られる。この他にも、A-1区5面の2053号遺構から、同様な青白磁合子が出土している。このふたつの青白磁については、118ページ Fig.62に図示している。



Ph.68 2568号遺構 (東より)

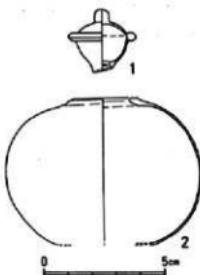
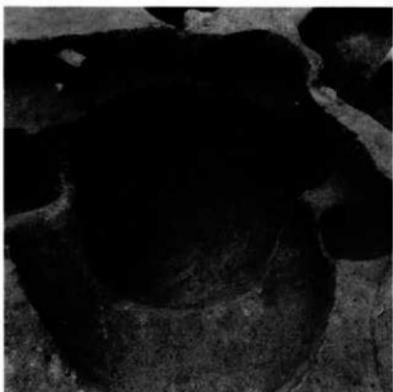


Fig.49 2203号遺構  
出土遺物実測図 (1/2)

2714号遺構 (Fig.50~56, Ph.69~71)

B・C-3区1面で調査した土坑である。本来は、1面にともなう遺構ではなく、第2面あたりで検出すべきものである。すなわち、第1面検出の柱穴などを調査した段階で、その下部に大量の陶磁器が埋まっているのを確認した。ところが、2区では、1区2面に相当する遺構検出面を設定しない予定であったので、1面からの掘り下げ時に遺構を破壊するのを防ぐため、1面での遺構調査を行った。まず、該当する付近を2メートル四方で、20センチ前後一律に掘り下げた。この深さは、1面上で調査した柱穴の壁面の観察から決定した。そして、この一段下がったレベルで遺構検出を実施、土坑を確認した。



Ph.69 2714号遺構 (南東より)

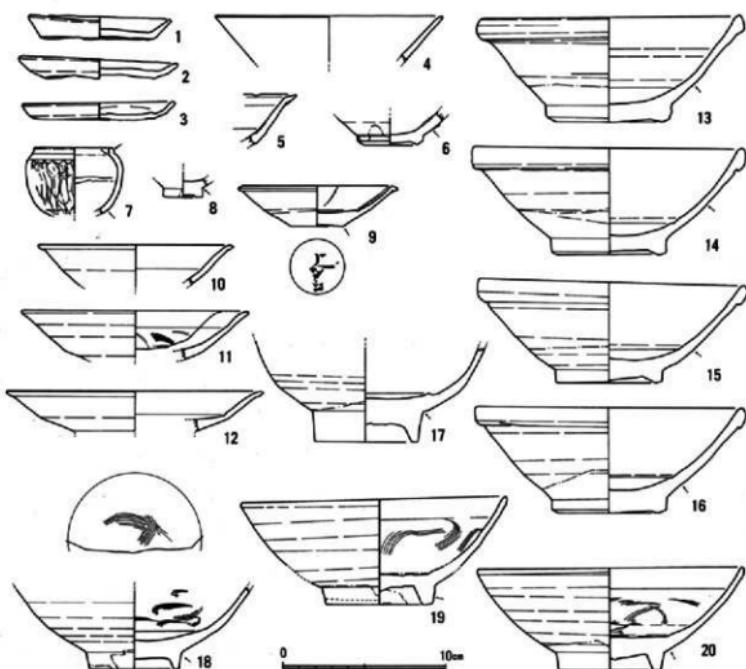


Fig.50 2714号遺構出土遺物実測図1 (1/3)

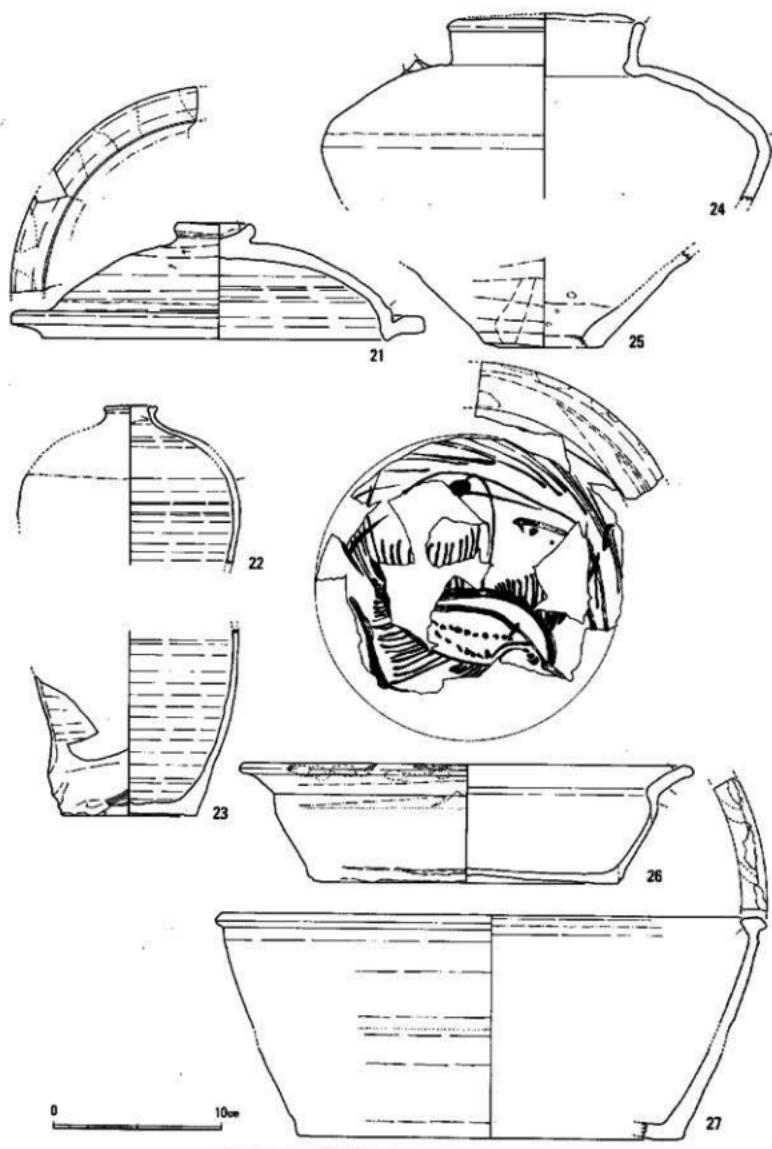


Fig.51 2714号遺構出土遺物実測図2 (1/3)

2714号遺構は、おおむね直径1.1メートルほどの円形の土坑である。この中に、大量の遺物が詰まっていた。出土遺物の大半は、中国製の陶器で、若干の青磁、白磁と小量の土師器が混じっていた。

Fig.50~56に出土遺物の一部を示す。1~3は、土師器の皿である。底部はすべて回転糸切りで、内底にはナデ調整が、外底には板目圧痕が残る。1は、比較的器高が高く、2・3は浅く偏平である。1は

口径8.9センチ、器高1.4センチ、2・3は口径9.8・10.4センチ、器高1.2・1.05センチをはかる。4・5は、高麗青磁の碗である。5は、口縁端部に刻みを入れ、輪花状につくる。6は、天目茶碗である。黒褐色の釉を施す。7は、青白磁の小壺である。体部下位を除いて全面に施釉した後、口縁部の釉を削り取って、露胎とする。

8~20は、白磁である。8は、盃である。高台から外底部は、露胎となる。9は、平底皿である。内面には、白堆線が垂下している。全面に施釉した後、底部の釉を削り取って、露胎にする。外底部には、墨書がみられる。「上□」と読める。10~12は、高台付きの皿である。11の内面には、模描文があしらわれる。13~20は、碗である。13~16は、口縁を玉縁につくる。19の見込みは、輪状に釉を描き取って露胎となり、目土が付着している。

21~29は、博多方分類による陶器A群である。21は蓋で、上面に灰綠釉を施す。鉢部の上面には、細かい間隔で目痕がなら

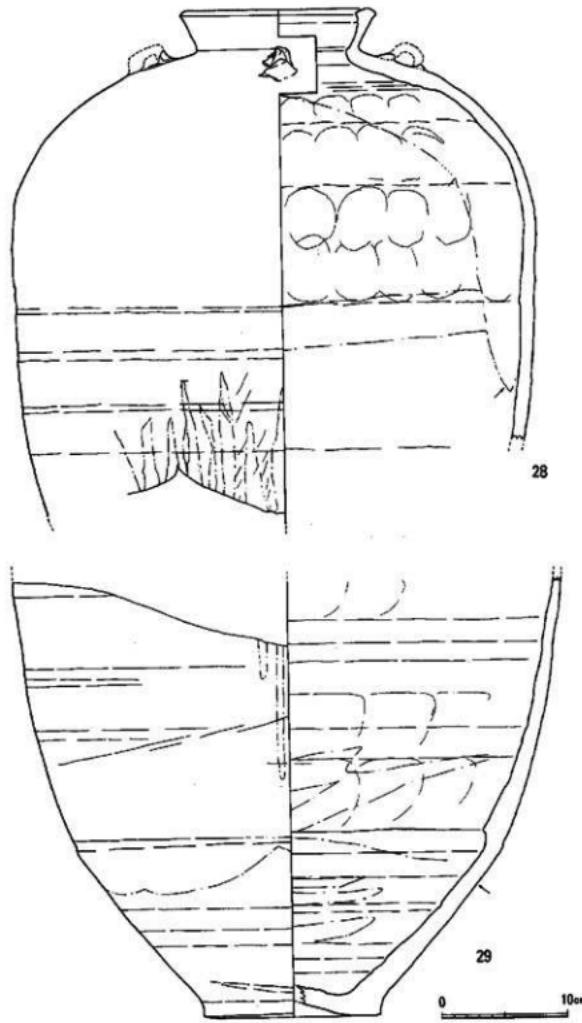


Fig.52 2714号遺構出土遺物実測図3 (1/4)

んでいる。22・23は、褐釉の小口瓶である。同一個体であろう。頸部の内面から方部外面にかけて、施釉する。下半分は、かなり歪んでいる。24・25は、黒褐釉の壺である。同一個体の可能性が、考えられる。横耳の痕跡がみられる。また、被熱のため器表はかなり剥離している。26は、黄釉鉄絵の盤である。長く伸びた口縁の上面から見込み、くびれた頸部の外面に釉がかかる。口縁端部には、白い砂目がつく。27は、黄釉の鉢である。口縁部内面から見込みにかけて、釉をかける。口縁部の上面には、灰褐色の目痕が付く。28・29は、褐釉の長胴四耳壺である。肩部内面付近から、外面の胴部下位まで施釉する。

30~38は、博多分類の陶器B群である。30~32は、越州窯系である。30は、長頸壺である。頸部の内面から、外面の全面に、くすんだ緑色の釉を薄くかける。断面が丸い幅広の凹線で花弁を彫り、胴部の花弁の中をそれぞれ縦に二列、削りをいれて面取りする。31・32は、水注である。31には、把手と注口の一部が残る。33・34は、瓶である。33は灰綠釉を、34は褐釉を施釉する。33の口縁部上面

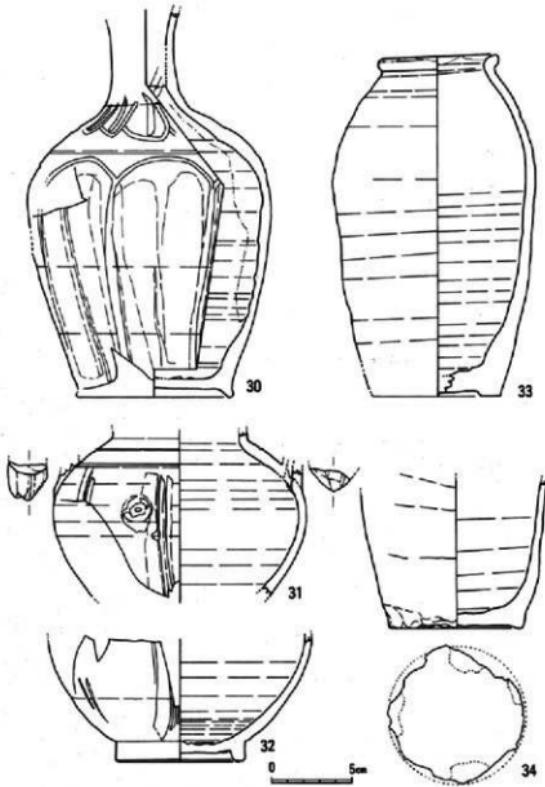
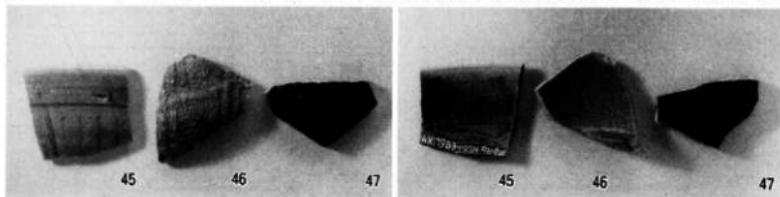


Fig.53 2714号遺構出土遺物実測図4 (1/3)

の内面から、外面の全面に、くすんだ緑色の釉を薄くかける。断面が丸い幅広の凹線で花弁を彫り、胴部の花弁の中をそれぞれ縦に二列、削りをいれて面取りする。31・32は、水注である。31には、把手と注口の一部が残る。33・34は、瓶である。33は灰綠釉を、34は褐釉を施釉する。33の口縁部上面



Ph.70 2714号遺構出土遺物1 (縮尺不同)

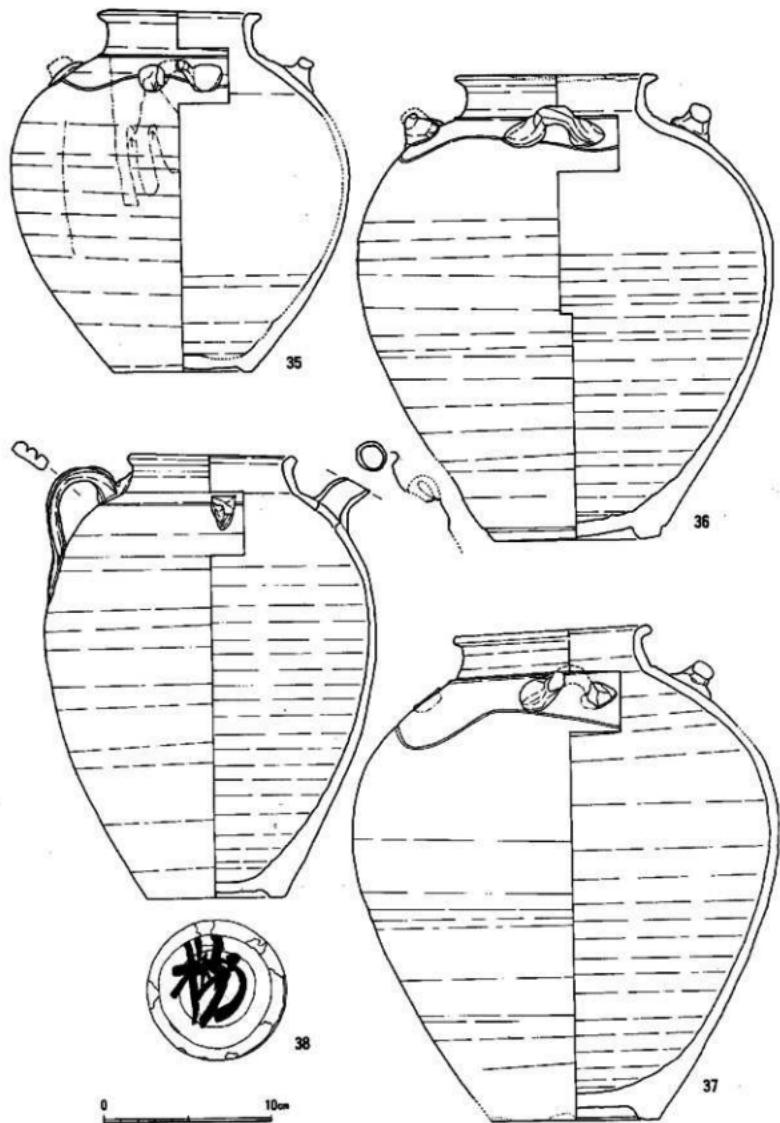


Fig.54 2714号遺構出土遺物実測図5 (1/3)

と、34の外底部には、目痕が見られる。35～37は、褐釉四耳壺である。38は、褐釉の水注である。短い注口と、小さい把手が付く。把手の上面には、二条の沈線が入る。外底部には墨書がある。花押であろう。

39～42は、陶器C群である。39は、褐釉の壺である。頸部内面から体部外面の下位まで、施釉する。肩部には、五カ所ほど指で押したくぼみがみられる。40は、褐釉の鉢である。口縁部片と、体部下位片とに分かれ、接合できない。41・42は、褐釉の壺である。42の内面には、叩きのあと具痕がならぶ。

43・44は、博多分類で「その他群を構成するに至らない大形容器」とされた陶器である。ラッキヨウ形の体部を持つ大型の壺で、胴部外面には、薄く褐釉をかける。体部外面は横方向の平行叩き痕、内面には丸いあと具痕が残る。肩部の外面には、点々とくぼみが並んでいる。目痕であろう。

このほか、Ph.70に青磁破片を示す。青磁は、この3片が出土したのみで図示に耐えなかった。45は口縁部、46・47は体部である。同安窯系青磁に属する。ただし、45の深緑色をした釉調や内面の施文は、初期の特徴を示すもので、あるいは初期龍泉窯系青磁と見ても良いかもしれない。

以上の遺物には、火熱を受けたものが多く、火災にあったものと推測される。おそらく、火災で破損した陶器を廃棄したものであろう。

出土遺物からみて、12世紀後半の早い時期に位置づけられよう。

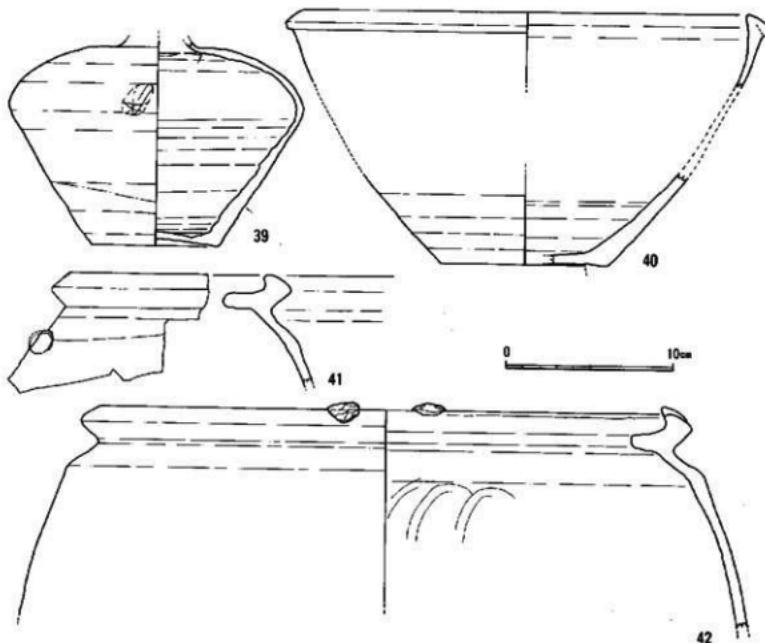


Fig.55 2714号遺構出土遺物実測図6 (1/3)

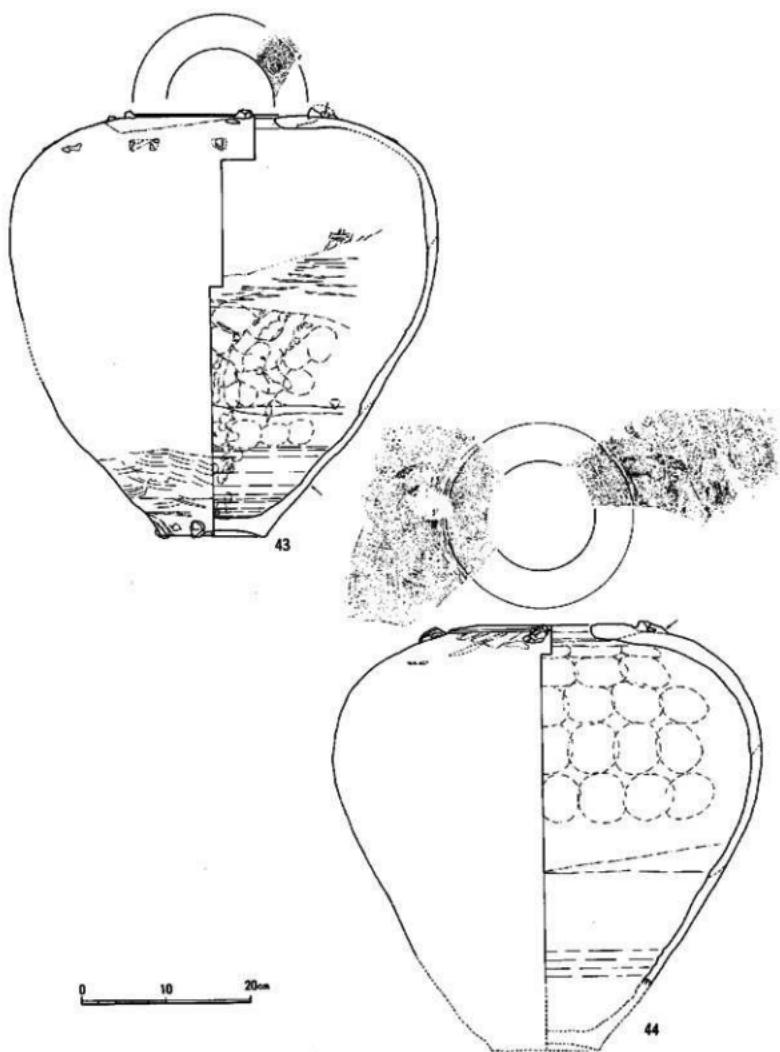


Fig.56 2714号遺構出土遺物実測図7 (1/6)



30



39



32



31

Ph.71 2714号遺構出土遺物2（縮尺不同）

3162号遺構 (Fig.57, Ph.72・73)

D-3区5面から検出した、大型の土坑である。直径2.45メートルの略円形を呈し、深さは1.15メートルをはかる。一見して、井戸の掘り方のようだが、井戸側などを持たず、また底面の標高は最も深いところでも2.3メートルと、湧水レベルには、はるかに達していない。したがって、円形堅穴状土坑と考えられる

土師器（ヘラ切り、糸切り）、白磁、青磁、陶器、石鍋片、鉄釘、鉄滓、埴土ブロックなどが出土した。その内、土坑壁に張り付くように出土した鏡1面と、石斧片を図示した。

Fig.57の1は、和鏡である。面径9.4センチをはかる。紐の回りに同心円状に内向した松を配し、左右には、向かい合つた一对の雀が舞う。遺存状態は、比較的良好である。2は、石斧の刃部付近の破片である。玄武岩製だが、表面は風化して、白灰色を呈する。おそらく、太形蛤刃石斧であろう。弥生時代の遺物である。



Ph.72 3162号遺構出土鏡

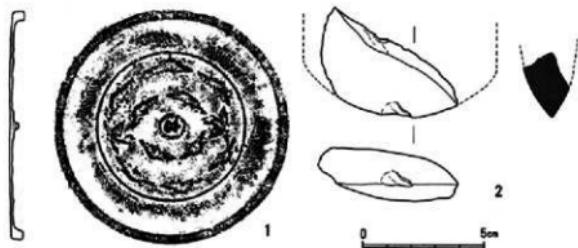


Fig.57 3162号遺構出土遺物実測図 (1/2)



Ph.73 3162号遺構和鏡出土状況 (西より)

その他の出土遺物からみて、12世紀後半の遺構と考えられる。

### (3) 炉遺構

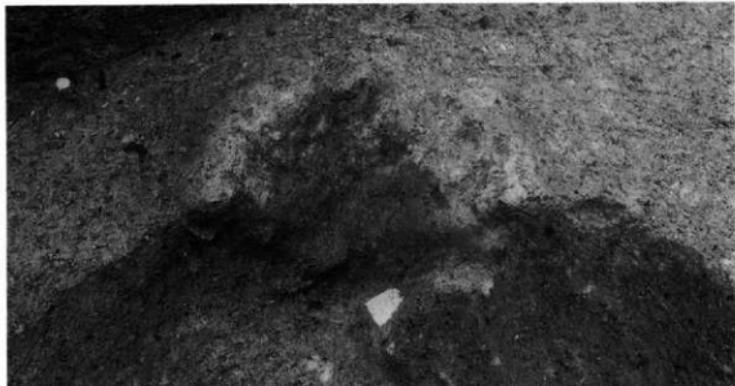
本調査では、生活の火廻に関わるとみられる遺構が、数基検出された。しかし、上部構造が残っているわけではないので、本来の使用形態は不明である。なお、ここで炉遺構としたのは、基本的にはその遺構内で火を焚いた痕跡が明瞭なものを指す。

784号遺構 (Fig.74・75)

C-1区2面より検出した遺構である。北側の3分の1強を柱穴2基に切られる。遺存した部分から推定して、直径27センチ前後、深さ12センチの円形の掘り込みの内側に、淡黄色粘土を貼っている。粘土の中央は、直径22センチ、深さ9センチほどの摺鉢状にくぼむ。粘土の表面は、被熱して赤茶～



Ph.74 784号遺構断面（西より）



Ph.75 784号遺構（北より）

暗褐色に変色している。また、埋り込み全体の周囲の土も、幅2センチ程度で被熱、暗茶褐色に変色する。

出土遺物はないが、周囲の遺構からみて、13世紀後半頃には収まるだろう。

#### 813号遺構 (Fig.58, Ph.76・77)

E-1区2面より検出した、石囲い炉である。長軸53センチ、短軸41センチの偏桃形の土坑で、検出面からの深さは、9センチをはかる。土坑の長軸は、ほぼ東西を指す。周囲の壁には、礫を並べて囲む。特に、西の小口の礫は、二段に重ねている。これらの礫の表面は、焼けて黒ずむ。検出した段階では、内側にさらに3個の偏平な礫を置き、隙間に小石を詰めていた。炉の規模を縮小したものであろうか。

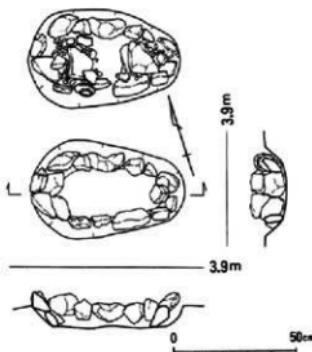


Fig.58 813号遺構実測図 (1/20)



Ph.76 813号遺構検出状況 (北東より)



Ph.77 813号遺構完掘状況 (北東より)

土師器（底部糸切り）、青磁、白磁、陶器片が出土した。13世紀後半の遺構であろう。

2168号遺構（Ph.78）

C-1区6面から検出した。近世以後の井戸である187号遺構に切られる。遺存した部分で、直径約54センチ、深さ12センチ程の浅い掘り込みに、砂混じりの黄色粘土を貼ったもので、中央は直径28センチ、深さ7センチにくぼむ。火熱を受け、薄く赤変している。

須恵器の坏蓋、ヘラ切り土師器の坏が出土しており、9世紀頃に属するものであろう。

2824号遺構（Ph.79）

D-3区3面より検出した。土壁塊を弧状に並べたものである。一応、炉と見たが、確証はない。



Ph.78 2168号遺構（北西より）



Ph.79 2824号遺構（北西より）

#### (4) 道路状遺構

D-1区4面および5面から、道路（路地？）と思われる遺構を検出した。

4面の道路状遺構は、硬化した整地面の高まりである。灰色の砂質土層の表面が、薄くしかも層状に硬化していた。幅は、高まりの裾で、84センチ、高さは4~6センチである。ほぼ南北方向に延びるが、南側は、掘り飛ばしたためか確認できなかった。また、隣接するE-1区でも検出していない。

5面の道路状遺構は、硬化面と、それが落ち込んだ浅い溝状部分として、検出した。溝の深さは、北側で10センチほど、南になるにしたがって底が上がっており、やがて消滅する。E-1区側のベルト断面にも現れており、さらに北に続いていたものと考えられる。



Ph.80 4面道路状遺構（南より）



Ph.81 5面道路状遺構（南より）

### (5) 埋葬遺構

今回の調査で、確実に埋葬遺構と確認できたのは、木棺墓である2164号遺構のみである。このほかに可能性のあるものとして、3212号遺構があげられる。

#### 2164号遺構 (Fig.59, Ph.82・83)

C-1区6面より検出した木棺墓である。長辺1.45メートル、短辺0.5~0.6メートルの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さ35センチをはかる。長軸を、南北とする。

埋土中より鉄釘が出土、特に南の小口(足位)では、原位置を押さえることができた。それによると、小口の幅は、27センチに復元される。また、釘Aは、付着した木質の木目から、長側板を床板に釘留めしたもの、釘B・Cは、それぞれ左右の長側板から、小口板を釘留めしたものと見られる。したがって、床板と小口板を長側板ではさんで釘留めた構造と知れる。なお、釘の位置からは、蓋板までの高さを知ることはできなかった。

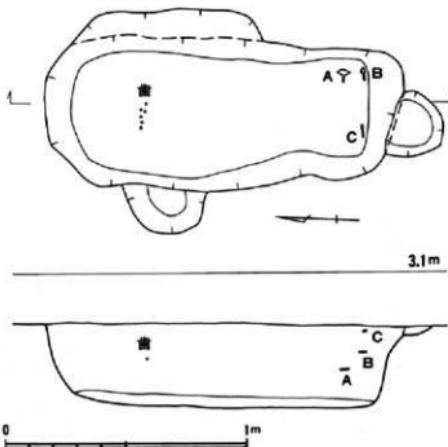
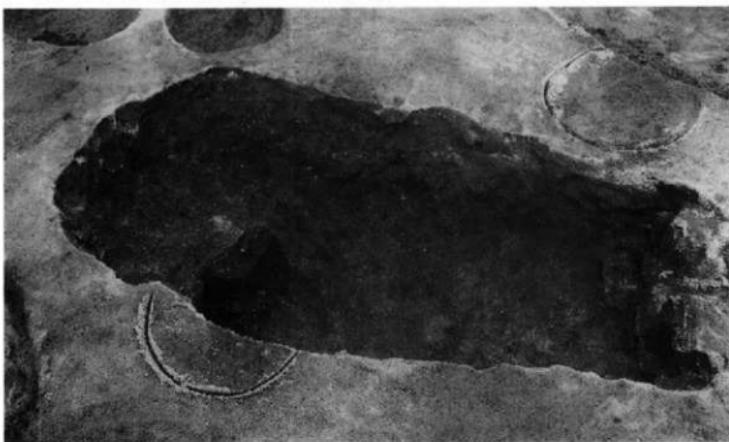


Fig.59 2164号遺跡実測図 (1/20)



Ph.82 2164号遺構 直出土状況 (南より)



Ph.83 2164号遺構 (西より)

土坑北側の中程で、歯が出土した。上下の歯が、ほぼ同じ位置で揃って出土しており、頭を立てて埋葬されていたものと思われる。この歯の位置から足側の小口までは、90センチしかなく、被葬者が成人であるとすれば、下肢を折り曲げた屈肢葬が想定される。また、頭を起こした状態で固定されていたとすれば、後頭部は、頭側の小口板に接していたと考えざるをえない。頭の奥行きを考えにいれると、木棺の長側の長さは、1.1メートル弱と復元できる。

なお、歯が出土したレベルや、釘Aのレベルを考え合わせると、木棺の床板は、土坑の底から15センチ前後浮いていたことになる。掘り方を、掘りすぎたものであろうか。

副葬遺物や供獻遺物は、出土しなかった。埋土中からは、土師器・須恵器・黒色土器B類などの破片が出土している。小口幅の狭い木棺墓の類例としては、博多遺跡群第62次調査5508号遺構（小口幅26センチ、9世紀末）があるが、古代末から中世の例では、このように小口幅の狭い例はなく、本遺構も9世紀～10世紀とするのが妥当であろう。

#### 3212号遺構 (Fig.60, Ph.84)

B-3区5面より検出した土坑である。主軸方位を南北にとり、長軸2.55メートル、短軸1.35メートルの隅丸長方形を呈する。底面は二段掘り状をなし、検出面からの深さは、南側で70センチ弱、北側で75センチ前後をはかる。土坑内の3カ所から骨が出土しているが、遺存状態が悪く、人骨かどうかの判断はできなかった。埋葬遺構と断定するだけの根拠を欠くが、土坑の北寄りで出土した偏平な骨



Ph.84 3212号遺構（北より）

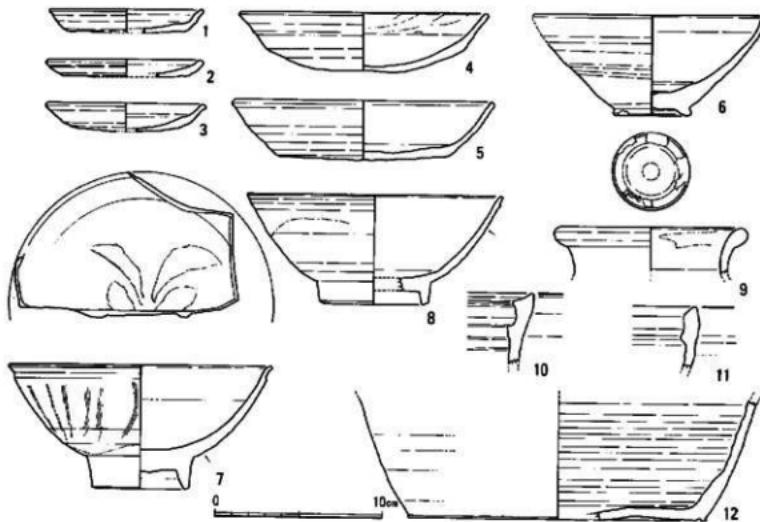


Fig.60 3212号遺構出土遺物実測図 (1/3)

を頭骨の一部、南の小口で出土した管状の骨を脛骨の一部と見て、土壙墓と考えた。

副葬遺物・供獻遺物は、確認できなかったが、埋土中から若干の遺物が出土している。

Fig.60の1~5は、土器である。1~3は皿で、底部はヘラ切り、内底には静止ナデ調整がみられる。口径9.2~9.6センチ、器高1.1~1.7センチをはかる。4は、底部をヘラ切りする、丸底壺である。内面は、横ナデ調整の後、コテをあてて平滑に整える。内底には、煤が付着している。口径14.9~15.2センチ、器高3.6センチである。5は、底部糸切りの平底壺である。内底部には静止ナデ調整が、外底部には板目圧痕がみられる。口径15.6センチ、器高3.5センチである。

6は、高麗青磁の碗である。灰色の胎土に、青緑色の釉を施す。高台の疊付には、重ね焼きの目痕が残る。7~8は、白磁の碗である。7の見込みには、線彫りで花文を描く。9は、褐釉陶器の壺である。形状からみて、四耳壺の口縁であろうか。博多分類の陶器B群に属し、茶オリーブ色の釉をかける。

10~11は、無釉陶器のこね鉢である。堅く焼き結まって、赤褐色を呈する。12は、高麗の須恵質陶器の壺である。茶色を帯びた灰色を呈し、胎土のきめは細かく精良である。内外面ともに、強いクロナデ調整が加えられる。

このほか、瓦器塊片、黒色土器片が出土している。12世紀前半の時期が与えられよう。

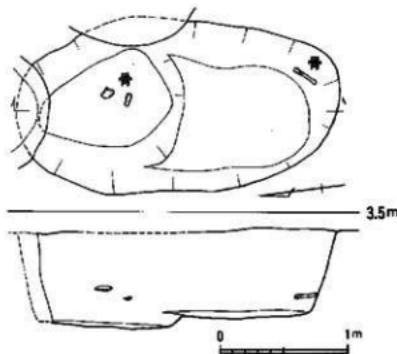


Fig.61 3212号遺構実測図 (1/40)

## 5. その他の遺構

本節では、前節で扱いきれなかった遺構について、主要なものを、その種類別に紹介する。

### (1) 井戸

#### 957号遺構 (Ph.85)

C-2区3面で検出した井戸である。切り合い関係のため、掘り方の全体は知りえないが、径2.5メートル以上にはなろう。井戸側は木桶であるが、木質が残っていたにすぎない。直径70センチ前後である。標高1.73メートルまで確認したが、それ以下は、湧水のため掘れなかった。湧水の標高は、1.6メートルである。

土師器（糸切り）、吉備系土師質土器塊（早島式土器）、瓦質土器こね鉢、白磁、青磁、陶器、鉄滓などが出土した。

13世紀後半の井戸であろう。

#### 1644号遺構 (Ph.86)

B-1区4面より検出した井戸である。4面上で、長径2.7メートル、短径2.5メートルの卵型を呈する掘り方を持つ。井戸側は、木桶である。遺存状態はきわめて悪く、木質が残っていたにすぎない。直径は、71センチをはかる。井戸側の桶は、標高97センチまで検出、さらに下まで続いているのを確認しているが、標高1.65メートル付近から始まった湧水のため、それ以下は調査できなかった。

土師器（糸切り）、瓦器（筑前型、植葉型、和泉型）、青磁、白磁、青白磁、高麗青磁、陶器、煮道具（ハマ）、鉄滓などが出土した。

12世紀後半の井戸である。

#### 1689号遺構 (Ph.87)

A-2区4面で検出した井戸である。4面上で、直径約2.4メートルの円形の掘り方を持つ。井戸側は、木桶であるが、木質が残っていたにすぎない。直径は、66センチである。井戸側の桶は、標高1.6メートルまで検出されたが、湧水のためそれ以上確認できなかった。

土師器、瓦器、白磁、陶器が出土した。

12世紀代の井戸である。

#### 2182号遺構 (Ph.88)

B-2区5面より検出した。直径2.2メートルほどの掘り方を持つ。井戸側は、直径70センチの木桶であるが、遺存状態は悪い。

土師器（糸切り）、瓦器（筑前型、植葉型）、白磁、青磁、陶器などが出土した。

12世紀後半の井戸である。

#### 2184号遺構 (Ph.89)

B-2区5面検出の井戸である。掘り方は、直径約2.5メートルの円形を呈する。最下部で、直径32センチの木質痕跡を認めた。井戸側を見るには小さく、曲物の水溜であろうか。標高74センチで粗砂層

に達しており、井戸の最下部と思われる。井戸側については、明らかではない。

土師器（ヘラ切り）、京都系土師器（「て」の字状口縁皿）、黒色土器B類塊などが出土した。

11世紀代の井戸である。

#### 2986号遺構（Ph.90）

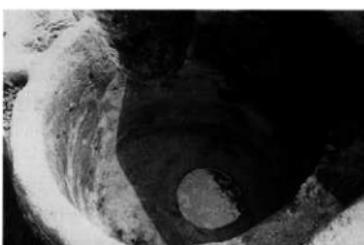
B-3・4区3面検出の井戸である。長径3.7メートル、短径2.9メートルの梢円形の掘り方を持つ。井戸側は、木桶である。標高1.1メートルまで木質を追ったが、湧水のため崩落し、断念した。

土師器（糸切り）、瓦器（筑前型、和泉型）、青磁、白磁、青白磁、天目、陶器、鉄滓、瓦などが出土した。

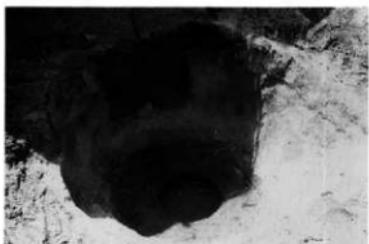
12世紀後半の井戸である。



Ph.85 957号遺構（北西より）



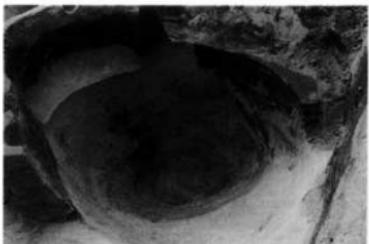
Ph.86 1644号遺構（西より）



Ph.87 1689号遺構（北西より）



Ph.88 2182号遺構（東より）



Ph.89 2184号遺構（東より）



Ph.90 2986号遺構（東より）

### 3021号遺構 (Ph.91)

A・B-3区3面で検出した井戸である。掘り方を確定した5面上では、直径3メートルほどの、大型の掘り方となる。井戸側は、直径64センチの木桶である。

土師器、青磁、白磁、青白磁、陶器、瓦などが出土しており、13世紀代の井戸であろう。

### 3175号遺構 (Ph.92)

D-3区5面より検出した井戸である。径1.2~1.25メートルの楕円がかった掘り方を持つ。井戸側は木桶で、直径43センチをはかる。

土師器、白磁、陶器が出土しており、12世紀代の井戸と思われる。

### 3201号遺構 (Ph.93)

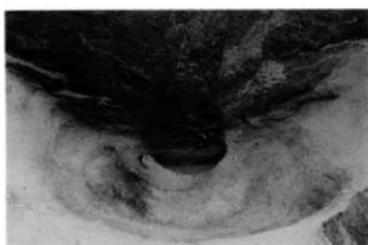
B-3区5面より検出した井戸である。径2.3メートルの掘り方を持つ。井戸側は、木質が確認できたが、桶か否かは判断できなかった。木質の直径は、62センチで、ほぼ正円である。

土師器（ヘラ切り）、白磁、陶器、高麗須恵質陶器、ふいご羽口などが出土した。

11世紀後半の井戸と思われる。

### 3231号遺構 (Ph.94)

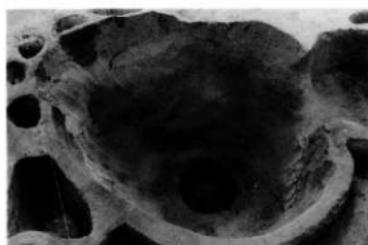
C・D-3区5面検出の井戸である。直径3.8メートルの、円形の掘り方の中央に、径68センチの木桶を据えて、井戸側とする。木桶の最下部は、標高1.27メートルで比較的浅かった。また、標高1.02メートルで粗砂層に当たり、井戸掘り方の最下部と思われる。



Ph.91 3021号遺構（南より）



Ph.92 3175号遺構（北東より）



Ph.93 3201号遺構（北より）



Ph.94 3231号遺構（北西より）

土師器（糸切り）、瓦器、青磁、白磁、青白磁、陶器、天目、瓦などが出土した。  
12世紀後半の井戸と考えられる。

## （2）土坑

### A. 方形堅穴状土坑

#### 1792号遺構（Ph.95）

D-2区4面より検出した。長辺2.0メートル、短辺1.6メートルの隅丸長方形で、検出面からの深さは30センチ弱をはかる。底面は平坦である。柱穴は掘られていない。

土師器（糸切り）、青磁、白磁、天目、陶器、瓦礫、瓦、ミニチュア石鍋などが出土した。

12世紀後半の土坑である。



Ph.95 1792号遺構（東より）

### B. 円形堅穴状土坑

#### 1350号遺構（Ph.96）

D-2区3面で検出した土坑である。長径1.6メートル、短径1.3メートル（推定）の精円形を呈し、検出面からの深さは、82センチをはかる。底面は平坦で、柱穴は見あたらない。

土師器（糸切り）、瓦器、青磁、白磁、陶器、瓦などが出土し、12世紀後半にあてられよう。

#### 1655号遺構（Ph.97）

A-1区4面で検出した土坑であるが、プランを確認したのは5面である。調査区外に出るため、全体を知りえないが、直径は2メートルをこえる。4面からの深さは、1.3メートルである。柱穴はない。土師器（ヘラ切り、糸切り）、白磁、陶器が出土し、12世紀前半と考えられる。

#### 2029号遺構（Ph.98）

B-1区5面検出の土坑である。直径1.5メートル前後の略円形で、深さ95センチ前後をはかる。  
土師器（糸切り）、瓦器、耀州窯系青磁、白磁、陶器などが出土し、12世紀前半に比定される。



Ph.96 1350号遺構（東より）



Ph.97 1655号遺構（北西より）

### 2030号遺構 (Ph.99)

B-1区5面検出の土坑である。径1.2メートルの略円形で、深さ90センチをはかる。柱穴は、認められない。

土師器（糸切り）、瓦器、白磁、青磁、陶器、瓦などが出土した。12世紀後半の遺構である。

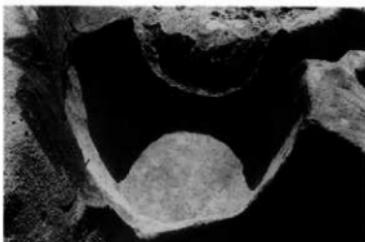
### 2177号遺構 (Ph.100)

C-1区6面で検出した土坑である。長軸2.1メートル、短軸1.9メートルの楕円形を呈し、深さ70センチで、底に一部に径60センチ、深さ10センチのくぼみがある。このほかに、径22センチ、深さ14センチの柱穴1基が検出された。

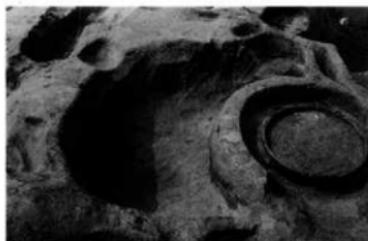
土師器（ヘラ切り）、瓦器、白磁、陶器、鉄釘が出土、11世紀後半の土坑と考えられる。



Ph.98 2029号遺構（北より）



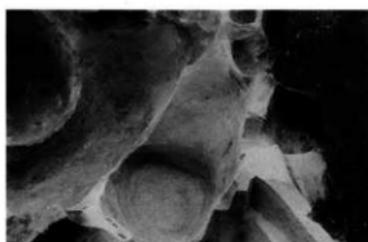
Ph.99 2030号遺構（北東より）



Ph.100 2177号遺構（南東より）



Ph.101 3008号遺構（西より）



Ph.102 3082号遺構（南東より）



Ph.103 3226号遺構（北より）

### 3008号遺構 (Ph.101)

A-4区3面検出。直径1.9メートルの円形を呈し、深さは1.07メートルである。底面は、一部二段掘り状になるが、柱穴などは持たない。

土師器（糸切り）、青磁、白磁、陶器、石鍋、瓦などが出土、13世紀代と思われる。

### 3082号遺構 (Ph.102)

E-3区5面検出。径1.9メートルほどの円形で、深さ1.3メートル前後である。底面は平坦で、柱穴などは見あたらない。

土師器（糸切り）、高麗青磁、白磁、陶器、瓦、石鍋などが出土し、12世紀前半にあたる。

### 3226号遺構 (Ph.103)

C-3区5面検出。長軸2.1メートル、短軸1.7メートル（推定）の楕円形を呈する。深さは、1.15メートルをはかる。底面は平坦で、径20センチ、深さ15センチほどの柱穴が掘られている。

土師器（糸切り）、白磁、陶器などが出土、12世紀前半に置かれよう。

## C. 方形板枠土坑

### 3224号遺構 (Ph.104)

C-3区5面検出。長辺1.2メートル以上、短辺1.0メートル、深さ55センチ前後の長方形の掘り方を持つ。調査時に確認した木質の痕跡によると、掘り方の壁にそって板材を立て、四隅に柱もしくは杭を立てて抑えていた（ただし北西角の杭は見あたらなかった）。残念なことに、雨にあって壁が崩れ、木質の遺存状況は、記録に残せなかった。遺構の性格・用途を特定する根拠には欠けるが、その構造からみて、地下の貯蔵空間が推測できよう。

出土遺物はないが、前述した3226号遺構に切られており、12世紀前半以前の遺構と知れる。

## D. 焼土坑

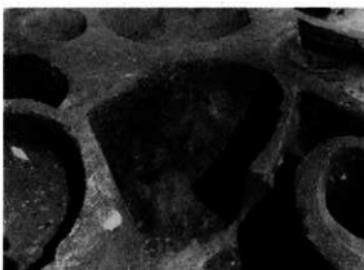
### 2950号遺構 (Ph.105)

C-3区3面より検出した土坑である。長辺1.4メートル、短辺0.7メートルの隅丸長方形を呈し、深さ48センチをはかる。床面と壁の下半部が、焼けて赤変していた。床面の焼土中には、薄く炭をかんだ粘質土が見られ、粘土を敷いて床面をつくった可能性が考えられる。

土師器・白磁・陶器片などが出土しており、12世紀代の遺構と思われる。



Ph.104 3224号遺構（北より）



Ph.105 2950号遺構

#### E. 土師器一括廃棄土坑

##### 284号遺構 (Ph.106)

C-2区1面検出の土坑である。長径1.7メートル、短径1.1メートルの梢円形の土坑の西側に、ひとまとめに土師器の壊・皿が廃棄されていた。土坑の壁にそって、流れ込んだように出土している。

土師器に混じって出土した白磁・青磁から、14世紀前半が想定される。

##### 376号遺構 (Ph.107)

E-2・3区1面検出の土坑である。長径1.5メートル、短径1.2メートル、深さ80センチほどの梢円形の土坑に、ぎっしりと土師器の壊・皿が廃棄されていた。完形品に限って法量を計測した。皿は、46点で、口径7.5~8.5センチに集中する。壊は87点で、ほとんどが口径12.0~13.0センチにはいる。小振りの一群としては口径10.5~11.5センチ、大型品では14.8~16.6センチのものが、小数認められる。

14世紀前半の土師器一括廃棄と考えられる。

##### 579号遺構 (Ph.108)

B-2区2面検出。細片化した土師器の壊・皿が一括廃棄されていた。13世紀後半頃であろう。

##### 1342号遺構 (Ph.109)

D-2区3面検出。径40~50センチの小土坑に、土師器の壊・皿が整然と重なって、詰まっていた。完形品のみ計測した。皿は12点で、口径9.0~9.5、器高1.1~1.4センチである。壊は7点で、口径16.0~16.5、器高3.3~3.7センチに収まる。13世紀代と思われる。



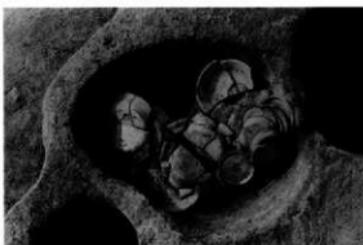
Ph.106 284号遺構（北東より）



Ph.107 376号遺構（南より）



Ph.108 579号遺構（北西より）



Ph.109 1342号遺構（南より）

## 6. その他の出土遺物

本節では、これまでの記述からもれた遺物の中から、そのごく一部を報告する。

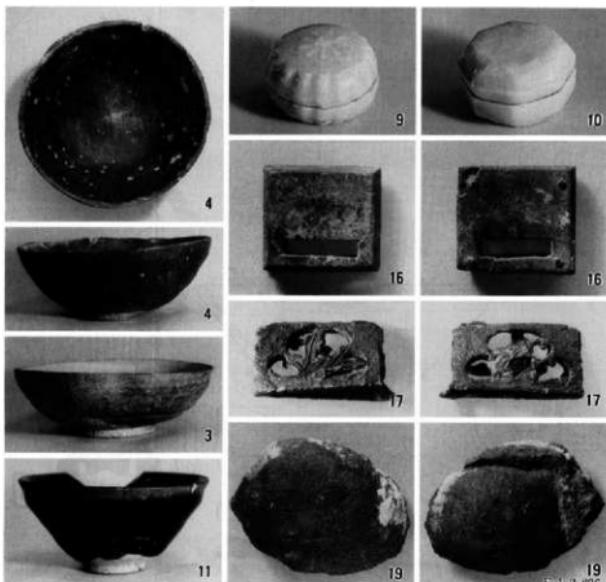
Fig.62の1~5は、瓦器である。1は、底部ヘラ切りの皿で、体部は横ナデ調整する。土師器の皿をそのまま瓦質焼成したものといえる。2~4は筑前型である。2・4は、筑前型としてはきわめて焼成がよく、全面銀化して光沢を持つ。3は、通有の筑前型であるが、内面の全面にわたって、厚く煤が付着していた。5は桶葉型の瓦器塊である。桶葉型は、本調査では89点以上出土している。6・7は、備前陶器のすり鉢である。博多遺跡群の備前すり鉢は、備前焼縦年4期以降一般化するが、これらは、3期に属するもので、比較的希な出土例といえる。8は、東播系須恵器のこね鉢である。神出窯であろう。

9・10は、青白磁の合子である。蓋と身が流れた釉で接着され、はずれない。10の底部には、型で「李家合子記」と陽刻される。11・12は、天目茶碗である。12は、白色緻密の胎土で、器壁は薄く、ラッパ型に大きく開く体部を持つ、浅碗である。本調査では、このタイプの天目碗が、比較的多く出土している。

13~15は、土製の塔である。13は、部位としては不明だが、円形の丸みのある台部に方形の段を作り出す。14は、五輪塔であろう。15は、塔の屋根部である。ヘラ先による沈線で屋根瓦を、円形の刺突で軒丸瓦を表現する。裏面には、丸く粘土を貼り付け、その中央に輪受けの穴をあける。ここに棒状の軸を差し込んで、下部とつないだのである。

16は、銅製の巡方である。裏金は、表金と同鍛された足を通して、その頭をつぶし固定する。透かしの角には、切り込みの筋が残り、鍛造後にあけられたことがわかる。17は、刀の鍔である。両側からひしゃげ、先が山形に接している。18は、滑石の印である。両面に「月」、「上」の陰刻が、側面の二面に記号が線刻される。スタンプした場合、逆字になる。

19は、2枚貝の化石である。完全



Ph.110 その他の出土遺物 (縮尺不同)

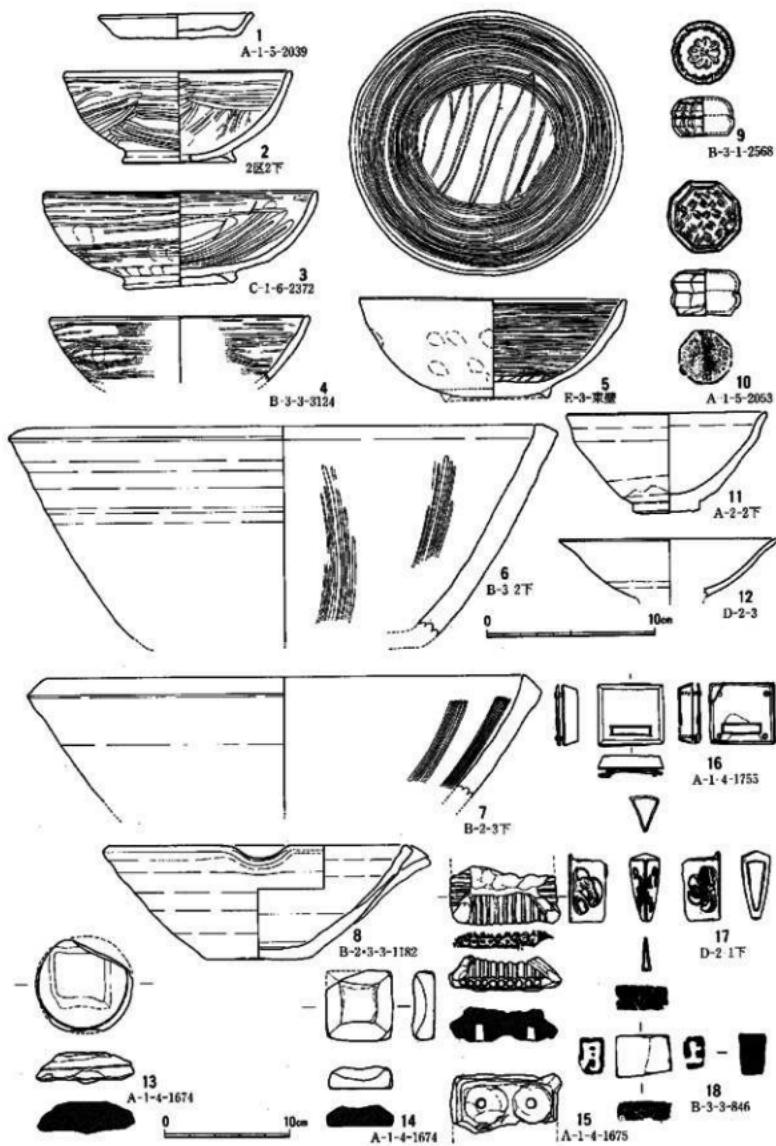


Fig.62 その他の出土遺物実測図 (1/3, 13~18…1/2)

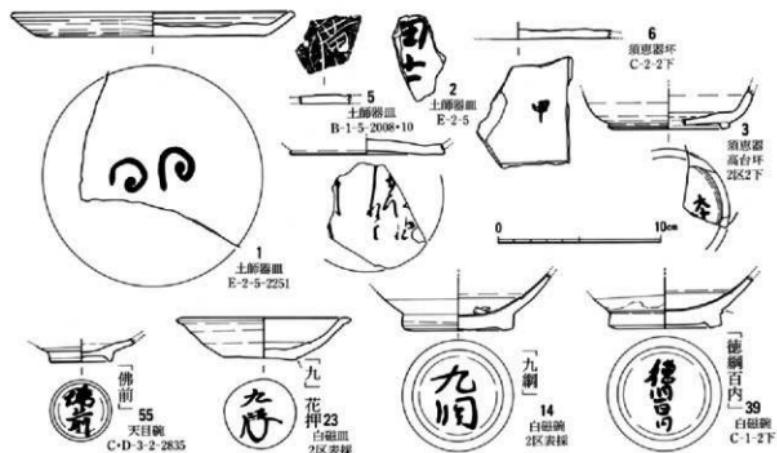
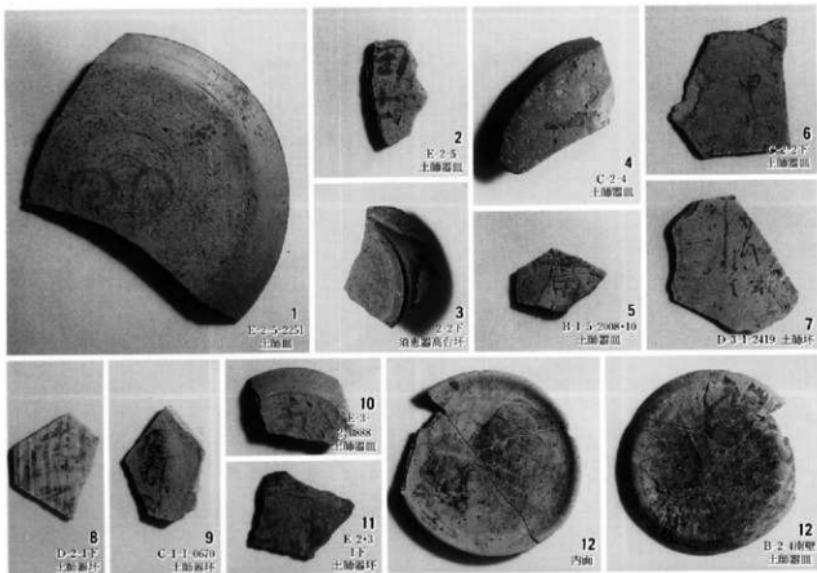
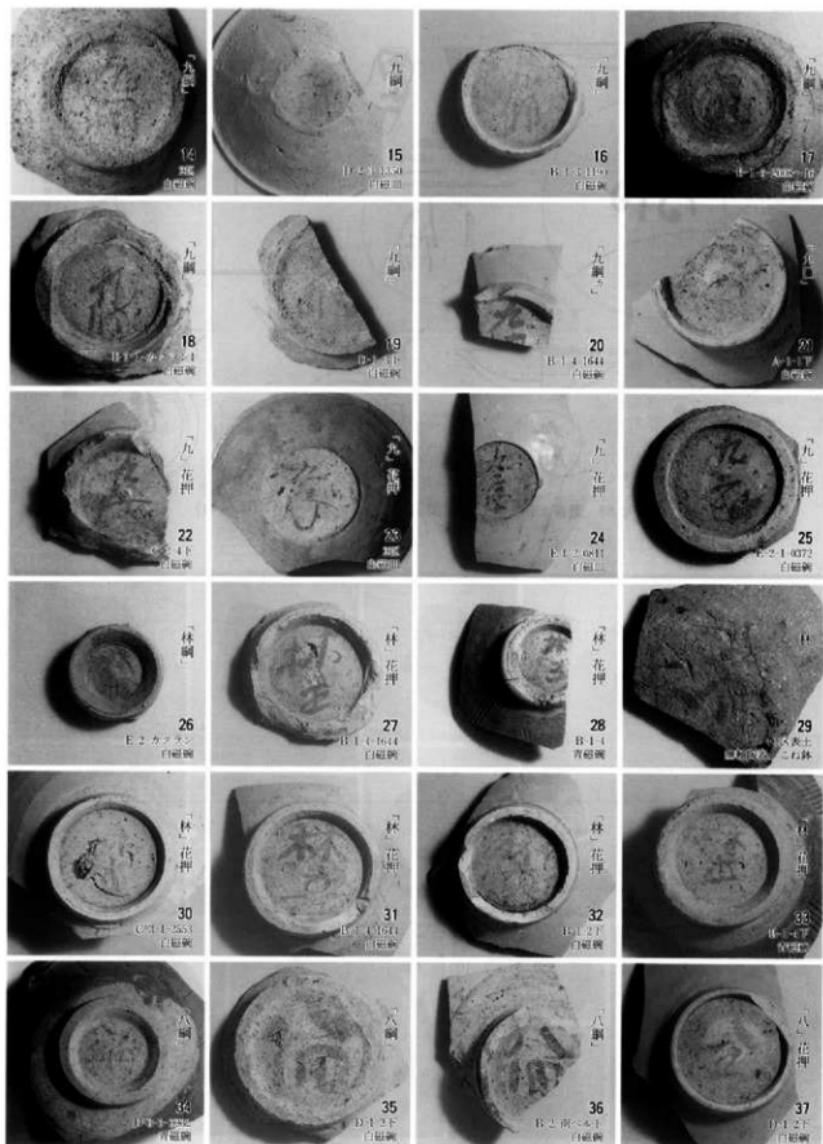


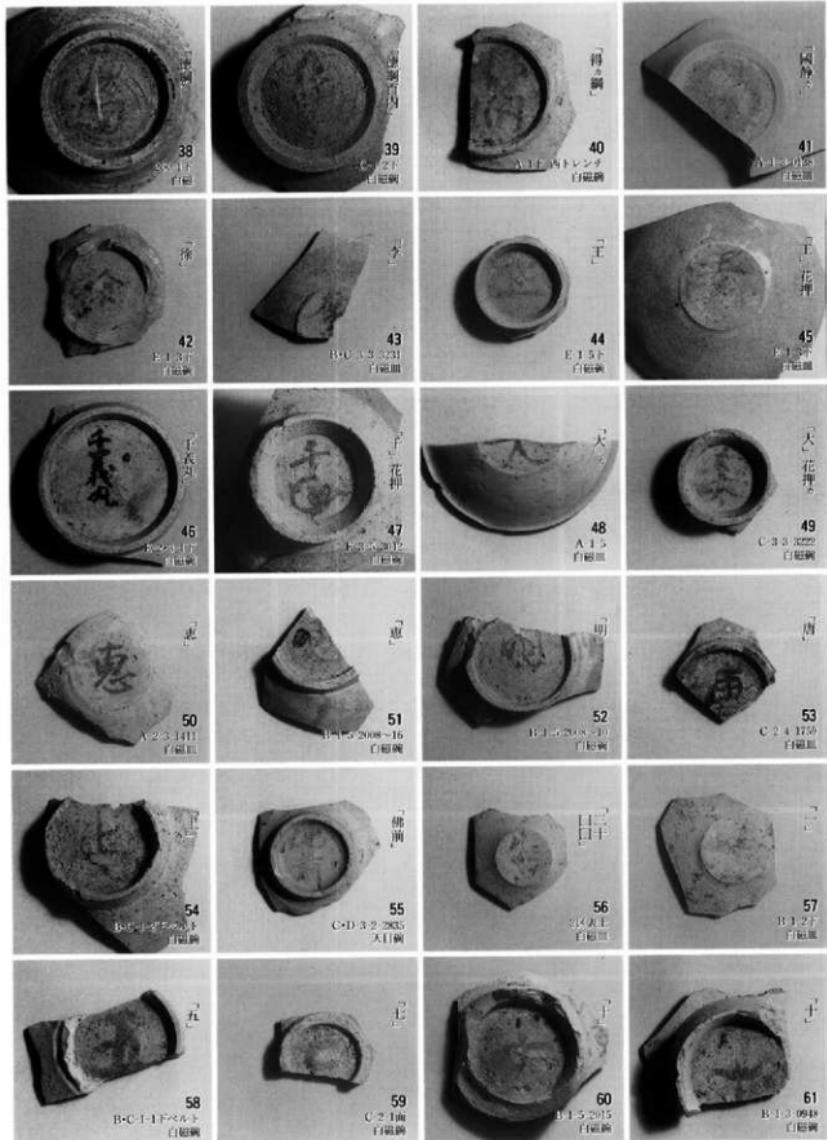
Fig.53 墨書き土器・陶器実測図 (1/3 番号はPh111~114に一致)



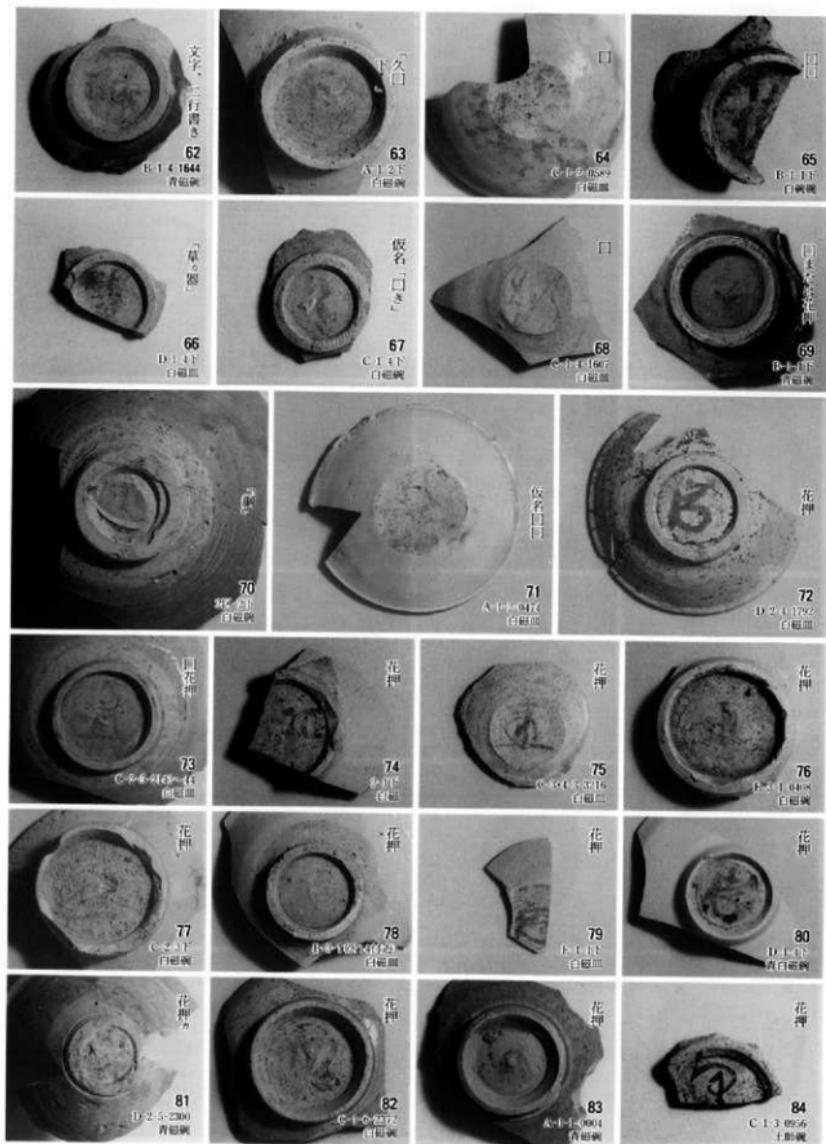
Ph.111 墨書き土器・陶器 1 (縮尺不同)



Ph.112 墨書土器・陶磁器 2 (縮尺不同)



Ph.113 墨書き土器・陶磁器 3 (縮尺不同)



Ph.114 墓塞土器・陶磁器4 (縮尺不同)

に石化し、一部に殻のカルシウム分が白く残る。中世の遺構から出土したのだが、博多遺跡群の近隣には、このような化石を出す地層は見あたらず、趣味的に持たれていたものとしか、考えがたい。

Ph.111~114にしめしたのは、墨書き土器・陶磁器である。1~6は、律令期の土器・須恵器である。3は朱書き、5は刻書きである。7~13は、中世の土器である。14~84は、輸入陶磁器の底に記された墨書きである。14~25は、「九」を、26~33には、「林」を冠した墨書きを集めた。34~40は、「網」関係である。41~56は文字、58~61は数字、62~70は文字・仮名、71~84は、花押である。

「九」・「林」の墨書きにも、「網」字を続けるものがある。今回の調査で出土した網首銘墨書きは、九網・林網・八網・徳網・得?網などがある。また、人名に関わるものとしては、国静?、徐、李、王、千義丸などがある。66は、「草器」と書いているようだが、音をとれば「そうき」となり、「僧器」と同義か。花押では、73~75が、31~33の「林」に続く花押と共通するようである。80の花押は、1827号遺構のFig.30~102、103と同じものであろう。

以上のほか、整理作業時には、注目すべき遺物として多数を取り上げたが、紙数の制約からほとんど触れられなかつた。ちなみにその点数のみ記す。弥生土器6点（東海系S字状口縁甕1点をふくむ）、古式土器6点（内、庄内式甕1点）、須恵器2点、灰釉陶器1点、綠釉陶器5点、瓦器117点（楠葉型89点、和泉型8点）、土器31点（京都系13点、吉備系2点）、国産陶器25点（瀬戸21点、常滑3点、備前1点）、越州窯系青磁47点、白磁133点、青白磁133点、青磁61点、天目43点、陶器34点、高麗青磁12点、朝鮮王朝陶磁器2点、窯道具5点、瓦5点、土製品16点、墨書き土器・陶磁器173点、鑄型13点、石製品49点（水晶の結晶1点、硯9点）、ガラス製品およびガラス関係7点などである。

## 7. 銅錢

遺物の項の最後に、本調査で出土した銅錢を一覧表にして示す。第1表は、銭種別の一覧である。鑄のため鐵文が判読できないものが多数をしめる。第2表には、遺構別にその内訳を示した。この両表を一見してわかるように、本調査地点では銅錢の出土量は少ない。また、縁の状態で出土した例はなく、まとまつた枚数が出土した遺構もない。

「神功開寶」は、A-3・4区3095号遺構から出土した。8世紀末頃の井戸の井戸側からの出土で、

第1表 出土銅錢一覧表

(総計 157枚)

錢貨名	王朝名	初 鑄 年	西暦	枚数	錢貨名	王朝名	初 鑄 年	西暦	枚数
五 錢	後漢	元初 5年	1118	1	皇宋通寶	北宋	寶元 2年	1038	6
開元通寶	唐	武德 4年	621	4	慶曆重寶	北宋	慶曆 5年	1045	1
乾元重寶	唐	乾元 元年	758	1	至和元寶	北宋	至和 元年	1054	2
神功開寶	日本	天平淨護元年	765	1	嘉祐元寶	北宋	嘉祐 元年	1056	1
淳化元寶	北宋	淳化 元年	990	2	嘉祐通寶	北宋	嘉祐 元年	1056	1
景德元寶	北宋	景德 元年	1004	1	治平元寶	北宋	治平 元年	1064	1
祥符元寶	北宋	大中祥符元年	1008	1	治平通寶	北宋	治平 元年	1064	1
祥符通寶	北宋	大中祥符元年	1008	1	熙寧元寶	北宋	熙寧 元年	1068	4
天禧通寶	北宋	天禧 元年	1017	2	元豐通寶	北宋	元豐 元年	1078	4
天聖元寶	北宋	天聖 元年	1023	3	元祐通寶	北宋	元祐 元年	1086	4
明道元寶	北宋	明道 元年	1032	1	聖宋元寶	北宋	建中靖國元年	1101	1
景祐元寶	北宋	景祐 元年	1034	1	崇寧重寶	北宋	崇寧 3年	1104	1

博多遺跡群としては、珍しく同時期の遺構から出土した皇朝銭である。

この他、「開元通寶」の模鋳銭が出土している。鋳がひどく、拓本を示すことができなかつたが、径が若干小さく、その分文字が圧迫されたように歪んでいる。

18世紀後半の270号遺構からは、雁首錢が出上した。キセルの雁首を平にする。つぶしたもので、錢としては若干小さ目となる。



Ph.115 出土銅錢



Fig.64 出土銅錢拓本 (1/1)

第2表 遺構出土銅錢一覧表

面	区	遺構番号	分類	枚数	備考	面	区	遺構番号	分類	枚数	備考
1面	B-1	064	解説不能	1		2面	D-2	776	景德元寶	1	
♦	B-2	148	寛永通寶	1		♦	♦	795	淳化元寶	1	
♦	C-1	187	崇寧重寶	1		♦	♦	795	聖宋元寶	1	
♦	E-1	268	解説不能	2		♦	E-3	849	皇宋通寶	1	
♦	C-1	270	雁首錢	1		♦	♦	876	解説不能	2	模鋳銭1枚を含む
♦	C-2	295	解説不能	4		♦	♦	887	皇宋通寶	1	
♦	D-2	332	寛永通寶	1		♦	♦	♦	治平通寶	1	鋳着
♦	E-3	385	解説不能	1		♦	♦	♦	元豐通寶	1	
♦	♦	413	寛永通寶	1		♦	B-1	920	解説不能	1	
♦	D-3	2452	解説不能	1		3面	A-2	140	解説不能	1	
♦	B-3	2579	至和元寶	1		♦	C-1	948	祥符通寶	1	
♦	♦	♦	元豐通寶	1		♦	D-1	1294	大觀通寶	1	
♦	♦	♦	解説不能	2		♦	C-3	2875	開元通寶	1	
♦	♦	2586	天聖元寶	1		♦	♦	♦	解説不能	1	
2面	B-1	536	開元通寶	1		♦	A-3	3021	解説不能	2	
♦	♦	♦	皇宋通寶	1	解説不能の2枚と付番	4面	B-1	1644	元豐通寶	1	折二
♦	♦	♦	嘉祐通寶	1		♦	C-2	1768	解説不能	1	
♦	♦	♦	正隆元寶	1		5面	C-1	1874	解説不能	1	
♦	♦	♦	解説不能	15		♦	B-1	2008-2010	解説不能	1	
♦	♦	539	解説不能	2		♦	E-3	3042	解説不能	1	
♦	B-2	579	解説不能	2		♦	A-3-4	3095	神功開寶	1	皇朝十二錢
♦	D-1	701	元祐通寶	1		♦	C-4	3141	明道元寶	1	
♦	♦	724	元豐通寶	1		♦	♦	♦	皇宋通寶	1	
♦	D-2	774	景祐元寶	1		♦	D-3	3162	解説不能	1	
♦	♦	♦	熙寧元寶	1		6面	E-1	2360	皇宋通寶	1	
♦	♦	♦	政和通寶	1		♦	C-1	2372	解説不能	2	

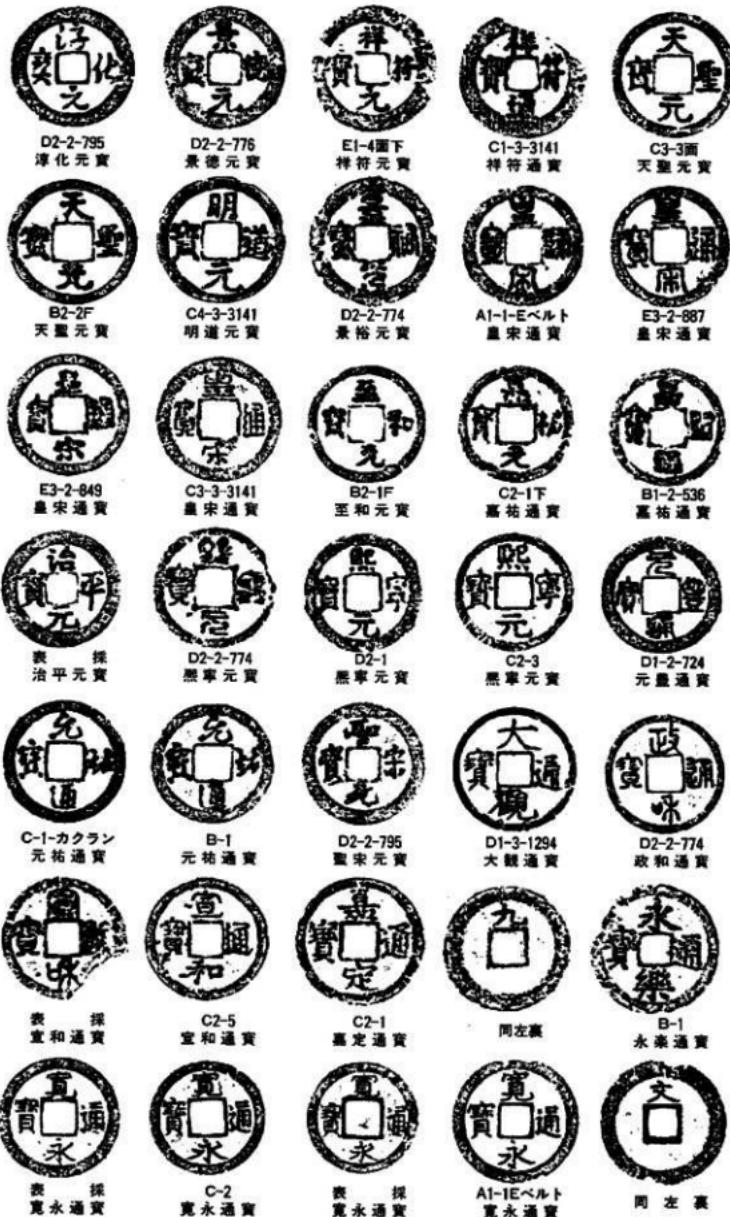


Fig.65 出土銅錢拓本 2 (1/1)

### 第三章 まとめ

以上、非常に簡略にではあるが、博多遺跡群第79次調査の成果について述べてきた。報告を終えるに当たって、若干のまとめと問題点の提起を試みたい。まず、箇条書きに、推移をまとめる。

- (1) 第79次調査地点における遺構の出現は、8世紀である。
- (2) 遺構が増加し、都市化したといえるのは、11世紀後半以降である。
- (3) 中世の遺構の終焉は、14世紀前半である。
- (4) 14世紀後半以後18世紀頃まで、耕地化していたものと推測される。

#### 1. 古代の遺構・遺物について

本調査地点における古代の遺構は、決して密度が濃いとはいえない。しかし、検出された遺構としては、井戸・土坑・掘立柱建物跡があり、生活を営む上で不可欠な施設は一応揃っている。

遺物では、銅製の巡方が出土したことが注目される。このほか、皇朝十二錢のひとつである「神功開寶」、墨書き土師器・須恵器、多量の焼き塙壺片などが出土した。全体に、博多遺跡群では、帶金具、石帯、土器墨書き、焼き塙壺などの出土が多く、また東西・南北を示す区画溝の存在から、官衙的な性格も推定されている。本調査での出土遺物も、この推定を支持するものと言えよう。

#### 2. 12世紀の輸入陶磁器一括廃棄遺構について

本調査では、1827号遺構（12世紀前半）、2714号遺構（12世紀後半）において、輸入陶磁器を主体とした一括廃棄がみられた。いずれも、火事にあった陶磁器を廃棄したもので、出土遺物のほとんどを輸入陶磁器が占める。それぞれの輸入陶磁器の内訳を第3表にしめす。量の多いものは商品であろうし、数点しかなく希少な器形のもの（1827号遺構の青白磁灯火器や白磁黒花盃・盃托など）は、宋商人の私邸の備品であろう。

1827号遺構からは、炭化した穀類も出土した。いまだ数量化するにいたらないが、麦が大多数を占め、小量の米が混じる。米には、長粒米と短粒米があり、脱穀したものとしないものとが共に含まれていた。出土した石鍋は、これらの調理に用いられたものと見て大過なかろう。

1539号遺構（地下室状土坑）は、1827号遺構との接合資料を含み、時期的にみても、関連遺構と考えられる。そこで、両遺構の遺物を合わせ見ると、ようやく土師器が一定量を占めるにいたる。博多網首の家はどういう構成をとっていたのか、史料的に明らかにすることはできない。しかし、日本人妻やその間にした子供がいたことはほん間違いない、日本人の使用人もいたであろう。土師器壺・皿・瓦器塊などは、彼ら日本人や、一部の宋人使用人の間で用いられたものと思われる。

また、楠葉型瓦器塊が出土していることに注目したい。楠葉型瓦器は、摂関家領摂津国楠葉牧で生産された瓦器である。和泉型瓦器などに比べて、地方にはあまりたくさんしなかった瓦器であり、その分布には片寄りがある。博多遺跡群は、西国では楠葉型瓦器の出土量がもっとも多い遺跡のひとつであるが、それにしても希少な遺物であることは間違いない。1539号遺構出土の楠葉型瓦器は、摂関家と博多網首との直接的な関わりを示すものとして注目される。

なお、1827号遺構出土の墨書き資料からは、花押の異同から、二人の宋人の関与がしられる。両名の関係は知る由もないが、二人とも博多網首であったとすれば、網首同士の積み荷への関わり方、商品の収藏の仕方、博多における家の持ち方など、提起される問題は多いと考える。

### 3. 中世の造構・遺物について

本調査の大部分を占めるのは、11世紀後半から14世紀前半の造構・遺物である。造構の種類別にこれを見ると、井戸では、11世紀後半2基、12世紀前半4基、12世紀後半(～13世紀初)7基、13世紀前半2基、13世紀後半3基と、12世紀後半から13世紀前半にかかる時期に集中する。検出造構の大部分を占める土坑では、土器の一括廃棄土坑に注目すると、13世紀代1基、13世紀後半1基、14世紀前半3基と、13世紀前半以前にはまったく見られない。方形・円形の堅穴状土坑では、11世紀後半1基、12世紀前半5基、12世紀後半2基、13世紀後半1基と、13世紀以降激減する。

井戸・堅穴状土坑の状況は、博多遺跡群の他の調査地点の場合と大差ないが、土器の一括廃棄造構については、注目しなくてはならない。これまでの調査例では、土器の一括廃棄土坑は、博多遺跡群で造構・遺物が急激に増加する11世紀後半からみられるようになり、15世紀頃まで見られる。さ

第3表 1827号・2714号造構出土輸入陶磁器組成表

1827号造構						2714号造構					
種類	器種	実測団番号	点数	備考		種類	器種	実測団番号	点数	備考	
青磁	碗	10 11	1 1	越州窯系 初期鹿泉窯系		無釉 褐釉	皮削耳壺 長原西耳壺	180~181 183,184	5 3	A群 A群	
青白磁	碗 灯火器	12 13	1 1			灰リーブ釉 褐釉	瓶	185~187 188,189	2 3	B群 B群	
天目	碗	14~22	9			灰リーブ釉 褐釉	瓶	191~194 195	12 1	B群 B群	
綠釉陶器	壺	23	1	越州系		無釉	四耳壺	196~205	20	B群	
白磁黒花	壺	24~26	3(2)	磁州系做定		無釉	こね鉢 行平	206~211,213 212	11 1	C群 C群	
白釉	壺托	27~29	3	磁州系做定		褐釉	壺 四耳壺	214: 215,216, 217,218	1 1 1	らっきょう壺 同一個体	
	壺	31~39	12	磁州系		總計			442		
	壺	40	1	磁州系							
	壺	41	1	磁州系							
	壺	42~44	3	磁州系							
白磁	小壺蓋 小壺 合子蓋 皿	45 46 47 49~74	1 1 1 48	広東系 広東系 広東系 広東系		高麗青磁	碗	4 5	1 1		
	碗	76,77	2	II類、広東系		青磁	碗	45 46,47	1 2	同安窯系 同安窯系	
	鉢	78	1	0類、広東系		天目	碗	6	2		
	鉢	79~84	6	広東系		白磁	皿	9 10 11 12 13~16 17 18 19,20	1 1 1 1 19 IV類 V類 VI類		
	鉢	85~87	1	同一個体、広東系		灰綠釉 褐釉	壺 小口瓶	21 22,23	1 1	A群 A群	
	鉢	88	1	広東系		褐釉	壺	24,25	1	A群 A群	
	皿	89	1	広東系		貴賤紙絵	盤	26	1	A群	
	皿	90	2			貴賤紙絵	鉢	27	1	A群	
	皿	91	1			貴賤紙絵	長原西耳壺	28,29	5	A群	
	皿	92	1			灰綠釉	壺	30	1	B群、越州窯系	
	皿	93	1			褐釉	瓶	31,32 33	2 6	B群 B群	
	皿	94	3			褐釉	切頭瓶 四耳壺	34 35~37	1 6	B群 B群	
	皿	95,98	2			褐釉	木注	36	1	B群	
	碗	96,97,99,100	6			褐釉	壺	39	1	C群	
	碗	101~113	17			褐釉	鉢	40	1	C群	
	皿	114~117	17			褐釉	壺 鉢	41,42	1	同一個体	
	皿	118~120	4			總計			69		
	皿	121~130	14								
	皿	131~146	168	IV類、小片は数えず							
	皿	147~150	7	V類							
	皿	151~156	6	VI類							
黑褐釉	壺	157	1	A群							
	水注	158	1	A群							
	水注	159,160	4	A群							
	水注	160~165	9	A群							
黄青釉	四耳壺	166	2	A群							
黄釉	四耳壺	167	4	A群							
	鉢	173~178	6	A群							
	鉢	179	1	A群							
黄釉鉄绘	鉢	168~171	4	A群							
黄釉鉄绘	水注	179	1	A群							

らに、12世紀から13世紀にかけては、検出例が最も多く、一度に廃棄された土師器の量もその後に比べて格段に多い。すなわち、本調査地点のように、13世紀前半以前の土師器一括廃棄がみられないのは、むしろ特殊と言える。

土師器一括廃棄土坑は、饗宴の名残とされ、都市的な土師器消費の姿と言われる。とすれば、本調査地点においては、13世紀前半以前には、饗宴は行われなかったことになる。ただし、土師器の壺・皿を用いる有り方は、すぐれて日本的な行為と言わなくてはならない。本調査地点の12世紀は、1827号遺構や2714号遺構に代表されるように、輸入陶磁器が大量に蔵されていた時代である。それらは、博多網首によって、中国から輸入された、商品及び私財だったろう。彼らの私邸の範囲を推定する手段はないのだが、本調査地点の一定面積がこれに含まれていたことはまちがいなかろう。博多網首ら宋人が、土師器の壺・皿を大量に使って饗宴をしたとは考えがたく、土師器の一括廃棄遺構がみられないのは、この地が宋人の居住区であったことの証しと見たい。

それでは、13世紀後半になって、にわかに土師器の一括廃棄が出現する背景は何だろうか。少なくとも、日本的な饗宴を必要とする住人が、ここに進出したと言うことはまちがいない。

ところで、本調査地点付近は、鎌倉時代末に鎮西探題が置かれたと推定される地域に近い。元弘の麥（1333年）の際、博多の聖福寺に寄宿していた京都東福寺の僧良覺が記した「博多日記」には、鎮西探題を攻めようとした菊池武時は、最初に探題館とまちがえて、櫛田神社に攻め入ったとある。武時は、博多の南を迂回して、南西方向、かつての管弦町方面から博多に攻め込んでいたから、櫛田神社と探題館は近接していて、武時の侵攻路からすれば手前に櫛田神社があったと思われる。櫛田神社の北側には大乗寺があり、北東側では、これまで数次の発掘調査例があるが探題館を思わせる遺構・遺物は見つかっていない。南と西では、武時の侵攻路のさらに手前になってしまふから、探題館は、櫛田神社の東にあったと見るのが妥当であろう。櫛田神社の領域も、社家を含めて、現在よりかなり広かったと思われるが、現在の櫛田神社と本調査地点の間には、いまだ発掘調査が行われていない地点が広がっている。積極的な証明は、発掘調査を待たなければならないが、この部分に鎮西探題が眠り、その一部または周辺の施設が本調査地点にも及んでいたものと推測したい。第2面や第1面で推定した、回廊風の柱列や建物跡は、これと関連したものではなかろうか。そうみると、13世紀後半以降として14世紀前半に土師器の一括廃棄が見られた理由も考えやすい。

14世紀前半を境に、本調査地点からは、遺構がみられなくなる。これは、本調査地点に限ったことではなく、第36次調査地点など博多浜の南辺では通有の現象である。ただし、南東部にあたる、第17次・20次・33次調査地点では、15・16世紀も通じて遺構・遺物がみられる。この理由については、さまざまな可能性が考えられようが、本調査地点のように、井戸など深く掘り込まれて最も残りやすい遺構すら検出されなかったと言うことは、本来遺構がなかったとしか考えられない。第36次調査地点の報告では、13世紀後半を境に遺構がなくなるとしており、本調査地点の所見と若干異なる。しかし、今回の調査による限り、時期的には鎮西探題の滅亡と近く、南北朝期に「元弘以来博多津中在家微弱（鎮西管領一色範氏日安状、南北朝遺文1481）」と表現された状況を受けて、探題の滅亡によって荒廃し、探題の故地であるためにその後の復興から見放された結果と考えたい。

そして、本調査地点は江戸時代中期に至るまで畠となつたのである。

以上、不十分ながらまとめと若干の検討を試みたつもりである。もとより、これで第79次調査の成果について語り尽くせたものではないし、何よりも報告できなかつた資料が大量に残ってしまった。別考する機会を期したいと思う次第である。

博多遺跡群第79次調査で出土した緑色ガラス容器の  
化学分析と鉛同位体比測定

名古屋大学名誉教授 山崎 一雄  
奈良国立文化財研究所 肥塚 隆保  
室蘭工業大学 白幡 浩志

### 1. はじめに

博多遺跡群第59次、第62次および第71次調査で出土した緑色ガラスについてはその化学分析値と鉛同位体比を報告した(注1、2、3)。今回の第79次調査でD-1区第6遺構検出面2203号遺構で緑色ガラス容器が発掘されたので、その分析結果を報告する。この遺構の年代は伴出した陶磁器より12世紀前半と推定される(別項大庭の報告参照)。

### 2. 容器の形状

容器の形状は図1、写真1および別項の記載(大庭)参照。

### 3. 化学分析の結果

分析のために入手できたガラスは風化変質した小片のみであったため、定量化学分析はできず、蛍光X線法による定性分析を行った。ガラスは多量の鉛を含み、銅で緑色に着色されている。またアルミニウム、カルシウム、鉄を含み、アルカリとしてはカリウムが存在する。従って鉛カリガラスである。また風化変質物中にX線回折法により $Pb_2Cl(PO_4)_2$ が検出された。これは第59次調査のピット0018で出土した壺内に付着していた緑色ガラスの風化物として発見された鉛のリン化合物と同じ化合物である。(注1。注2、3をも参照)。このリン化合物はおそらく遺構中で動物、人間の遺体、排泄

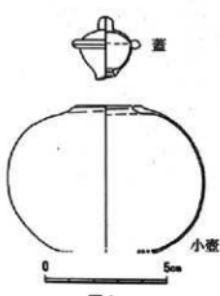


図1

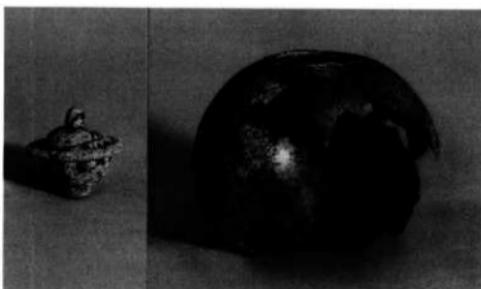


写真1

物などと接触していたために生じたのであろう。なお蓋の身と蓋とは同じ化学組成であると判断される。

#### 4. 鉛同位体比

ガラス容器の身の試料の風化変質物について鉛同位体比をFinnigan Mat 262 質量分析計で測定した結果は次の通りである。同位体比は風化変質によって変化を受けないから、測定することが出来た。

$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$
18.098	2.1268	0.86225

標準偏差  $2\sigma$  は  $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ ,  $^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ ,  $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$  についてそれぞれ  $\pm 0.02\%$ ,  $0.01\%$ ,  $0.01\%$  以下である。

同位体比を図示すれば(図2)前回報告した第59次、第62次、および第71次のガラスの値(対州鉛山産の鉛と判断された)とは一致せず、また他の日本産の鉛とも一致しない。その同位体比は中国産

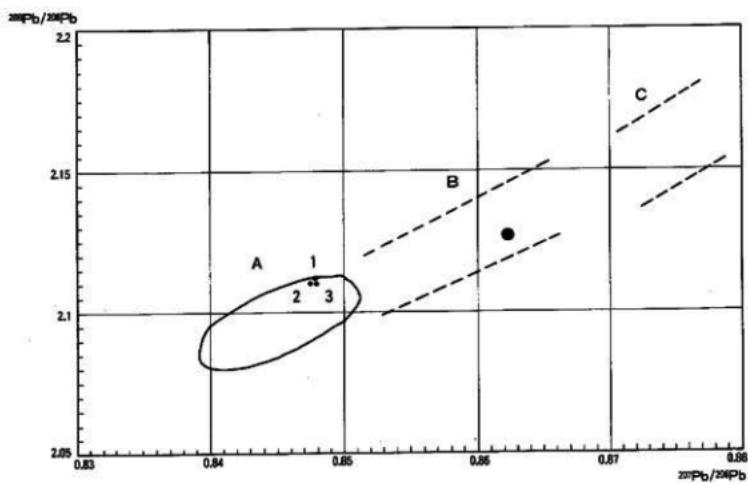


図2 第79次調査のガラス壺の鉛同位体比

図中の黒丸は第79次のガラス壺の鉛同位体比、1、2、3はそれぞれ第59次・第62次調査のガラスおよび対州鉛山の鉛の同位体比を示す。A、B、Cはそれぞれ日本産鉛鉱石、中国の後漢式鉛および前漢鏡の鉛の同位体比の概略の範囲を示す。

## 5. 考察

今回のガラスの定量分析値が得られないために、前回のガラスとの充分な比較ができない。しかし鉛同位体比が異なるため両者は同じ鉛鉱石で作られたとは考えられない。おそらく今回のガラスは上記のように中国製ではないかと判断されるが、今後の発掘により新しい試料と知見が得られることを期待したい。

注1 山崎一雄、肥塚隆保、福岡市埋蔵文化財調査報告書、第328集、p.87 (1993)。

注2 山崎一雄、肥塚隆保、白幡浩志、福岡市埋蔵文化財調査報告書、第397集、p.239 (1994)。

注3 山崎一雄、肥塚隆保、白幡浩志、福岡市埋蔵文化財調査報告書、第450集（印刷中）(1996)。

---

**博多50**

**福岡市埋蔵文化財報告書447集**

**1996年3月31日発行**

**発行 福岡市教育委員会**

**福岡市中央区天神1丁目8-1**

**印刷 栄光印刷株式会社**

**福岡市東区松田1丁目9-30**

---

